
加速する現想譚

無碍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

加速する現想譚

【Nコード】

N9072H

【作者名】

無碍

【あらすじ】

見てみればそう。ありえないことなんて其処等中に散らばってる。だから、ありえないってのはいえないわけで。幸か不幸か。異世界は俺にとっての現実となった。

1 s t 崩れ去る我が日常（前書き）

死閃はHPで執筆いたしますのでもしよろしければ作者紹介ページからどうぞ。

てかこれ思いつきなんだよなあ……o r z

1st 崩れ去る我が日常

学校の帰り道を留まる事無く歩く。

今年入学し、今は一学期終業式の帰りで、時期的に真夏の太陽が身を焼く。

言ってしまうば、俺は高校生と言う分類カテゴリーに入る。

自分が望んだ事を為すために勉学に励む。

それを実行するために高校に入る……なんて、大層な事を考えていたわけじゃない。

ただ周りに流されるように進学校へ行き、勉強して、いい成績を取る。

将来は家を継いで師範にでもなろうかな……とでも思っていて、現代の社会は甘くは無い。

多分、このまま行くと適当な大学に入って、適当な会社に入って、家の道場でもやりながら人生を終えるのだろう。

ぶっちゃけて言おう。今の生活マジでつまんねえ。

勉強は直ぐに終わるし、宿題も困る事は殆ど無い。

道場での稽古は楽しくもつまらなくも無い。在る意味今の生活の中ではこれが一番気を紛らわしてると思う。

友人と遊んだりもするが、趣味は余り合わない。つまり楽しくない。

かと言って、こんな生活を変えることの出来る触媒イベントが在るわけでもない。

つまりは、今の生活に愚痴愚痴五月蠅く言っているそこ等のチンピラと変わりはいしない。

そんな自分に自己嫌悪すれど、自慢できるような所も無く。

刺激も何も無い生活にうんざりしているのだ。

いきなり命がどうのこうのという大冒険までとは行かなくても、何か、心躍るようなことは無いだろうか。

「つまんねえ……」

半ば口癖とかしている愚痴は、誰にも聞かれる事無く大気に混じっては消える。

ふと、風を感じた。

今までは向かってくる風であつたのが、いきなり押してくる風に変わった。

温い風が肌を舐め、体がぶるりと震える。

……気味悪いな。

おぞましいものを感じて、足が自然と速くなる。段々と風が強くなる。

「何だこれ……？」

おかしい。絶対におかしい。

自然のものじゃない。やばい。

頭の奥で本能が警鐘を鳴らしている。

これ以上進むな、戻れ、逃げろ。

引っ切り無しに言葉が脳裏を駆け巡り、足が早足になり、やがて

走り始める。

体力には自身が在る。学校でも負けたことは無い。

「はっ、はっ、はっ……！」

やばいやばいやばいやばいやばい……！！

殆ど疾走になり、曲がり角を曲がる

「は……？」

クロがあつた。

真つ白なキャンバスに虚無の如きクロが描かれた如く、空間を食つたように丸いクロが存在していた。

背を押してくる風はどうやらアレが周囲の大気を吸い込むことにより発生しているらしく、どうみても危ないものにしか見えない。

後退りして戻ろうとしてもアレの吸い込みが強すぎて、下がるところか逆に吸い込まれかかつてる。

……ああくそ何だあれ、死ぬのか、俺こんなとこで死ぬのかよ……！！？

まだ何もしていない。

爺も倒してなければ、これから始まるだろう夏休みを過ごしてもいい。

やりたい事は思ってみれば中々あって、それが走馬灯のようだと、どこかさめた頭で考えており。

足が、地面から、離れた。

終了。ジ・エンド。俺の人生暗くなっちまった。

「あ」

一度支えが無くなれば一気に行くのは自然の事で。

「うわあああああああああああああああああああ

!!!!!!!!!!」

この日、俺の退屈でありながらも普通の毎日は崩れ去った。

2nd 召還されると神殿だった

景色がまわる。

混ざる。

狂う。

ぐるぐるぐちゃぐちゃごりごり××

何かが俺の身体を触っている感じがして、それでも何も見えない、動けない。

なのに違和感も無ければ恐怖も無い。

不思議と、懐かしさすら覚えてしまう。

微かに、何かが見えた気がした。

「う、ああ!？」

高所からの落下なんて体験した事が在るわけでもなく、何とか身を回して着地。

慌てて周りを見てみれば明らかに現代とは違う趣の部屋ですねオイ。

石造りで、その上正方形。背後に一つだけ扉があって、辺り一面は微かにしか灯が無い。

……なんだよ此处？

というか、何人かの人影がこっちを向いてたりもして。

イ

ヤ

!!!!?

俺は視姦されて喜ぶ趣味でもない。
ああもうなんだなんだ此処？

人影の中で俺から見て真正面の人が出てきた。

明らかにファンタジーな感じのローブに身を纏っていて、顔が見えない。

「ようこそお出で下さいました、我らが救世主様」

すべり出た声は女性のもので、しかも若い。

てか救世主って何だオイ。

「いや、救世主って何？ てか此処何処？ いやそれ以前にアンタ誰だ？」

口から半ば無意識に出た言葉はまるで異世界に飛ばされた主人公のテンプレ的な言葉で

……異世、界！？

「私は巫女、ノルン・ディストリアです」

うわ、何このマジテンプレ設定。

「俺は、すどうたつや周藤巽夜」

眼前のフードを被った人がフードを取り、その下から出てきたのは……って金髪碧眼の美少女！？

「ああ、救世主タツヤ様……。お会い出来て至福の極みに御座います……」

うん、いきなり感極まって涙を溜めつつ此方を上目遣いするのはやめようか。破壊力大きすぎるから。

それから話を進めると、こうだ。

某竜のクエスト的に魔王が現れて、ソレを撃退するために何人かの救世主が各国から召還されているらしい。

つまりはとばっちり食らったわけか俺は。

「質問良いですか」

「何なりと」

「何で俺なんですか」

「召還はランダムで……伝承には相応しいものが選ばれる、と」

何ぞソレ。完全に被害者じゃないか俺。

と、言うか、その話だと俺は俗に言う魔物とかと戦う羽目になるわけですが。

……勝てるのか、俺？

取り敢えずは抵抗せずに、このまま従おう。

逆らうって言うっても丸腰でこの人数相手だと相打ち程度だろうし、
なによりまさか『魔法』とか使われたら勝てる気がまるでしない。

「まあ、よくは分からないけど……ひとまず、把握した」

「そうですか？　よかったぁ……」

ぱあ、と、花のように笑う金髪碧眼美少女巫女、ノルンさん。
いや、笑顔はとても魅力的なんですけどね。

溜息をついて、この神殿っぽい所から促されるままに外へ出た。

気分的には犯罪者の感じだった。

3rd 淡々とした思い返し

「つまらねえ……」

溜息とともに吐き出した言葉は、俺に宛がわれた豪華な部屋に散った。

下らない。この世界、というか、この国はおかしい。いや、ある意味では当然というべきか。

俺という『救世主』の名の看板を己の派閥に組み込もう。そんな意志がまざまざと感じられる。というか見て取れる。ていうか視れる。

権力者が更なる力を求めて壊れていくなんてのは元の世界でも良くあった。

というか、さっさと此処を出て自立しないと政治道具に使われて拳句に魔王との戦いなんか叩き込まれて死亡、なんてのが眼に見える。

というか、だ。

魔王というのが本当にいるのかよく分からない。

実際問題、魔王を見た、という人物がいなし、そもそも最近魔物、つまりはモンスターによる被害が多いために魔王が出現したのでは、という。

なんという安楽な考え。

だが実際、民を安心させるのにそれ以上の効果の有るものは無いだろう。

魔王と言つ憎しみの対象。そして救世主という信仰の対象。自分で言つてなんだが、本当に道具みたいだな。

「まあ、逃げるつて言つても当分先かな」

なんせ力も無ければ金も無い。

魔術というのは宮廷魔術師だとか使用人の人などに少しずつ教えてもらっているが、武術はどうやら此方では魔術とか魔力で肉体を強化しなければ戦えないレベル。

幸い、救世主の特権みたいなもので魔力だけは異常に馬鹿でかいのでそれを使えば何とかまともに戦えるらしい。

というか、技術だけは大丈夫なんだそうだ。足りないのは身体能力。

……いや、結構自身あつたんですけどね？

流石にさ、いきなり王国騎士団長相手に一本取れつて言うのは反則でしょ？

しかもいきなり剣を渡してくるし。

結局は2 - 1で負けたのだが、恐ろしく強かった。

しかもアレで魔術を使つてなかったと言つただからマジで怖い。

というか、武術は家の爺に教えてもらっていたわけだが。

代々続く由緒正しい名門の武家だそうぞ。

糞古くて現代では使えなさそうなものは省いたけど、それでもそこら辺のチンピラとかよりは棒や剣などの扱いは上手いつもりだ。

今頃はあつちでは大騒ぎに……なつてないか。

基本放任主義、というか放置主義だし、そもそも両親死んでるし。夏休みだから爺は気にせず……いかん、腹立ってきた。

また一つ溜息をついて、ベッドに潜り込みながら灯を消すのだった。

4 t h 突風による僥倖

「ですから、魔力の道筋を中から外に作るんです!!」

「いやだからソレをどうやってするのかと」

何と言うか、起きて早々巫女さん……つまりはノルンさん（王族らしい）に魔術を教えられてます、何だこれ。

朝飯を食べようとしたら姫さんの私室に連れ込まれ、いきなり”魔術を使ってください”といわれても出来るわけ無いでしょうが。

そもそも最近少しづつ身体の中で魔力を循環できるようになったばかりで、外への事なんて全く気にしてなかったし。

「だから、そうじゃなくて!! 魔力を外へと放出するんです!!」
「うーん……」

イマイチよく分からない。何と言うか、どうやったら外へ出せるのだろうか。

外への道は作れても、癖で身体へと戻ってきちまうんだよな。どうするんだろ。

「何でタツヤ様は身体へと戻せるんですか……」

「いや、それはもう癖だから」

そんな呆れた眼で俺を見ないでっ。

常識的に考えれば、俺がやっている事はマジで凄い事らしい。

在る意味で魔力の永久機関。実際、姫さんが出した魔力も中に戻せた。

いや、どういことなんだろうねホント。

「何と言うか、”循環”する道じゃなくて、”放出”する道を作るんです」

「あ」

そうか。そうだよな。

同じ道でやろうとするから悪いんだ。

ならば新しく、その用途に沿ったものを作ればいい。

とゆーわけで。

「ん……」

感じとしては水鉄砲を想像。

一度タメをつくり、意志の引き金で力強く放出する銃。

新たに作られたそれに魔力をタメて、ちよろつと、弱い感じで引いてみる。

ご、という地鳴りにも音が響いた。

瞬間的に何かが弾け、闇色の風が突っ走る。

それは姫さんのスカートを捲り上げ……おお。

「ちょ、ちよつと！？　タツミ様何してるんですかあっ！！」

「あ、いや、そのごめん。在る意味ワザと」

「殴りますよ！？」

悪気は無いんだってば。

ともかく、怒られる前に俺は姫さんの私室からすたこらと逃げ出した。

うん、白だったなあ。

5th 今後につく

「ふっ、シィ、はあああっ!!」
「うーん……」

次々に此方へと降りかかってくる剣戟を時には避け、時には剣で（借りた）弾く。
時にはフェイントを、時には愚直なまでの剣筋は明らかに達人と呼べるものだ。

しかしそれを淡々と避けたりする俺ってなんなんだろう。
いや、ぶっちゃけて言うと、こっちに来てから、というか呼ばれてから、日に日に身体能力が上がってますね。何でだ。

元々鍛えていた事もあって、今じゃもうほら、第二王子さん（騎士団の連隊長らしい）さえも軽々と。

というか、そろそろ付き合うのも疲れてきたし、終わらせよう。

「おおおおおお!!」
「……」

打ち込まれてくる太刀筋に沿って、流すように裏拳を入れる。
剣を弾き、そのままに蹴りを入れた。

「が、あ?」
「ういしょっと」

そのまま適当に震脚で正拳付きを叩き込む。
吹っ飛ぶ王子様。

直後、それまで、という声が響いたりした。

「救世主様は本当にお強いですね。何か習っていたのですか？」
「え、まあ少し」

ああめんどい。

聞かれるのが判っていたからこそ殆ど動かなかったが、それでも興味をとめることなど出来ないのか。

つい先程までいたのはこの国の騎士の鍛錬場で、そこで模擬戦をやったわけだが。

俺なんかに負けていいのか連隊長。オイ。

かるく言葉を交わしてさっさと出る。

というか、気になって使用人方に聞いてみると、どうやら此处、相当危ないらしい。

魔物などのレベルは低いが、国の上層部などが割れていて、そろそろ危ないかも、と。

いや、うすうすわかってはいたんだけど。

つー事で、この国から出る事に決定。

誰かに使われるなんてのは真っ平ごめんだし、死ぬのはもっと嫌だ。

どうやらこの世界にはギルドが在るらしく、これもテンプレ設定。

其処に所属して、依頼をこなしていけばどうとでもなるだろう。

幸い俺の顔はまだ一般には出回ってないみたいだし。

その日、早速、登録しにいった。

ギルドではランクGから始まり、一番上はSSらしい。世界中でも片手の指程度らしい。

Gは言ってしまうえば子供の手伝い程度のことしかない。本格的な依頼はEから。

ランクDまでは試験で取得できるので、それを試しにしてみたら楽だった。

依頼内容は犬牙狼五匹の討伐。

城から借りてきた剣で直ぐに終わる、が。

命を奪うということに対してやはり耐性が無く、帰ってきてからは何度か吐いた。

それでも生きなければならぬのだろう。

ああ、くそつたれ。

6th ゴブリン騒ぎ

この世界で言う魔術というのは、個人の属性によるものと、世界が内包する属性を扱う二つの種類が在るらしい。

個人の属性を持つている人はあまり居ないらしく、属性を持つている人は身体のだこかに紋章が現れるらしい。

で、今まで俺が教えてもらってたのは世界の属性を扱うものらしく、何か物理法則の域を出ないらしい。いや、当たり前だけど。

で、その紋章とやらが現れた人はなんか、物理法則を超えたことが出来る、らしい。

瞬間的に互いの位置を越えたり、無時間で遠距離から打撃したり。

果ては一気に破壊できるものも在るらしく、恐ろしい。

ともかく、何でこんなことを言ってるのか、というところ。

「あー。これが紋章か……？」

朝起きてみると手の甲に狼の紋章があった。といっても何か変わった感じは無いけど。

で、問題なのはこれからのこと。

多分これを気にやれ魔物退治だ何だと押し付けられかねない。つまりは、この城を出る時が来たって事で。

大して思いいれもないので、誰にも告げずに抜ける。

時刻は深夜。窓から飛び降りる。
といっても此処は六階で、普通に降りたら先ず間違はなく死ぬ。
幾ら俺でも。

なので自身に魔術による強化、及び重力軽減魔術。
音も無く降りる。

即座に術式を構築。式題は探索。

俺にしか判らない波を放つと、巡回の兵士が此方へとやってくる
途中だった。

「やべ」

気配を殺して森へと入る。

そのまま音を立てないように移動する。

さらば、窮屈な城の生活。

夜が明ける頃には城下町へと到達した。

下級の兵士は此処には来ないため、ばれる心配は無い。
服は適当に貰った。侍女さんから。

そのまま歩いてギルドへ行く。

出来れば今日中にも此処を立ちたい。

と、そんな願望を抱きながらギルドの門を叩くのだった。

実際、隣の国　この国がアリグスト王国、隣がレイングル商国で、そこへ行く護衛、というDランクの依頼が見つかった。ただまあ、ソレが何か面倒で。

いや、一応の装備は整えたんですけどね？

各種最低限の生活用品。皮鎧、各種装備、剣。

大抵の事なら一人で出来るようにされたため、何を買いえばいいのかは直ぐに判った。

でも、これで納得しない人は居るわけで。

「おい小僧！！　テメエDランク成り立てなんだろ？　そんなのでまともに使えんのか？　ひやはは！！」

これにかかる10ぐらいしたらいい感じ。面倒なので放置放置。でもウザイ。

しかも服装が在りがちな山賊風味って。何だこれ。どこのゲームだオイ。

結局は依頼者の女の子（貴族）が黙らせてくれたんだけどね。しかも可愛かったよ。

馬車に揺られて約三時間。
慣れない旅だからケツ痛い。

とか思っている。

「ぎゃあああああ！！！？」

「ひひひひ！！」

見事に魔物の群れに遭遇。

あの山賊風の馬鹿どもはさっさと殺されるか逃走した。

実質、いまこの馬車を守っているのは俺と魔術師の子と戦士のあんちゃんと錬金術師の姉さんと神官の子だけ。

つつても、ねえ？

「シィッ！」

人たちで小型の魔物を切り捨て、左手で術式を構築して纏めて頭を消し飛ばす。

というか、こいつら所謂ゴブリンですね奥さん！

「くそつたれ！！ 何でこんなにゴブリンが多いんだ！！！」

「アタシが知るわけないだろ？ ほい、燃え上がりな」

「翔る風よ、集い足りてその身を研ぎ澄ませ……」

「偉大なる主よ！ 我らに御身のご加護を！！」

うん、本当に多い。

今でも何匹殺したか判らない。

既に殺す覚悟はきっちりとしているが、それと肉体的な疲労は別問題。

大規模破壊魔術は流石にゼロコンマ数秒で構築は出来ないし、かといって此処を離れたら一気に押し込まれそうだし。

ああもうメンドイ。

試しに使ってみる。

剣に魔力の道を通し、剣そのものを変えていく。

魔力を通しやすいように、良く切れるように、頑丈になるように。

構築は一瞬ですむ。大規模でなくとも十分に創り替えた。

ただ判るのは。

「あ、これはマジでヤバイわ」

試しに魔力を通して振るってみれば遠くまで一気に切れた。おお。

もしもこれに出来うる限りのものを入れれば？

背中が震えた。恐怖で。

でもやるしかないよなあ。

「皆さーん！　ちよい俺の前に敵を集めてくださーい！ー！」

全員が頭狂ってるのかという視線を向けてきたが、真顔なので大丈夫だったらしい。

十数秒後、俺の前にゴブリンが集められた。
よしOK。いっちょやりますか。

剣は腰。左手は沿え、右手は適正な力へ。
無用な力を抜き、一気に

……切る!!

「おおおおおおあああああああああ!!!!!!」

構築のままに、術式を追加。
式題は衝撃。

真横に振り抜いた剣から放つ。
意志で切れば後には何も残りはしない。

一瞬の静寂。
完全な停止から動へ。
動いたのは　ゴブリンだった。

全ての胴体が落ち、鮮血を撒き散らす。
ドサリ、という音が連続して、全てが。
終わった。

「やった……」

安堵、緊張が抜ける。

「あ」

意識が落ちた。

気付けば馬車の中だった。

外傷は殆どなく、魔力も安定している。

特に異常はなく、身体を動かそうとすると、

「あ、れ？」

一気に力が抜け、また寝転ぶことに。

しかも頭が打ち付けられ、痛い。盛大な音がしたよ。

しかしソレで気付いたのか、神官の小さな女の子が此方へと顔を出した。

「あ！ 気が付いたんですね！」

「ん……」

わずかに首肯する。

今気付いたけど、体が凄く揺れてる感じがする。船酔いみたいな。

「あの、俺、起き上がれないんですけど」

「あ、多分それは初めて大きな魔力を消費したことによる酔いだ」と

思いますよ。直ぐに直ります」

そうなんですか。

てか、あれってでかい魔力だったのね。

魔力に関しては全く減った感覚がないんですが。

「まあ、今は寝といたほうが良いです。疲れてるでしょうし」

「ん、じゃお言葉に甘えて」

眼を閉じれば、直ぐ其処に眠りはあった。

次に起きる時には直ってますように。

7th 何か新事実

「いや、クレインさん凄いですね、あの最後の時のあの技!!」

「いやいや、そんな事無いですよ」

「そんな事無いです!! だって一撃で何百のゴブリンを倒したんですよ!!」

「ははは……」

どうもこんにちは、周藤巽王ことクレインです。

いや、勿論最初から偽名でギルドに所属してました。てへ。

「……一体、どうやったの」

「ん？」

いつの間にか背後に魔術師の女の子が居た。正確には個人の属性を持たない精霊魔術師らしい。

年は多分俺より一つ下くらいか。
ともあれ。

「何が？」

「……最後の、一撃。……貴方が持つてる、剣。……その、力？」

あー、はいはいはい。そういうことね。

いや、咄嗟にしてはこの剣良く出来たよ。ホントに。

試したこともないし、出来るかなと思っただけ出来たよ。

ぶっちゃけ、出来るという確信は全くなかった。

行き当たりばったり。土壇場。まあ色々な言葉は在るけれども。

取り敢えずはそういうことにしておいた方がいいな。

「うん、まあ」

「……そう。……でも、あなた自身の魔力も、凄い。……いい研究対象」

おい、何か今悪寒が走ったよ。

何か後ろ向いてみると頬が赤くなった状態で舌なめずりしつつ此方を見下ろしてくる黒髪ロングの美少女が。

だからイヤ

!!!!

俺にソツチ系の趣味はないの！ どっちかというと責めてごほんごほん。

ともあれ。

「研究対象は勘弁ね」

苦笑して言うと、彼女は以外にも”そう”とあっさりと引き下がった。

何か違和感を感じつつもとりあえず、

「にしても、戦士のおっちゃんが酔うとはなあ……」

屈強な身体に反して意外と繊細なのな。

今は後ろに乗りつつ錬金術師の姉さんに薬処方してもらってる。
というか、実質依頼主の子も含めて女性だけだから居心地が悪い
ったらない。

しかも全員が全員、こっちに好奇心のカタマリのよーな眼を向けてくるから余計に体がむずがゆくなる。

「いや、それよりクレインさんですよ？」

「へ？」

いきなり黙ってた依頼主さんが声をかけてきた。

年は恐らく俺より上。でも子供っぽいというか俗世的というか。

「一撃でアレだけの魔物を倒すなんて……本当はAクラス並の実力者ではないんですか？」

「は?!」

い、いきなり何を言いやがりますかこの子はっ!

実際問題平均はわからないけど、多分それでも俺の力は反則なん
でしょうね。

でもソレをひけらかす必要はないし。

「いやいや、アレは剣が掘り出し物だし、魔力も限界まで出したし」

剣が許容できるまでの限界だけだね。うん、嘘じゃない。

とりあえず貴族のお嬢さんは納得したようで、座りなおしてはく
れた。

ああ、速く目的地まで着いてくれないかな。

「依頼完了、と」

「皆さん護衛有難う御座いました。報酬はギルドカウンターでもらってください」

こうして王国からの脱出が成功した！！

報奨金は五金貨。

この世界では銅 銀 金みたいで貨幣価値が上がるんですけれども、銅が日本セルで言う百円。銀が一万円ウィル。金が十万円ソル。

で、今回は五十万稼いだことに……ってなに！！？

「ちょ、お嬢さん、これは何か報奨金の額が増えてる気が……」

最初は五ウィル七セルだったはずなんですけど。

「予想外なゴブリンの大群に襲われたので、その分、報奨金を上げさせてもらいました。あと、お嬢さんじゃ無いです。ちゃんとエリカ・ウェルト・アーデンハイツっていう名前が在るんです！！」

「あ、すいません」

長いな、やっぱり貴族ですねお嬢さん。あ違った。まいいか。

「クレインさんは、この後どうするんですか？」

「ん？ 俺？」

元の世界に帰るって言う漠然とした目標なら在るけど……。
でも何も情報はないしな。
うーむ……。

「取り敢えずはこのまま旅を続けると思う」

「だったら、少しの間でもいいので私の家に来ませんか？」

「へ！？」

今なんと仰いました！？

貴族のお屋敷の来ないか、だと……！？
へへ、久々に血が滾っちまうぜ……！！

さて、現実逃避終了。

「えーと、それは何で？」

「簡単な話です。一番の武勲はクレインさんにありますので」

「あー……」

そういつと皆さんが嫌な顔をするんじゃないか……て何でしないんだあ
んな達は。

むしろ笑顔を浮かべんな。生温かい目で俺を見ないでくれえっ！！

「いやでも、邪魔になるし」

「家長が許可してるんです。何の問題ありません」

家長！？ この年で言え継いでるのこの子！？

お嬢さん……恐ろしい子！！ ……硝子細工の仮面っぽくね。

とは言え、其処へいけば元の木阿弥。最悪、また城に連れ戻されるかもしれないので。

「んー、いや、今回は遠慮しておくよ」

「そう、ですか……」

しゅんとなる貴族のお嬢さん。うん可愛いけど却下。
まあでも。

「いつか尋ねさせて貰おうかな？」

「……っ！ はいっ！ー！」

うん、笑顔の方が可愛いんだよね。

持っていた地図に書き込んでもらって は？

「え、や、ちょっと、お嬢さん？」

「だから 」

「ああいやいや、そのネタはもういいから。てか、これ……？」

「ああ、私公爵位なんですよ」

吹いた。

公爵？ あの王様に次ぐ地位の？

は、なめてんの貴方。

てかこの地方。まだ先なんですけど。あ、私有の騎士団が此処に居るんだっけか。

「まあ、いつか、また」

「待ってますよ？」

苦笑してギルドへと入った。

「いや、兄ちゃん、アンタには世話になったなあ」

「はは、止して下さい。あんな大群を一振りでなぎ倒したのはバロツクさんじゃないですか」

ギルドでもあり食堂でも在るこの場で、つい先ほど依頼完了した時の同僚達と談笑していた。

「……それより。……私達の。……ギルドに、入らない？」

「いや、だから、まだ目的も在るし、気楽な一人旅がしたいんだっ
てば」

これは何十回と言いつ返した言葉。
今のところはいるつもりはない。まあ、誘ってもらえるのはあり
がたいが……。

「地理とかに詳しい人はありがたいけど、今は身軽でいたいし」

苦笑する。

なんていったって初めての異世界。土地勘が在るわけじゃないし、
未だに地図はおツかなびつくり。慎重に読んでいる。

まあ、冗談だけだね。

「まあ、そこら辺は自分でも地図読めるし」

「……なら、私が着いてく」

「ね。……って、はあ!？」

何を言い出しますかこの奇天烈無口無言寡黙多分変態美少女は!？

「……燃やす」

「すいません冗談です」

読心術……。何で出来るんだ……。
というか、本当に何を言ってるんだ？

「……本気なのかい？ レイシア」

「……本気」

「あたしとしては出て行って欲しくはないんだけどねえ……」

そりゃそうだろう。

何て言っただって広報からの支援攻撃、または広範囲攻撃を行える役だし。

正直、この子が抜けてしまったらかなり厳しくなるのは間違いない。

「……平気。……必ず、戻ってくるから」

意思を込めた言葉に、誰も反論できなかった。

俺、弱ッ！？　どんだけ弱いんだよッ！？

「……これから、よろしく」

「え、あ、や、まあ……よろしく」

とりあえず握手を交わす。

何と言つか、妙なことになった。

これからどうなるのやら。

8th レイシア監督による魔術講座

わかればどうってことない。

良く頭のよい人はそう言う。

だが、判るまでの道程が長すぎるといつかそもそも判りにくいのだ。

実際には、俺はテストをする際には教師のテストの癖を見抜いて勉強していたため、基本的な読解力や理解力は高くても、机に噛り付いたとか言うことは無い。

まあ何が言いたいのかというと。

「……故に、精霊魔術は個人内でのイメージより世界に現す形でのイメージの方が有効」

「すみません全く理解できません監督」

勉強中なのであった。

目の前には光の魔術によって顕された何か黒板っぽいものに、その前に立つ我らが監督こと教師役、レイシア・ウェルス・アーテンさん。何故か何時の間にか俺の旅の相方になった精霊魔術師にして研究者。

勿論、今現在の研究対象は

俺。

ははは、頼むから勘弁してくださいごめんなさい（土下座

てか、まあ、頼りにはなるんですけどね？

いきなり夜遅くにメスもって横にいたら怖いですって。

「想像したままに魔力を通せば魔術じゃないの？」

「……違う。……ちゃんと、式を編んでからの方が、効率も、威力も、段違い。……貴方の場合は、魔力に物を言わせて、無茶な方法で、式を編んで、魔術にしてるだけ」

「う」

いや、少しは自覚あったけど。

俺が使っていた魔術って言うのは、何と云うか、正規の魔術じゃない。

外道と言う程でもないが、一般的な魔術師から見れば小首を傾げられる程では在る。

そもそもが物理現象の再現、または延長線上にあるのが魔術なワケだが、俺の場合はなんと云うか、魔力というガソリンによって、常人ならば動かせない程の効率の悪い術式「エンジン」を、無理矢理動かしていたようなもので。

いや、だからこそあの時の剣の練成は上手く行ったのだろうけど。物理現象ではなく、そう在るべしと願ったからこそあの時は物理現象を捻じ曲げて、いや、一応の法則を通ってはいるのだろうが、一部飛び越していたのだろう。

ただまあ、この世界は少し原理とかが緩い感じがする。いや、じ

やないと魔術も俺のような無茶苦茶も通りはしないんだろうけど。

まあ結局は。

「式の構成教えてください監督」

「……よろしい」

ちょっと一泊遅れるのが彼女流。

「……簡単に言えば、数学と変わらない」

「へ？ そうなの？」

ん、と頷く彼女。どういうことかい？
そのまま唇を彼女は開き、

「……ナニナニがコウコウだからナニナニになってコウなる、みた
いな」

「何がどうなのか全くさっぱり判りません監督」

もう少し砕いた説明プリーズミ。
すんません、不満げに眉を寄せないでください、理解できないん
だもの、仕方ないじゃん。

「……これは本来の物理法則じゃありえないけど、例えば、私の魔

力が在る、で、次にこの魔力を放つ。……これは判るよね？」

「ハイ監督」

剣呑な視線が怖いですヨ？

怒らなくても理解していきますってば。

「……ここで式の構成。……私の場合、世界の属性しか行使できないけど、個人属性は勝手に式が構成されるから大丈夫。……ここで魔力を可燃性の気体として仮定。……手元に在る意志を引き金として、着火。……爆発を起す。……判る？」

「あー、成る程」

要するに、だ。

魔力〃原因で、その原因をどう扱うかによって効率が違ってくると。

例えば、今俺が魔力を光だと念じて、ソレを収束するようにして放てば文字通りのビーム。

だと此処に、光の属性がナニナニ、収束することによってドどうこうなる。

こういった補足情報を与え、または捕らえることによって、魔術そのものの威力、効率、発動速度の違いが発生するわけか。

「……ん？ だったら魔術書って意味無くない？」

「……今私が言ったのは、元に在る理論が巨大な金剛石として、ソレを砂粒よりも細かく砕いた上でその一粒だけを教えたようなもの。……いい気にならないこと」

「はい。了解です」

今俺が考えたことはどうやら本来の魔術の一端の一端のそのまた末端の末端の末端……以下略。

どうやら、本来なら炎がくく、水がくくとか定義されてるらしいが、そんなものは各国の首都や大都市にしかない学校くらいでしか教えてもらえないらしい。そりゃ莫大な知識が要るもんな。

まあだつたら、それを式に直せば言い訳で。

言語を数字に。数字を無意識下に。

ディファイ
ン
定義する。

意識するのではなく、言語を、数字を砕いて己が無意識に埋没させていく。

本能に近い所に植え付け、それを当たり前とする。

一度全て洗い流し、ガシガシと抜いて、また新たに、基礎知識、応用知識等をそのままに再定義した第三の定義を組み込む。

己が意識をプログラムとして捕らえる。

魔力を尖兵として書き換えていく。

十分な痛みはあれども、我慢できないほどではない。

……。

……………。

.....。

よし、OK。

「ん、いい感じ」

「.....何が？」

「ん、なんでもない」

これから使う時、どうなるのか。

よくは分からない。

まあそんなことを心配するより。

「取りあえず、依頼こなしてこようか」

「.....うん」

生活費を稼がねば。

いや、お金は幾らあっても足りはしないし。

貴族のお嬢さんに貰った報酬は、まだ四ソル以上が残ってる。

けれども。

色々と補修費がかかる職業では在るし。

今現在滞在してる商国の小さな都市、ウェリグイはギルドも在るし、色々と便利では在る。

まあ、稼げる時に稼いでおこうという事です。

「よし、今日も頑張りますか」

「……もちろん」

爽やかな朝であつた。

9th 熊退治

森を翔る。

転がる小石さえも足裏で踏破し、全てを後ろへと蹴って加速する。アクセラレート
周りを取り囲む魔物さえも、身体強化の魔術、魔力の循環による強化、更には足裏での魔力の爆発で連続する跳躍。

何処までも速く、早く、疾く
！！

さて、何でのっけからこんな激しい展開になっているのかと言うと。

現在の時刻は正午過ぎ。

まあ、時間は朝十時頃に戻るわけですが。

「…………じゃあ、これ」

「へ？」

ギルドカウンター。

何処でも野卑な笑い声が在るこの場所では、ソレに応じたように様々な活気が在る。

まあ、そんな中央。でっかい掲示板のような、依頼紙がたくさん張ってあった。

隅々まで張られきったその紙は、ランク毎に格付けされ、現在ランクCである俺には、それなりの数の依頼紙が張ってあった。

そんな中。

相方のレイシアが唐突に一つの依頼紙を指差した。
え、いきなりなんだ？

「……………今の貴方にピッタリ」

「ほうほう？」

成る程成る程。さてはてどんなものだっけ……………てうおおいつ！
！！？

ちよ、ちよっと待て！ 何だこれ！？

「ちよ、待て！？ 何だよこれ！？ 人食い熊三体討伐って！？」

「……………いい感じ？」

何処がですかいお嬢さ ん！！！！！

「てかこれは流石に死ぬだろう！？ 人食い熊で！？」

「……………でも、これはランクBへの昇進試験にもなってる。……………だから、いい感じ」

「ああ、そういうこと」

うんうん、レイシアも俺のこと考えてくれてるのか。在り難い在り難い……………。

ってえ！？ それでも死んだら元も子もないじゃんか！？

「いや、流石に……っ」

「……大丈夫、いける。……貴方の剣と、魔力総量や、魔術だった
ら、余裕」

「……大丈夫なのか、それ？」

「………多分」

今何時もより遅れた上に小さい声で多分って言わなかった？

で、現在。

思いつきし人食い熊に追っかけられています。
しかも十匹以上に。

俺に死ねと？

「ってかこれはマジで死にますけどね！！？」

この世界で魔物を倒すとレンドと言う宝石みたいなのが出るわけ
ですが、それを空間をポケットへと繋いで集めつつ、大地を蹴りつ
けるたびに熊をこかしていき、剣を振るうと同時に衝撃波叩き切っ
ていき、左手で熊を焼いて。

「これは本当にきついんですが ……？ レイシアさ ん
っ！？」 これどうなってるんだー！！？」

「……多分、魔王の影響だと思う」

それで子供いっぱいってか!?

くっそう魔王め!! 俺を殺す気か!?

いつか張り倒してやる!!

とは言ったものの。

「ルウウウアアアアアアアアアアアアアアアアッッ!!!!!」

「グ……ウウオオオオオオアアアアアアアッッ!!!!!」

「ああもうござりたい!!」

どうやってこいつら全滅させるんだよ!?

魔術練ってる暇ないし、速すぎて一箇所に纏めてスパンっていけないし、ああもうメンドイ。

てか、レイシアも守らなきゃいけないから、そこら辺も視野に入れていくと結構、いや、かなり厳しい。ああ糞、ギルドのヤツ、五匹どころじゃなくなっちまった。

「一掃出来ないかこいつら!?!」

「……今構築中。……出来たら、上へ飛んで」

「了解!」

レイシアの前に立ち、足を止める。

足裏から爆発させていた魔力を身体強化に叩き込み、切断の概念を強化した剣を右手で構え、左手を引いて突風の式を構築する。

「さあ、準備完了だ。……来やがれッ!!」

俺の一言で、熊どもが襲いかかってくる。

前から飛び掛ってきたヤツを切り捨て、横からのヤツに顔面へけりを入れて顔の骨を叩き折る。

後ろからのヤツに突風を当て、上からのヤツは一步後退して落ちたところを蹴り飛ばして燃やす。左からのヤツを手で受け止め、治癒魔術を多重に使用しつつ前へとふつとばし、道をあける。

一太刀振るい、風を吹き荒らし、火を操り、大地を歪ませ、雷を落とし、水を放つ。

絶え間無く飛び掛ってくる人食い熊を打ち倒し、切り捨てる。

が、流石に数が多すぎる。

まだかよッ!!

連続で式を構築し、剣へと魔力を注ぎつつけ、振るう、振るう、振るう
!!

「つりやあああああッ!!!!」

剣を突き出し何体も貫通させ、土を固めて守り、地電流を流して感電させ一気に燃やす。

「ッ、出来たッ!!」

「了解だッ!!」

道が焼ききれそうなほどに魔力を流し、突風を形成。
一瞬熊が動きを止める。

その隙にレイシアを抱きとめ、重力を軽減。一気に 跳ぶ!!

「破碎によりて力を渡せ!! 万衛の抛り手!!」

直後、破碎が響いた。

「うわ……無茶したな……」

「……そこまでも、ない」

魔術が起動した直後、半径数十メートルにおける大地から土の槍が飛び出し、爆碎していた。

うわ、グロ。

「後始末はどうするんだろーなーこれ……」

深く考えないことにしよう、うん。
にしてもなあ。

「疲れた」

「……そうね」

珍しく意見が一致した瞬間だった。

10th 行く先

紋章。

世界とは異なる、外れたチカラ。

一騎当千のチカラを宿すモノ。

英雄が振るい、魔王が扱い、聖者が掲げ、闇者が携えた。

ソレは、人の物にしては大きすぎるチカラ、らしい。

実際、俺がそんな能力を使ったことはないし、どんなものなのかもわからない。

まあ、試そうと思うほど力が欲しいわけでもない。

とは言え、持っていることは、四六時中隣にいるようなものの、相方にはばれてしまうもので。

「……怨めしい」

「ちよっ!？」

いきなりナイフで挟ろうとすんなッ!!

夜。

行く当ての無い旅の途中、宿泊、と言うか此処数日の間根城にしている宿で、風呂から上がった時に偶然、右手の甲を見られた。勿論レイシアに。

「……何で貴方が持ってるの」

「いや、何でって聞かれても……」

説明の仕様が無いですね、ハイ。

大体、其処を言っていると俺が異世界から連れてこられたと言う事を言わなきゃいけないし、そうになったらそうなったで面倒だしなあ……。

「……怨めしい、から、ナイフが、滑る、かも」

「ハイ分かりました言います言います言いますからその鋭いメスを手の甲に突きつけるのは止めてエッ!？」

弱いとか言うな!! 手が痛いんだよ!!

で、十数分後。

「……ご愁傷様」

「……」

思わず膝をついていた自分がいたのでした。
だってさ? 誰だって脱力するだろ?

「……まさか、救世主の一人だったとは」

「本当に大袈裟すぎるだろソレ……」

救世主。つまりは世界を救う者。

そんなものは俺の肩には重過ぎる。
俺は俺の思つとおりに生きてるだけだ。

「……それで、どうするの?」

「……何が?」

「……世界。……救うの?」

いきなり何を言い出しますか!?
世界!? 救う!? はい!?

「いやいやいや!? どうやったって無理でしょ!? そんな責任は背負えないって!」

「……救世主、じゃ、ないの?」

そんなたいそうなものになった覚えはこれっぽっちもございません!!--

大体、行き成り人を呼び出しておいて世界の命運を他人に預けるのも頭おかしいと思うんだけどどうでしょう。
まあでも、

「俺は只の人間で、そんなたいそうな奴じゃない」

目の前にもしも悪い奴が居るのならば、殴り倒す。
それだけ。

だから、これは自分のため、世界を救うとかそんなのじゃない。

「……素直じゃない」

「うるさいっ」

何でにやけ顔なんだよ!!

まあ、そうだとしてもこれからどうするか。
それを話し合わなきゃいけないわけで。

「……今現在の私達の拠点が、此处」

「まあ、そうだよな」

「……魔王が居たと言われているのは、現在ムグルス帝国。……あそこは、魔物の質が高い。……装備とかをそろえるのに最適」

「ああ、そうだな。色々と最適だよな？」

無言でこくりと頷くレイシア。

よし、これで行く先が決まった。

取り敢えずは適当な依頼でも見つけて、北西へと向かうことになるのだった。

11th 仲間

ガタンゴトン、ガタンゴトン。

基本規則的で、時折石を車輪に噛んで跳ねる。

荷台から外を覗き込めば森林が見え、鬱蒼とした空気がなんとも
いえない気分させる。

そんな馬車の上で、俺は何時もどおりにレイシアに魔術を教わつ
たり、剣の手入れなどをしていた。

荷台に何人か依頼の同行者がいて、そいつらも大体同じようなこ
とをしている。

「……お尻、痛い」

「仕方ないじゃん。まだ半日以上乗るんだぞ？」

前の町を出てから約四日。

俺達は、西北のムグルス帝国へ行く商人の護衛で、ムグルス帝国
の国境へと移動中。

因みに依頼金は三ウィル。報奨金は一ソル。そこそこに高い金額
だ。

というか、いい加減俺は馬車になれたけど、肉体労働がさして得
意でもないレイシアには少しきつらしく。

「……いたい……」

「おいおい……」

何で涙目？

ていうか、元が可愛いからなあ。破壊力が。

長い黒髪に、伏せられた長いまつげ。ヒスイの瞳がふるふると涙を溜めて揺れる。

……いかん。可愛い！！

こう、いつもは冷静で冷たい感じだけど今はなんというかあああああもう頭撫でたい。

「……もう、ヤ」

抱きしめていいですか奥さんっ！！
まあ許可なんぞ取りませんが。

「だったらこっち来る？」

「……なんで」

「俺の膝の上に座れば痛くないから」

事実である。でも無理強いはいしない。これがミソ。

微かに熟考した彼女は、結局は胡坐をかいている俺の上に載ってきたのでありました。

感想。

軽ッ！！

ちゃんとご飯食ってんのかよっ！？

「ちょ、レイシアさん、貴女軽いな!？」

「……重いと思ってたの？」

「いやそうじゃなく!？」

そういう死亡フラグ立てさせようとするのは止めてッ!！？

「人が乗ってるとは思えないくらいに軽いんだって」

「……そう」

何故か握り拳を作る彼女。何がしたいんだか。にしても本当に軽いな。荷物を置いてるくらいにしか感じないぞ。

「……ムスガル帝国のこと、分かってる？」

「いや、特には」

皇帝がいて、軍事国家って言うのは帝国の基本的なものだし。それ以外はなあ。

「……現在は、皇帝リオン様の元で各地での魔物などの討伐を行いつつ、鉱石等の産出によって成り立っている大陸きつての大国。…とは言え、領地は広いものの、国民数は他国と変わらず、それを軍事によって国民を守っている」

「……随分詳しいですねおい」

何でだよ。

……もしかして。

「レイシアって、帝国出身？」

「……」

首肯する彼女。だからか。

何がどうなっただけで傭兵になったのだろうか。

踏み込んでいいもんじゃないだろうけどね。

「で、其処へ行つて、どうするんだ？」

「……古代の魔王について調べてみる。……何処から出たとか、分かるかも」

「ん、了か」

い、と続けるつもりが、行き成りの馬車の急停止に舌を嚙んだ。
いたい。

咄嗟にレイシアを抱き寄せ、身を立てた上で滑る。
衝撃を受け流し、抱き寄せたままで立ち上がり、

「……敵？」

「まあ、それ以外にないだろ」

荷台を降りて、前方を見ると、

「……盗賊、か」

およそ十人。二人の同業者が既に戦っているが、流石に分が悪い。ていうか、なんというあからさまな悪役顔。キモッ。

「レイシアは後ろで援護。俺は突っ込む」

「ん」

背後での微かな動きを首肯と判断。

地面に降り立つと同時に、固めていた術式を放つ。

式題は隆起。

剣の切っ先に纏わせ、地面へと叩き込むと同時に魔術が発動する。

「打ち上げるオ!!」

「う、うわっ!?!」

「あんだあっ!?!」

幾つかの土の槍で三名を倒し、そのまま疾走。地を這う連続跳躍。

「ヒッ!? く、くるなあっ!!」

突き出された槍を身をよじることで避け、そのまま跳躍。斜め下から切り上げ、そのまま後ろを視ずに駆ける。

視たら、足が止まってしまいそうだから。

「デメエ……!？」

「ッ、シイイ アアッ!！」

体ごと回転し、叩きつけられた斧を旋回によって回避。

鮮血を振り払い、同属殺し（マンイーター）の罪の重さから逃げるようにかける。

前へ。前へ！ 前へ!!

「う、お、お、お、おああああああッッ!!!！」

そりゃ、敵を倒すって言う覚悟はしたさ。

だけどさ。人間を殺すのは、また別だろ。

だから、みつともなく声を張り上げて、恐怖を抜く。

槍を避け、剣を払い、魔法を叩き落とす。

ひたすらに前へと。敵へと。

ただ、倒すために。

「ッッあああああああ!!!!！」

掌底で鼻を潰し、横薙ぎに斬って払い、それを蹴りつけて姿を隠し、下からの斬撃で倒す。

無我夢中に。涙も無しに。

ただ、生き残るために。

斬ると言う行為は、己の身を守るため。

古来から刀は魔よけの役割を担ってきたらしい。

その加護が本物かどうかはともかく。

その輝きを見ていれば、多少は落ち着くのだろう。

「……と、思っただけだなあ」

野营地。

幾つかのテントを張って、性別、またはグループによって寝ている。

そんな深夜。

俺は一人で抜け出し、近くの湖畔、水辺で黄昏ていた。

いや、黄昏も何も今は夜だけだ。

「全然笑えないな……」

下らない言葉遊びで自分を納得させようとしても全く駄目。何時までたっても、暗い気分は振り払えそうには無かった。

項垂れた先にはくらい顔のブサイクが一人。

「ははっ……酷い顔が余計に酷くなってら」

本当に酷い。

まるで、泣きだしそうな子供だ。

「っ……！」

拳を叩き込む。

水面を虚しく叩いただけ。

人殺し。

その言葉が頭を流れていく。

事実。

覆らない。

何か、自分は酷く間違ったことをしてしまった気がして、駄目な気がして。

途轍もなく、イヤだった。

「くそ……ッ！」

絞り出した声さえも震えていた。

そんな時。

「……タツヤ」

「ッ!？」

ビククリした。

背中が跳ねて、勝手に立ち上がり、そのまま顔を背ける。

「ど、どうしたんだ？」

「……少し、夜風に当たりに」

「……そっか」

そのまま彼女は俺の横に来て、俺の足元に座り込んだ。

「え？　ちょ、何して」

「……無理することは、ないと思う」

いきなりですかいつ！？

ていうか、何で分かったよ！？

「……そんな顔してたら分かる」

「……」

「……殺したのは、事実」

「っ……。だよな、はは。俺、人殺しだぜ？　はっ、くだらねえ……」

また、言葉が震える。
情けない。

「……でも、それを悔やむ必要が無い」

「……なんで」

「……正当防衛」

それは、只の大義名分。

「そんなの、意味無いって……」

「……じゃあ、こう言う。……どうしようもないことを、悩む必要は無い」

「でもさ……」

「……うだうだ言うな」

「うあっ？」

彼女の言葉が終わると同時に拳が俺の脳天に直撃していた。痛い。

「ちょ、何するんだっ」

「……それが、いつもの貴方」

そういうと、彼女は俺から背を向けた。

「……ソッチの方が、私にとって、いい」

「……」

思わず呆けて、

「……有難う」

苦笑して、彼女の後を追うのだった。

11th 仲間（後書き）

仲間は大切です。

だからこそ重いものを、背負っていける。
罪も、責任も、思いも。

12th 色々買い物（前書き）

どうも、起居です。

いやはや、ノリでかき始め、設定も固まってきました。

で、行き成りですがP.V.1万有難うございます！！

ていうか、本当に毎回読んでいただいてる皆様、有難うございます。
これからも頑張っていきます！

では、どうぞ！！

12th 色々買い物

国境の町。

堅固な外壁がそびえて、帝国からの侵略を防ぐ役目なのだろう。何か一発で切れそうな気もするが。

見張りの兵士とかも何か微妙にやる気がないし、その市場が賑utterるものだから本当に国境なのか分からない。てか攻め込まれたら大丈夫なのかこの国。

「……帝国は、温厚な人物が多い。……まず侵略は無い」

「お、そうか」

ふむ、成る程。

現在は馬車を降りて、ギルドの中で一服中。

依頼を果たし、お金も手に入れたし。

今までの装備、剣以外を売っぱらって新たな装備を手に入れた！！

はい、どこのRPGって突っ込まないでね。結構重要なんだから。

取り合えず、俺は黒いトレンチコートと、下に着る胸当て、手甲と指貫型の手袋。後は肘当てと脛当て、最後に退魔製の銀が仕込まれた革靴。

剣みたいに作り変えればよかったんだが、どうにも出来ない、というか、しようとしたら壊れた。

何かコツが在るらしい。勉強せねば。

あ、あと短槍を一本。投げれるし振り回せるいいものだ。

柄はミゲルナの木という何か硬くてしなるヤツ。刃は練成魔鉄と

いう魔術で作られたかなりいいものらしい。お陰で5ソルもかかったけどね！！

で、レイシアはと言うと。

「……にしても、ホントいっぱい買ったよなあ」

「……ん」

ついと後ろをしてみる。

其処には馬車ならぬ狼車が。

……いや、ツツコミを入れたいのは分かるけどさ。

「ていうかホントにコイツ噛んだりしない？」

「……此方から危害を加えなければ噛まない。……リウォルグは草食」

この巨体で！？

狼車を引いてるのはそのまんま巨大な狼です。でっかい。

毛並みは銀色で、何と言うか凜々しいというのが一番しっくり来る。オオカミ的イケメン。

この町で買ったわけですが、何か気性が激しかったらしく、相場の1ソルから5ウィルにまけてもらった。

ぶっちゃけ何処が激しいんだろうかこの子？

そりゃ多少は怖いよ？ でかいから。

でも俺が撫でてでもレイシアが撫でてでも普通に気持ちよさそうに喉

を鳴らすだけと言っ。

ああ！！ いい買い物したよ！！

で、そんな感じで馬車も付けて貰って結局三ソル。安ッ！？

まあ、そんな感じで買ったら、レイシアも買っらしく付いて行った訳ですが。

先ず買ったのが杖。世界との適応力が強くなるらしい。

で、次が魔道書やら研究所やらなんやら。

お陰でええ、十三ソルも使いましたよ。

泣いていいですかチクショーツ！！！！

まあ他にも生活用品その他諸々を買い、そんなわけで、手持ち金が約半分です。

「……クレインは、良く食べる」

「そうなんだよなあ」

二人きりで無い限り彼女にはクレインで呼んでもらってる。

何時何処に刺客がいるか分からないからなあ。怖いっての。

とは言え、結構食べるのは事実。

元の世界でも良く食べる方ではあったが、こっちに来てからというものの余計に増えた気がする。まあ、大した意味は無いのだろうが。

「まあ、俺の食費の分も合わせて、ちゃっちやと依頼を受けて、こなしていきますかっ」

「……ん」

ヴォフ、トリウォルグ。

彼は今、ギルドに併設されたペット小屋に置かれているわけです。というか、ギルドがでかいからそんなに大きく見えないけど、普通に通に肩高2メートルくらい在るし。

で、其処に彼を預けて依頼を見に行くわけですが。

「……貴方も、Aランクになったから、色々な依頼が選べる」

「何でこう、直ぐに上がったんだろかね」

何時の間にかAランクで。

まあ別にいいけどさ。

そんなところで依頼を探していく。

「んー……中々良いの無いかあ」

ゴブリン討伐は報奨金低い。ウォウウルフは遠いし、運搬や採集はアウト。

……マジで言いの無いなあ。

「なあ、そっちいいのあった？」

横で探してるはずのレイシアを見る。

彼女は結構背が低いから見下ろす形にな

「
:
:
:
ん
?
」

その手には一枚の依頼紙が。

「ちよ!？」

何時の間にイ
！！！！？

「……これ」

「え、や、ちよ、何時の間に」

⌋
⋮
⌋

冷静な眼が輝いてますよ！？ あれ！？ あれえ！？
何！？ この俺を解体して良いよって言ってみたら的なレベルの
眼の輝きは！？

「え、ええと何々……？」

要約。

ワイヴァーン一体の討伐。

場所。

リンダルの森。

つまりは直ぐ近く。

報酬。

十二ソル。

ソロモンの魔道書……っておい！？

「絶対これ目当てだろ!？」

「……」

ふるふると首を振る彼女。
絶対嘘だろ!?

「……直ぐ行く」

「!?! いやちよつと!?!」

「……店主、帰ったら払う」

「そのまえにこの手を離せえ
!?!」

結局行くことになるわけですが。
弱いな俺。とほほ。

12th 色々買物（後書き）

レイシアさんは好奇心の塊です。

つまりは大人っぽい所もありますが、その下には超子供っぽいところがある。

で、一万PV御礼として、次はレイシアさんサイドでお送りいたします。

因みに、そろそろ新キャラが。

彼女の気持ちをとくとお楽しみに。

ではっ

私は、その人と出会った時に、背筋に電流が走ったのが分かった。屈しない視線、恐れも無く敵へと切り込んでいく度胸、避けて、弾いて、呆気なく敵を切り裂いて前へと進んでいく背中。

恋とかじゃない。けれど、確かに私はその姿に胸を締め付けられていた。

救世主じゃないと彼は言うけれど、十分にその資格は在るのではないだろうか。

世界を救えるのは、世界と対等に渡り合えるものだけ。そういう意味であれば、何もかもにも罪悪感を感じてる彼は一番あつてると思う。

まあ、元々は彼に何か好奇心を刺激されてついてきたのだけ。

鍛えられた身体に、莫大な魔力、更には個人属性を持っている。正直、魔術師にとってこれ以上魅力的な人は居な……何を口走っているのだろうか私は。

彼は私のことをどうとも思っていないはずだし私も……。

否、確かに好感が持てるところがたくさん在る。だがソレが恋に繋がるわけではないしそもそもたかが顔を見た程度で胸が締め付けられるような感覚に陥る程度で恋とは言いまいその上先日は彼の泣き顔を見てしまった今思うと何と言うことをしてしまったのだろうか。か無遠慮にも程があつたのではないか嫌われてしまったのだろうか。ああそれは嫌だ気持ちがどんどん落ちていく

「おーい、レイシアさん……？」

「……何？」

意識が現実に戻れば眼前に彼　　タツヤの顔があった。

一瞬で意識が白く染ま

「いやだから何で直ぐに呆けた表情に……」

「……なんでもない」

彼は納得しないような表情を見せたが、それも直ぐに変わる。

彼は基本的に自分のことを卑下する傾向が在るが、そんなことはないと思う。

端正な顔立ちに、少し釣り目の眼は強い意志を感じさせる。が、何時もは緩やかな弧を描いて気の抜けた顔になっているのだがソレがまた良い

「もう面倒だから言っちゃうけど、そろそろ飛竜の巣につくからな……？」

「……わかった」

先日を受けた飛竜の討伐依頼。

報酬が伝説とも言われるソロモンの魔道書だったために彼に了解を言わずに何時の間にか受けていたが、恐らくは偽者だと思う。

しかし、それでもAランクなのだから良品の魔道具だろう。

しかし、

「……熱い」

「そりゃあ、北と入っても今夏だし、森だし」

そうは言っても熱いものは熱い。

大体、魔術で衣服の内側を涼しくしてるからといってこの外からの熱気はどうにもならない。

周りは樹木が多い。その上、蔦や蔓が蔓延っているものだから余計に湿気が多く、汗が吹き出る。

襟元をパタパタとさせて風を入れてみるが、元々中は涼しいので意味が無い。

「にしても、飛竜って強いのか？」

「……分類上はB++。……竜種の一つで、傭兵達の登竜門とも言われてる」

「……つまり、強い？」

頷く。

直後に彼が何か飛び跳ねる。何時ものこと。

但し、今回はAクラスだったので、それなりに強いだろう。

「……作戦としては、私が翼を封じて空から落とすから、その間に何とか倒して」

「いや、ソレは百も承知なんだけどさ、ぶっちゃけ 俺の剣と槍で切れるの、ソレ？」

「……問題ない」

というか、彼の剣で貫けないものといえは早々無いとは思うが。
どうやらアレは実在する金属の中には無いものらしく、相当硬い。

「まあ、やってみりゃわか　！？」

「……？」

彼の声が驚きに止まる。

何故かと彼の視線を辿り、

「……ッ！？」

自分の喉が干上がったのが実感できた。

何故ならば、

「……飛竜が、人間を……！！」

襲っている！？

何故だ！？　何故こんな所に人が！？

装備を見る限りに旅の者だろうが、それでも危険だ。

「……タツ」

「ッ！！」

私が声をかける前に彼は走り出していた。

その姿は不覚にも格好良いと思ってしまう。

風すらも追い越してかけるその姿は、まるで神話に出てくる風の
巨狼だ。

「……構築」

意識を世界へ。自分の手中へと納める。

先ずは口を塞ぎ、女性への攻撃を少しでも減らす。

プレスが出る直前に地面からの土の槍でソレを阻止。

「っ！？　グウウアアアアアアア！！！！！！」

怒りの咆哮に女性が身をすくめるが、その瞬間には彼女が女性の身柄を確保して退避している。

即座に飛竜一帯の温度を下げ、大気を固定。翼を凍らせる。

が、流石に竜種。魔力が強い上に属性が炎のために中々凍らない。ならば、更に魔力を込めれば良いだけのこと。

「……ッ！」

「ギッイイアアアアアッ！？」

固定完了！

「……タツヤ！！」

「おおおおおああああああ！！！！」

私が声をかけるまでも無く、彼は飛び出していた。彼は短槍を振りかぶり、空中で身を捻り、

「つぶつち抜けえええええええええ！！！！！！」

視覚する。

槍に彼の魔力がつき、その存在が変化していくことを。
形が整えられ、刃は長く、鋭く。

そして竜殺しの絶槍は 投げられた。

「ア、ガ、アアアアアアアアアアアアアアアアッアアアアア！
！？！？！？」

ソレは脳天を穿ち、一瞬でソレを致死へと変革させる。
飛竜はのた打ち回り、しかし直ぐに倒れ付した。

……終わった。

「……依頼完了」

呟けば、体から力が抜けた。

竜種と戦うのはこれが初めてだし、そもそも威圧感が凄まじい。
気付けば膝と腕が笑っていた。

彼はと言うと

「……」

助けた女性を俗に言うお姫様抱っこで此方へと走ってきていた。
中々の美人で、自分では勝てない。

そんな感想が頭の中で生まれ、顔が熱くなり。

それでも彼についていくのだなと、何と無く確信した。

13th The Other Side In Racyer (後書き)

如何でした？

自分としてはやばいなんか納得できないとか思ってたりするのですが。

といいつつ、自分で書いておきながらレイシアがとても可愛いと思うのは販促ですかそうですがごめんなさい。

ともあれ、彼女の中はカオスです。グルグルです。

さて、新しい人はどうだろうか……？

ではっ

14th 視続けるほどに

自分が不幸だなんて言う気は無いですけどね？
流石にこれはやりすぎと言っか。

「何で俺簀巻きにされてるの……？」

朝起きたらベッドのシーツ諸々でグルグル巻き。
そんな何時もの朝。

そんな何時もは嫌だ！？

てか俺が何をした！？

しかも何か硬化の魔術掛かってるからこれ千切れない！？

「ぬっ、くおっ、うりやつ！？」

だ、駄目だ。幾ら飛び跳ねてもどうにもならない。
相当強く縛られてるぞこれ。

にしても、誰がこれやったんだろうか？

候補1・

レイシア。

……そういえば俺のこと解剖したいとか言ってたなあ。身動き取れなくしてばっさり？

嫌だなソレ！？死にたくないっての！！

候補 2 .

昨日拾ってきた（救助した）女性。

飛竜に教わってた所を救助したわけだが、女性と言うことでレイシアに任せちゃったからなあ……。ぶっちゃけ良くわかんない。

覚えてるのは、軽戦士みたいな格好で、手斧とか槍とかブンブン振り回してた。

緑色のセミロングで、泣きそうな顔で振り回してたよなあ……

「んーっ！ んんーッ！！！」

……あれ。

何か隣からうめき声みたいなものが。

しかも何か昨日聞いた感じがする声なんです。

恐る恐る横へと首を向けると。

「んーッ！！ んんんーッ！！！」

「うおわあっ！？」

思わず飛び跳ねようとして飛び跳ねなかった。畜生。
ともあれ。

「君も起きたら簀巻き状態？」

「ん、ん！」

首肯する彼女。どうやらそつらい。
てかなんで涙目……って当たり前か。

なんせ助けられた直後にこれだもんなあ……。そりゃ泣くよなあ……。

……いや、待てよ？

ここで彼女が苦して簀巻きにされてるってことは、だ。

犯人はレイシアでは？

……冷や汗が出た。

嫌な汗が背中を伝う。

レイシアは基本的に怒らない、というか、感情の起伏が少ないから、怒ったりは滅多にしないのだが、一度怒るとマジで怖い。

……なんと言つか、明王って居るんだなって感じで。

だがそれにしても俺が何かをしたのだろうか。
全く覚えが無いんですが。

首を捻って考えてみるが、全く、本当に全く引つかかるものが無い。
い。

あるえー？

「……起きた」

……何で直ぐ後ろから声がしたのでしょいか。
凄く冷たいよ？あはは。

いや、笑える状況でもないのですが。

だって首元にひんやりとした感触が確かに在るから。
多分これって俺の剣だね。

毎日手入れとかしてたら分かるんですが、何で俺は斬られかかってるんでしょうか。

「……あの、レイシアさ」

「……また、誑し込んで……」

何が！？ 何がどうなってるの今！！？！！？！！

「……今度と言う今度は、許さない」

「え、ちょー！？」

一瞬刃が俺の首筋から放れたかと思うと、瞬転、振り下ろされ
！！

「……えい」

縛っているロープを断ち切った。

え？ なんなんですかこれ？ え？

「ちょ、レイシアさん、これ一体どういう」

俺が問を放ち終える前に、既に彼女は簀巻きにしていた女性の口
ープを切っていた。

……物凄くシユールな絵。何だこれ。どこの昼ドラだ。

「う、ひっぐ、こ、恐かったああ……!!」

「うわっ」

自由のみになった瞬間に飛びついてきた彼女が、既にぐずっており、涙やら鼻水やらで顔面が濡れて……この服、洗濯せねば。

いや、それよりもまず、

「うんうん、もう大丈夫だから、はい落ち着いて深呼吸。吸って、吐いて」

「すー、はー……」

おお、ジェスチャーにちゃんと付き合って深呼吸してる。何か素直な子だなあ。

ぼんぽん背中を叩いてあやして、呼吸を落ち着いて行かせて、

「……だから、何で誑し込むの」

何が!? 誑し込むってなんだよ!?

え、俺なんかしましたかってかヤメテヤメテギリギリと重力増加魔術を肩にかけるのは止めて壊れるっ!?

「お、俺、何かしたか……?」

「……」

ふいつ、と顔を背ける彼女。俺が悪いの? え?

……こっち向いてください。

「あ、あの……っ」

「ん？」

下の彼女から声が。

はいはい、何で御座いましょう？

「い、今更ですけど、助けていただいて有難う御座いましたっ」

「ああ、いーよいーよそーゆーのは。俺は俺がしたいことをしただけだし、レイシアもソレを望んでたし」

実際、そうなのだ。

俺がやりたいことをやっただけ、つまりは自己満足。
褒められるようなことはしないし……してないって言ったらしてないんだっ。

「あーっと、その、君、名前は？」

「あ、すみません、遅れました。アタシはウルドといいますっ」

「ん、りょーかい」

あ、じゃあ俺もしとくかな。

レイシアの首を引っつかむ。明後日の方へ向くなつての！

「俺はクレイン。で、こっちの不貞腐れてるのがレイシア。よろしく」

「よろしく願いますっ」

「……不貞腐れてない」

「あーはいはい」

ぐりぐりと頭を撫で回しておく。

こうしておくとか何故だかわからないが彼女の機嫌が良くなる。

「で、何で君はあんなここに？ 飛竜討伐の依頼は俺達が受けてた
と思うんだけど？」

「あ。それは……」

……何で赤くなって縮こまるんだ。
いや、まさか、まさかとは思うんだけど……。

「……迷子？」

「ひう……」

まじでか。

地図とか持つてるはずだろ？もしかして読めない？
いや、もしかして、

「……アタシ、旅の商人の人達と旅してて、はぐれて、それであそ
こに……ひくっ」

「うわあ！？ちょ、泣くな泣くな誰かー!!」

「……だから、誑し込むなって……」

中略。

「えと、じゃあこれからよろしくお願いします、クレインさんレイシアさんっ」

「……………」

「……え？　これ、俺のせい？　俺のせいですかー？」

結局一緒に旅することになるのだった。

……やっぱり俺のせいなのか？　これ。

15th クマさん退治

人間の急所は身体の真ん中に集まってる。

額、鼻、喉、鳩尾、下腹、股間など。

他にも在るって言えば在るが、大体はこれだけで良い。

まあでもね、ソレに打ち込まれたからって即座に戦闘不能になるわけじゃあない。

一瞬行動が停止するだけだ。だから

「連撃を入れれば良いわけ、その間に」

何かでかい熊っぽいヤツ。八目の熊。

体長が三メートルくらい。

熊の弱点は額。

故に、手に持っている槍の石突で額を打ち抜いてから、身体を空中で回して腕を刈り取る。

悲鳴を上げる暇は与えない。

熊より少し背後に着地。すると同時に石突で熊に足払い。身を回して落ちてくる熊に、穂先で死閃をあわせる。

一発、斬撃が走る。

直後、熊の首と胴体がさよならをする。
ん、まあ、こんなところで。

「ほら、やってみ?」

「無茶言わないで下さいっ!?!」

悲鳴を上げたのはウルド。

場所はこのまえ飛竜を狩った森の少し手前。

Cクラスの依頼で、八目熊を討伐、と言ったので、彼女の腕前を見てみると、

「えいつ、やあつ、ったあああつ!？」

……うん、まあ、倒せたけどね。

もーすこし君は自分にあった武器を使おうか。
手斧とかを使うのは結構だが君ちっこいだろう。

「ちっこいって言わないで下さいっ!？」

「あ、ごめ。思わず口が」

「~~~~っ!!!」

地団太踏む彼女。ああ、和む。というか、楽しいなあ。

「まあ、ちっこいのは事実だから諦めてもらおうとして」

「うううう~~~~!」

睨んでも駄目。

「君の場合は、身のこなしが素早いから短剣とか、弓があつてると
思っなあ」

今まで見た冒険者的な意味で。

ちっこいから素早いし、ちっこいから敵からの攻撃が当たりにくいし、ちっこいから隠れることも出来るし。

「喧嘩売ってるんですかつ!？」

「え？ 何で??」

する意味無いじゃん。

てか、万が一にも負ける気がしない。

「て、天然ですか……」

「……諦めて。……いつもこうだから」

「そんなぁ……」

俺が何をしたと!?

なんでそんなことをいわてるの俺!?

まあともかく。

「えーと、確か荷の中に……」

練習用に『加工』した短剣が在るはず……。

お、あった。

「ほいこれ」

「ひいっ!？ 投げないでくださいよっ!？」

そんな脅えなくても。

「それ、俺お手製、かな？ 何で、かなり切れると思う」

「はぁ……」

しげしげと眺める彼女。あ、それ試しに属性付けてみたんだが。
風。

「で、それでクマと戦ってみて」

「あ、はい！ 有難うございます！-」

……………。

「…………え？ いま、何て？」

「いやだから、クマと戦ってこいと」

「アタシを殺す気ですかっ！？」

「瞬間的な逆切れは勘弁してくれ。だから言っただろ。君はそーゆう系統の武器が合ってるって」

「いや、でも」

「うだうだ言ってるんじゃないな お」

「え？」

良い感じにくまさん登場。

森のくマさんにくでえくああったく。

はい、どうぞ。

「死にますっ!!」

「死ぬな」

ま、いってこい。

「ひゃあああああッ!!!!??!!?!!」

数分後。

「だっ、だからいったじゃないですかあ……っ。無理だってえ……!!」

「倒せたから良いじゃん」

「うっ、ひっぐ、ぐす、うええ……!!」

あー、いかん、泣き顔はなんというか見たくなるけどこれ以上はアウトだし。

なんとかクマさんを倒した彼女は、やっぱり泣き崩れた。泣き癖でもついているのかこの子。

取り合えず抱きしめて背中をぽんぽんと叩いて落ち着かせる。

「……く、クレイン、さん？」

「ん？」

「な、何をしてらっしゃるのしょーかつ？」

「抱きしめて背中叩いてる」

「~~~~ツ!？」

「うごっ!？」

行った直後に鳩尾にボディীবローが突き刺さった。
しぬ。あ、息が……

「く、クレインさんのバカッ!！」

……この力があつたらクマなんて余裕じゃあ……？

純粹な疑問に答えてくれる人は

「……たぶらかすなど、あれほど……!！」

「……」

俺、死ぬかも。

15th クマさん退治（後書き）

新しいもの書くかも。

16th ゆったり

狼、といっても、リヴォルグは草食だ。

市販のものも野草も関係なく食べるので、凄い経費が助かるなあ。そんなことを思いつつ、御者用の席でリヴォルグの手綱を握りつつ、俺達は帝国へと向かっていた。

「ヴおふ」

「ん、何でもない。ありがとな」

「ヴォフ」

凄く人間っぽいのが、彼は男だ。

苦笑しつつ、ポンポンと背を撫でると気持ちよさそうにぐると鳴いた。

今は、国境で金や装備を整えて、帝都へと向かってる途中。ぶつちやけウルドの練習に少し手間取ったが、そこはそれ。思いつきりしごいたので大丈夫。GOOD JOB!!!!!!

「ぐつじょぶつてなんなんですかあっ!? てか、大丈夫じゃなかったんですけどっ!!!!?」

「うおわあっ!!!!??」

いきなりばがんっ!?!と後ろから窓が開いた。か、角当たったら俺死ぬぞ!?!

「何驚いてるんですかつ!!」

「君のせいだろうがつ!？」

なに不思議そうな感じで怒ってるんだ!？
それやるのは俺の役だろうが!？

「というか、アタシ今全身筋肉痛なんですけど!？」

「そりゃそうだろう」

今までつかってなかった筋肉、それ以上に全身使つての移動やら
なんやらかんやら。教えても良いものは殆ど叩き込んだ。

うん、速く覚えてくれたようで何より。はっはっは。

「た、確かに強くなったって言う自覚は在りますけど……」

「なら良かっただろ？」

「その所為でアタシ今殆ど下半身動けないんですよ!？」

まあそりゃあ、ねえ？

自分のバトルスタイル変えたんだから仕方ないだろ？
以前のような手斧とかを地面に足をつけたままぶんぶん投げまく
るんじゃなく、短剣を用いて奇襲して即離脱、遠距離からの弓によ
る援護射撃、という。

ちっこいからこれがまた良いんだよなあ。

「ちっこいって言わないで下さいっ!？」

「いいじゃん。可愛いんだし」

……あれ？

何で頭抱えてブンブン振ってるんですか？
しかも顔赤いぞ？ 風邪かー？

「……だから。……誑かすなって」

「うにゅあー！？」

「ぬわあっ！？」

ウルドの顔が引つ込んだと思ったらレイシアさんが出てきました
よっ！？

「な、なんですかいつ！？」

「……一度、貴方は、自分を見直すべきだと思う」

「何故に！？」

白い眼で見るなっ！ 見るなよおっ！？

「……ういしょ、っと」

「あ、危なっ！？」

窓から出てくるな！？

「……あ」

あ、足が窓の棧に引っかかって、

「……落ちる」

「ぐえっ!？」

し、尻が俺の腹につ!？
お、重た

「……何か？」

「イエナンデモアリマセンッ」

「……よろしい」

し、死ぬ、俺今死亡フラグが確実に立ったぞ!？

「……言わないの？」

「……相変わらずですねレイシアさん」

「……？」

ことりと首を傾げる彼女。
口数を増やしましょうね!！？

「でっ？ 何を言わないのかって？」

「……君が、救世主だったこと」

「あー……それかあ……」

いや、実際どうしようか。

言ってしまえば俺は王国からの逃亡者。

その上なんかとんでもない力が在るらしい。

でもなあ。

面倒くさいし、そういうの。

俺は俺のために生きてるんだし。

「……私は、言わなくても良いと思う」

「……まあ、どっちでもいいんだけど」

何とはなしに空を見上げる。

どうだっていいのだ。

これから魔王のことを知るために帝都に行くのも、俺をこの世界へと呼んだ世界に対するあてつけのようなもんだし。

「……素直じゃない」

「うつさい」

なにニヤニヤしてんだっ！

「……別に？」

「うあああああ」

腹立つー!!

くそう!?

むにゆりとレイシアの頬を引っ張る

うわ、柔い!?

「……………なにすゐのひやにひゅりゅによ」

「お仕置」

「……………」

「うぬ!?

頬を引っ張られた。痛い。

「ぬっっっっ!?!?

「……………うにゅっっっっっっっっっ」

何でレイシアのほうが力はいってんだ!?

「……………っっっっっっっっっ!?!」

「……………あのー、お二方……………? アタシは無視ですか……………?」

「……………ヴォフ」

「ああ、アリガト、リヴォルグ……………」

のどかな一日であった。

17th 魔王軍？ シラネ

くけけ、くけけ。

そんな声が森に響いております。

正体は森の小人。

ゴ布林たちの上位種。

グリーンゴ布林。

手斧は飛んでくるし槍も矢も何か富んでくる死つかああもうウザいなあゴルア！！

「『斬り落せ剣旋』ッ！」

命名したことにより威力が上がった衝撃で弾き

「『穿ち毀せ槍撃』イ！」

投げつける槍で相手を穿ち爆発させる。

戻ってきた槍を手に握り、身体を一閃させる様に回し、グリーンゴ布林を一掃。

順手に握る剣を魔力を通し、腰打めのままに切り払い、遠距離まで一気に斬り落とす。

「あーもうっ、何でこんなことになってるんですかっ！？」

声を上げたのはウルド。若干涙声になってるのは気のせいじゃないんだろうなあ。

彼女も弓で周りを的確に牽制しつつ、短剣でその場で頑張ってる。

……まあ、俺が鍛えたんだし当たり前だけど。

「……少なくとも、私の所為じゃない」

冷静にポツリと呟くのはレイシア。普段と変わらない声音なのは慣れてるからか。

今も杖を片手、魔道書を片手に詠唱中。下位の魔術で近辺のヤツを払いつつ、中位の魔術で援護。上位魔術で遠方に居るはずの敵を牽制中。

「ヴォフツー!!」

リヴォルグは普通に蹴散らしてる。あれぞ野生の強さ。

「にしてもまあ……」

よくもこれだけ数をそろえたな敵も。

今の所、これだけの大群を俺達に叩きつけてくる輩は。

1。

王国の俺専用の捕縛部隊。

でもこれは先ず無い。

なんたつてここは既に帝国領土。んなことしたら国際問題とかじやなく、あのへっばいつ騎士団を含め全滅するしかないし。

2。

何処か俺らに恨み持ってるやつ。

ありそうでなさそうで。凄い微妙。

無いとは言いい切れないけど、在るとも言いい切れない。
保留で。

ほい、次々。

3。

魔王っばいやつ。

なんかありそう。

魔王を倒すために呼ばれた俺に反応して攻撃してきたとか。

まあ、それは冗談としても一番ある気がする。

なんせ人間っばいやツ一人も居ないしなあ、こいつら。

「ま。どういったって俺の邪魔なら切り裂いていくだけだけど」

槍で貫いて、剣で斬り裂いて、ただただ前を望む。
というか、本当にウザイなあ。

こういうときは一掃するに限る。

「ウルドツ、十五秒耐えられるかッ!？」

「無理ですッ!！」

「よし耐える!！」

「そんなあッ!？」

だってそうじゃないと面倒だし。

一度回りの敵を一掃して、狼車の上へと飛び乗り、レイシアと眼を合わせ、

「前やった合同術式、いけるか？」

「……当たり前。……フェイク同調、開始」

魔力の同質のものとしてレイシアへ溶かしていく。
魔力を預け、術式を立てていく。
式題は破砕。

空間へと作用。狙いは前方視界約百。
細部から細かくするのではなく、あくまでも破砕。

「準備は？」

「……聞く必要は無い」

ありがたいことで。

「『『愚進する暴壁』』」

直後、破砕が顕現した。

それはグリーンゴブリンたちにとっては恐怖であった。

破砕。

大気も大地も森林も。

ただ壊して碎いて破いていく。

悲鳴を上げれば血飛沫が上がり、逃げ出そうとすれば何も残らない。
い。

不条理だ、と叫ぶ間もなく、彼らは殺戮された。

「……おおっ」

「いや、おお、て。やったの俺らだぞ?」

まあ、そういうのも判るけど。

大地に亀裂を残して、そのまま殆どゴブリンを殺していつてますが。

わずかに残ったゴブリンも逃げ出してるし。

これで終りかなあ?

「……相変わらず、貴方の魔力は、異常……」

「そんなのわかんないって」

しかも何故そこで頬を赤らめつつ手にメスを持ってこっちにじりじりとにじり寄りますか?

トデーモディンジャラスナスメルガスルノデースガー?

「ちょ、アタシの事忘れてませんかー!?!」

「あ」

そういえば。

思わず辺りを見回してみると、リヴォルグの顎の下辺りにいた。ちっこいから入れたらしい。

「ちっこいって言わないで下さいっ!?!」

「あ、ごめん。思わず」

……何も泣き崩れることは無いだろうに。

溜息について慰め

「……ッ！？……二人とも、伏せてっ！？」

「へ？」

「うおッ！？」

いきなり言われて、思わず前に剣を掲げて、ウルドの頭を地面に伏せさせると、凄まじい衝撃が剣を伝ってきた。握りこみ、耐えるが、結構威力高いなああれ。

そんなことを考えていると。

「あーはっはっはっはっは！！ 良く防いだね！！」

「……なんですか、アレ」

「……ただの、変態」

「だよなあ……」

今時白タイツ履いてるってどうよ？ しかも男。見苦しいわッ！！

「誰が変態かね！！ これは由緒正しい衣服であってだな」

「五月蠅いわっ！？」

というか、何だコイツ！？

なんか、なんか、何か！！！！

はいそこ、存分に笑って良いですよー。

「あれ？」

「全部、口に、出てた……っ」

あ、そういふわけ。

「うおっ？」

109

なんか、これ構成甘いな。

「せいっ」

単純な切断の術式を剣に纏わせて、それを叩き斬る。

「なっ、何イ!？」

「何でそんな驚いてんだ？」

「あ、当たり前だ!？　ば、僕のような高位魔族の術式を、普通の人間が弾くなんてありえないだろ!？」

知るか雑魚め。

「う、五月蠅い!!　おっ、お前、一体なんなんだ!？」

「何って言われてもね……」

人間としか言い様が無いだろうが。

大体、俺は二つ名とか貰ってないし、作ってもないし。

あ、もしかしてアレか？　救世主ってことか？

……何か、ばれたら面倒だしなあ。

「!？　まさか、おまえ、その手の紋章、異常なまでの魔力総量……」

「あ」

何かばれた！？

うん、即座に殴り倒して口を塞がなければ。

どうすればいいか。

即座に移動して殴る 無理。そんな移動できない。

魔術で さすがに気絶させる自信ない。

レイシアとか 面倒くさがりそう。

ウルドは たぶん泣く。

自分でやるしかないじゃんか！！

「貴様、まさかきゅ
」

とりあえずあいつの眼前に炎を。

「ひい！？
」

それを連続させつつ疾走。

魔術も何もかもを使用して接近する！

「！？ そんなのが当たるかあ！！
」

どこの小物だこいつ？

そう思ったあとにはそいつは空中に舞い上がっていた。

だが。

「は、はははははは！！！！ 僕は魔王軍第三連隊長ゲフィエル！！

貴様みたいなやつに負けるわけないんだよっ!!」

「だから？」

「なばあ……ッ!？」

おお、間抜け面。

因みに今現在、コイツの背後に居ます。ははは。足元にはレイシアが作った土の土台が。

「な、何で貴様が　っ!？」

「死んで考えておけよ」

「や、やめ」

「うらあッ!！」

とりあえず斬る。
胴を袈裟懸けに。

「お、覚えておけよ救世主……!!　僕如きを倒したことで良いきに　!！」

……最後までテンプレかよ。

「ちょ、クレインさんッ!？　救世主ってなんですか!?!？」

「……あ」

……面倒なことになりそうだ。
orz

18th ええと、何この構図

まあ、簡単な話だけどさ。

自分自身が請け負う危険なんて、なるべく減らしておきたいだろう？
それこそ、自分のことだしさ。

だけど、それがもしも、自分の所為じゃなく他人の所為だったら？
まあ、普通はその他人を遠ざけるだろうさ。それが普通の反応だし。

で、結局何が言いたいのとかと言うと。

俺が救世主つてばれたことでウルドが俺を嫌わなかったこと。

……いや、俺が彼女達に依存してるってのはわかってたけどさ。

彼女に嫌いとか怖いとか言われるのが凄く怖い。

レイシアはそーいうのを了解して付き合ってくれてるけど、彼女
には旅をしてる、帝国へ。くらいしか言っていなかったし。

俺が悪いんだよなあ……。

「あああああ……」

「……なに、溜息ついてるの」

溜息じゃなくて魂吐きだしてるんだと言って欲しい。

だってさ、だってさ？

俺何も言っていないし信用されて無いだろうし嫌われるだろうしあ

あああああ……！！

「うん、俺、死にます」

「……そう」

引き止めてよ!?

そんな会話をしてるのが現在、帝国の東南端の町、クルス。因みにリヴォルグは外で係りの人にお世話されてる。ここに宿を取り、宿泊してるわけですが。

「ああもう、ホントどうしよう……」

「……何が」

「いや、ウルドの事だって……」

「……ああ」

今何時もより反応送れたね!?! 今思い出したねレイシアさん!!?!

「……うるさい。……相談に乗ってあげてるのはこっち」

「はいすみません」

もう何時もの事ながら弱ッ!? 俺弱ッ!?

……レイシアとかと結婚したら必ず尻に敷かれそうだなあ、俺。とほほ。

「……で、結局タツヤはどうしたいの？」

「いや、元の関係に戻るのは無理だし、最悪キチンと話が出来たら良いなあなんて」

「……甘い」

何が！？

「……何でタツヤは戦いだとあんなに前へと進むのに、私達には消極的なのか……」

「いや、だって……」

戦いとかは経験が在るから何とか成るけど、俺基本的に友達付き合い少ないしなあ。

自身無いです。

「……へたれ」

「うぐッ！？」

酷いッ！？

いや、だってさあ……。

「……だって何も無い。……さっさとウルドの部屋にでも行って話してくる」

「いきなりッ！？」

い、いや、無理！ 無理だって！？

「……なんで」

「い、いや、それはその……」

「……なんで」

ヒッ！？

「………実は、一昨日から彼女に避けられてまして」

「……うん」

「そんであ……俺、嫌われてるのかなって思うと……怖くて」

「……」

何も言わない。重たい静寂。
置いて在る時計だけが音を刻む。

「……へたれ」

本日二回目ッ！？

「……ほら、行く」

「え？」

ちよ、何でレイシアさん俺の襟首握ってるのかな？

あれ？ どんどん引つ張られていくよ？

ってか締まる、締まる締まる締まる息が出来ないっ！？

「……ほら、あがくな」

「~~~~~ッ！？」

い、意識が落ちる！？

「……とまあ、だから、タツヤと話すように」

「は、はあ……」

「か、へ……けふっ」

「……あの、レイシアさん」

「……何？」

「その……クレインさん、ていうか、タツヤさん、何か死に掛けるんですけど……」

「無視」

「……え？ 今、レイシアさんが即答した……？」

「……じゃ」

「え、あ、はい」

「か、ふ……」

取り合えず、ダイイングメッセージはレイシアでいいでしょうかね。

本気で意識が落ちるかと思った……。

「えと、タツヤさん、でいいですか……？」

「え？ あ、うん」

思わず背筋を正して正座してしまう。

それを見た彼女も釣られて正座。

……なんだこの気まずい空気の構成力。

「えと……救世主、ですよね、タツヤさんは」

「……うん」

うああああ気まずい気まずい！！

……あれ？ 何でウルドも頭抱えてごろごろしてんの？

「え、えーと……ウルドさん……？」

「うああああアタシってば救世主様になんてことをといたかなんて言葉遣いをああどうすれば母様に殺される父様に投げられるうああああああああ……」

な、何か凄い勢いで沈んで行ってる。

なんだろう。何があったんだろつかってか凄い不穏な言葉が聞こえた気がするけど気のせいかな？

「……………もどつてこーい」

「ああああああああ……………」

……………。

戻ってこない。

「もう駄目だあたし死ぬ死ぬ殺されるうううううっ！！！！」

「落ち着けっ！？」

何か本当に危ないぞ！？

「で、えーと」

「……………」

何でウルドさんは土下座してるんでしょうかね。なぜだ。

じゃないよ！！ 何だよこの構図！？

男が正座して対面の女が土下座って！？

俺なんかしたか！？

「えーと、ウルドさん……？」

「申し訳ありませんでした……っ」

ええー！？

いや何が！？

「救世主様は世界を救ってくれる人なのに、アタシったら無礼なことばかり……」

ああ！？ 更に落ち込まないで！？

床にめり込んでるめり込んでる頭が！？

「いや、顔上げてっ！？ てか上げなさい！？」

「はいっ」

そんな力いっぱいしなくても……。

まあともあれ。

「救世主が敬われる存在ってことはわかったけど、別に俺は世界を救おうとしてるわけじゃないから」

「……へ？」

何でビックリするんだ。

まあ、普通の反応なんだろうけど。

「只単に俺は、元の世界に帰るためのと、そのあてつけに魔王をぶん殴ってやるうっていうだけで」

いや本当に。

何で俺がこんな眼に。

いや、望んでたふしは在るけど。

「……ツンデレですね」

「……やっとわかった？」

レイシアいつの間に来てた！？
ニンジャか君は！？

「……精霊魔術師」

はい、そうでしたね。
てかなんで二人ともニヤニヤ笑ってるのか。
ええい！ その笑いをやめい！！

「……まあ、こんな人だから」

「ええ。だから放っておけないわけですね？」

何で頷きあつてんだ！？

結局ついて来ることになったウルド。
なんか釈然としないんだが？
てか、俺弱いなあ……orz

18th ええと、何この構図（後書き）

タツヤ（偽名はクレイン

年齢十六。

背は百八十前後。筋肉質な細身のイケメン予備候補軍。

魔術も扱い、実家での武術により他を圧倒する。てかチート。

普通に強い。未だに紋章には目覚めずとも、十分に強い。

フラグ乱立してます。

レイシア・ウエルス・アーテン

年齢十八。

背は160前後。スレンダーな体系。でも結構胸おおきry

基本一泊遅れて返すのが特徴的な何でもできる美人さん。

個人属性を持たない精霊魔術師。

タツヤに対しての思いは彼女にも作者にも不明。

ウルド・フェルイア

年齢は十七。

でも身長は141（断言）。でも胸が一番おつきry

なんかちっこい上ちよこまかと走り回りつつ突っ込み担当。

現在は弓と短剣による奇襲・一撃離脱・前衛援護を担当。

なんというか、皆に弄られる。弄られまくる。

19th 加速の始まり・上（前書き）

どうも、お久しぶりです。無碍です。

テスト週間が終り、やっとこさ投稿が出来ました。

ここから少し、すこーし、タツヤが……どうなるんだろう？

あと、何時の間にかPV十万いつてました。

此処までお付き合いくださっている読者の皆様方に、自分の意志ができるだけの感謝を！

……詳細なパラメータでも書こうかな（何

19th 加速の始まり・上

加速する、と言うことは、どういうことだろうか？

文字面的には速さを加える、ということなのだろうが、それはどういうものだろうか？

加速。

速くなる。

それは様々な物事に当てはまる言葉。

だからこそ、それは

「……タツヤ」

「はいっ？」

行き成り名前を呼ばれて変な声が出た。

今居るのは相変わらず狼車の御者席。とほほ。

その後ろに在る窓から首を出して話しかけているのはレイシアさんでした。だから開く時に頭に当たったら俺死ぬんですが。

「……寝てたの？」

「いや、そーゆーわけじゃないけど」

とゆーか、寝てても問題ないんだけどね。

リヴォルグがテキストに道を進んでくれるし、分かれ道の時は起してくれるし、危険な時も起してくれるし。リヴォルグさまさまです。

「で、どうかした？」

何もなかったとは思っけど。
しかし彼女は首を横に振って。

「……そうじゃなくて。……前倒した、あの変な魔族のこと」

「……………ああ」

いかん、余りに雑魚過ぎて印象が薄く、思い出すのに時間が掛かった。

あの白タイツね。
連隊長とか何とか。

「あの魔王軍何とかーだろ？」

「……そう。……貴方は、どう思う？」

「魔王軍何たらってやつ？」

こくりと頷く彼女。
そうだなあ……。

「実際、俺は最初魔王が居るとは思ってなかったんだけど」

マジで。

只単に王国の腐った上層部が体の良い理由にでもしていたのだと思っ。

ただ、

「今回の件で魔王が居るっていう可能性がかなり上がった」

態々魔族に自分は魔王様の配下だーわははとかいうアホなヤツは居ない。

そんなことをすれば一気に人間が殺しに来るし、何より他の魔族がほうつておかないだろう。

事実、以前魔王は存在していただろうし、その配下の一族とも居るらしいし。

でも、今回のヤツは何もされて居なかった。

つまり

「魔王は、居ると思う」

「……私も、概ね同じ」

ぶっちゃけ、何処に居るとかそういうのは分からないけど、状況的に言つてそうだし、何より俺の勘がそうだと言ってる。

まあ、だからとはいってもなあ……情報が少ないし。

「現状、どうしようもないよなあ」

「……そうね」

二人そろって溜息をつく。

と言いつつ、実はもう一つ問題が……。

「……なに？」

「いや、何じゃなくて。旅費がそろそろなくなってきたんだ」

「……なんで」

「誰かさんがバンバン魔術書とか買うから」

「……知らないもん」

もんじゃないっ。可愛く言っても駄目！

実際かなり危ない。

今は保存食とかでもってるけど、これも後一週間くらいで尽きるし。

後金貨も二、三枚くらいしかない。

最寄の街に行って、適当な依頼でもしてお金溜めたいんだけど……。

「……む」

「レイシアもウルドも、暖かいお風呂とベッドが恋しくないか？」

「……」

「どう？」

「……………」

こくり。

よし、俺の勝ち。

で、今の所、一番近い街は確か……。
アイシス、ね。

てか近ッ！？ 今日中というかあと一時間程度でつくじゃん！？
あー、でも進行方向とは違うから見えなかったのか。

「じゃあアイシスって街に行くけど、良い？」

まあ反論は聞かないけど。

「頼むな、リヴォルグ」

「ヴおふ」

相変わらず頼りになるよ相棒。

で、来たわけですが。

「何この妙な空気……」

堅城都市と呼ばれてるらしいアイシスは、そのとおり名の伯爵リグエダというおっさんが治めている。まあ、街の中心部に城が在ると思えば良い。

で、魔物のランクが高いこちらの地方は、基本的に少数精鋭の兵達が巡回しており、その錬度も、まあ、中々のものだ。

まあ実際、活気も在るし、発展もしている。気候は寒いが、それでも其処までじゃない。

良い町だ。

だが。

「……この街」

「ああ。空気、いや、大気中のマナか、コレ？」

「えと、あの……何か？」

首を傾げてゐるウルド。そういや魔術使えないんだっけ。
てか魔力は使えるから、ただ単に鈍いだけか。いつもは素早いの
に。ああ、ちっこいからか。

「ちっこいって言わないで下さいっ」

まあ無視して。

「無視しないでくださいよおっ！」

「汚染、されてる……？」

「……」

こくりと頷くレイシア。

にしても、マナは世界に漂う魔力。これが結晶し、意思を持つと
精霊になる。

だけどこの場合、汚染されているマナは、

「魔物を呼び寄せる、か」

汚染されていると言っても、その汚染しているものが問題。
これ、俺は只、なんかイヤだなあ、程度にしか感じないが、敏感

な人だとかかなり応えると思う。

レイシアも、ウルドも精神力がかなり強いっぽいから大丈夫だとは思うが、この汚染しているものは……

「……多分、負の感情」

「だよなあ……」

俗に瘴気とか、邪気とか言うけど、これ、意志の負の感情だよなあ。

世界がこんな所に集中して出すわけないし、だからといってこんな代物を只の人間が出せるわけもないしなあ……。

「なんなんだろうなあ」

まあ、だからと言って道のど真ん中でうだうだしてるわけにもいかない。

取り合えず適当な酒場に入って、宿を取ろう。

で、まあ、今回立ち寄った目的は資金集めなわけで、普通にギルドに立ち寄

「おい、あの黒のコートのヤツ……」

「剣と短槍、それと女二人……？」

「アレがうわさの……」

行き成りなんで噂されてるッ!?

ひそひそひそひそ話すなッ!! いらいらするだろっ!

「何でこんな噂されてるんですか……?」

「いや、知らないって」

と言いかうざったい。張ったおすぞそのハゲ! お前だよッ!

「……貴方と、ウルドが一気にランクアップしたからだと思っ」

ランクアップ? なにそれ?

……。ああっ!

そついや今確かギルドでのランクA+だったっけ。
意識したこと無かったから忘れてた。

「確か、二つ名も頂いてたはずですけど?」

「二つ名?」

えーと、そんなもん貰ったっけ?

確かギルドでも強いやつしかももらえないんだろ?

「殆ど人外みたいになってるのに何言ってるんですか……」

「……自分がしてきたことを、振り返るといい」

何で俺悪いことしたみたいになってんの!?

まあともかく。

適当に依頼を探す。

んゝいいのいな。

報酬が少ないし、何より依頼のランクが下すぎて、全部取られちゃってる。

横見るとレイシアもウルドも首振ってるし……。どうしろと？

「A＋ランクの『黒迅』、クレインさんでしょうか？」

「は？」

だ、誰？

いきなり誰ですかー？

「……なんでそんなにきよろきよろするの」

「あの、此方です」

はっ！？

振り向くと、そこはギルドの受付カウンターでした。

……凄く恥かしいんですが。

「あー、やー、えと。何か用ですか？」

無ければ今すぐに此处から出たい今すぐに速く速く……！
しかし無情にもその受付嬢のお嬢さんは営業スマイルをもって。

「貴方様当分の依頼が届いております」

……………最悪orz

20th 加速の始まり・中

そういえば、と、自分の右手の甲を見ている。

此方に来てから、何時の間にかあったこの狼の紋章。

他のファンタジー的な要素が強すぎて忘れてた。

確か、コレ使うと凄く強いんだっけ。

使えたこと無いけどね！

何か自ずと使える時が来るみたいなアドバイスもら　　って今考
えればアドバイスでもなんでもないじゃん！？　くそうっ！　騙さ
れた！！

で、まあ。なんでこんな無駄に頭使ってるのかと言うと。

「ちよっ！？ ここの魔物強すぎじゃないですかっ！？」

「……穿ち続くは世の意志となり、我が名は祖の名に緒を徹す
……」

「ルウオオオオオオアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

いやあ、ついにミノタウロスに出会ってしまった。

しかもほら、なんか身長が4メートルくらいありそうなヤツ。

○

だーいピンチ
きやはっ

……じゃねえよ俺！！　　ってかきもいつての！！！！

いや、まあ、事は昨日に遡るんだけどさ……。

「『黒迅』様　貴方様当てに、依頼が届いております」

なにその中二病みたいな二つ名！？

思わず脱力しかけた。

てかなんで周りも『ああ、あれが噂の……』みたいな雰囲気にな
ってんの！？

「……だ、誰から？」

「エリカ・ウエルト・アーデンハイツ公爵様からです」

誰それ？

え？　俺ソナナ知らないよ？

ってか公爵様で。どんだけ偉い人なのか。

……ん？　いやまてよ？

エリカ？　エリカって言えば。

「あの時の？」

「……」

こくりと頷くレイシアさん。
そうか。あのお嬢ちゃんが。

……なんか微妙に、ってかむしろ非常に嫌な予感が。

「依頼の種別としては、搜索になります」

「まって。と言うか待ってくださいお願いします。ええと……それ、こつちに拒否権無いの？」

「在りません」

何で間髪いれずに言うんだっ！？

依頼なのに拒否権無いって……それ命令じゃないか！？

「内容としては、アルガ山岳の谷間に在る、魔皇石の採掘です」

「……何ソレ？」

てかまた中二病ッぽいなあ……。

「……此処から近辺の高い山岳地帯における、高濃度の魔物の血が凝固して固まり、結晶化したもの。……非常に高価な魔術の媒体として扱われ、年間産出量が極端に低いことでも有名。……理由は、とろろとしたものを、近くににいる魔物が殺してしまうから」

何ッ！！！？

俺死ぬじゃないかソレ！？

「あの、本当に拒否権は……」

「ありません」

即答かよ!?

まあ、法主金額もそんな高くはな

「報酬は五十ソルです」

「やりましょう」

「早ッ!? 速いですよクレインさん!?!」

「……」

いやだって。お金ないんだもん。誰かさんの所為で。
あと一ソルしかないんだよ? 誰がそこら辺の勘定をやっていると
思ってたのさ……

まあ、と言うわけで。
強制です。

「……何で」

「誰の所為でお金がなくなつたと」

「……むう」

目的地の山岳は、一日程度でいけるらしく、敵らしい敵も無く普
通にたどり着けた のだが。

「うお……」

「ええ……」

「……うぶっ」

待つて吐かないでレイシアさんっ!?

いきなりそれかいっ!?

まあともあれ。

そこら中にある人とも判別のつかない骨。
ギアアギアとわめき続ける大型の鳥形の魔物。
そのうえ、凄まじく濃い瘴気。

気持ち悪いことこの上ない。
魔力の通りも悪いし。

「で、確かここから上ったところにあるらしいけど……」

「……そ、う……うっ」

「わああああレイシアさん、こっち、こっちで、ね? ね!?!」

……ま、緊張感のかけらもないのはいつものこととして。
上っていくわけだけど……大丈夫かな。

「……歩ける?」

「……うん」

無理だと判断しまーす。

顔真つ青で何言ってんだか。聞く俺も俺だけど。

まあ、後ろに回りこんで

「ういせ、っと」

「……!？」

とりあえずお姫様抱っこ。

コレが一番楽なんだよ、いやほんとに。

それにこっちの世界に来てから日毎に増している身体能力もそろそろバケモノ染みてきた。だから問題なし。

「よし、じゃあいく」

「……おつ、おろして……っ！」

「がえっ」

恥かしさからかレイシアの右肘が首に直撃した。

……なんで最期まで締まらないかなあ。

で、行く途中に魔物と遭遇したけどフツーに倒して稼ぎつつ行けば。

なんかクレーターみたいなところに着きました。
で、その底に赤い石が在る。多分アレが

「……魔皇石」

で、問題なのは。

祖のまん前にバカでつかいミノタウロス（仮称）がいることで。

あ、こっち向いた。

ちよ！？ 何でもう眼が血走ってんの！？

……まあ、ここで最初に戻るんだけど。

「ブルアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「うをおお！？」

さすがにあの斧を食らったら剣が壊れなくても俺が壊れる。とはいっても、ともに魔術も使えないような瘴気の中で、あいつに決定打を与えられるのは俺だけだ。

なかなか近づけない。それがネックだ。

「斬れ……！」

「**ヴフォツ！！**」

斬線を飛ばしても野生の勘か、斧で防がれるし。

「いっちですよっ!!」

「ヴ、グアアアア！」

ウルドの強襲も尋常じゃない速度で防がれるし。あれホントに生

「こ、これいじょう出てこられたら本当にしんじやいますよあ……」

「……うぶっ」

それは勘弁してレイシアさんッ!?

まあ、あとはあの石を取って帰るだけ。

テキトーに中心部へと歩く。

いやあ、それにしても面倒だった

「ツヴァアアアアアアアアアアオオオオオオオオオッ!!!」

!?

生きてやがる!?

「くそッ!!!」

振りかぶられた斧に対して腰元の剣を抜き、遠心力とともに襲ってくる斧を切

「か あ?」

切れない。

剣を離すことは無かったけど、そのまま吹っ飛ばされた。

背中が地面と接したまま吹っ飛ばされ、幾つかの骨が折れるのが如実に感じられた。

「う あゝ、かはっ」

肺が割れたらしい。胸が熱い。

纏めて血の塊が口について吐き出された。

……これ、やばいな……。

体が動かねえ。

どーしよーもない。

レイシアとウルドが何か叫んでる気もするが、耳もやられたのか、全く聞こえない。

駄目だ。さつさと逃げんかい。死ぬぞ。

ああくそ、なんかないか。

せめて、あいつらだけでも逃がせれたらなあ。

ずんずんと突進してくるミノタウロス（仮）。

さて、そろそろ終わりかね、俺の人生も。

意外と短かったようにも思える。

やりたいことはあるしやらなきゃいけないこともあるんだがなあ。

……死にたくないよな。

まだ、できることが

おい。起きてるか？

……ヒイツ！？ 誰だっ！？

どこの小物だお前。俺だよ俺。

……お、オレオレ詐欺か！？ あ、生憎とそんな金は持ってないぞ俺は！？

いやそうじゃなく。まずお前の左手を見るや。

……は？ 左手？

……なんか光ってるんですけど。

気付くの遅エよ馬鹿が。それが俺。理解したか？

……腹は立つけど、何か普通に理解できた。何だコレ。

気にすんな。するだけ無駄だし。まあ、取り合えず。これからどうするよ、お前？

……は？ どうやったって俺死ぬしか無いじゃん。

・このまま諦めるんだったらな。まあ、ちよつと視線をあつちに向けてみるよ。姫さんが襲われてるぜ。

……。

あのままだと先ず殺されるだろうな。さて、どうする？

……だから、俺にはどうも出来ない。体動かないし。

あ？ んなもんお前の意志でどうとでもなるんだよ。俺が聞きたいのはお前がどうしたいかだ。

……そんなの、決まってるだろうが。

そう言うと思ってたよ我が主。力があるか？

……寄越せよ。俺がああ牛を叩きのめすために。

ではどうぞ 加速が始まるぞ。

直後。

俺は、剣を握り締めて加速していた。

に零に近づけてくる。

勿論只で死んでなんかやらない。

ローブに隠して在る圧縮した現界魔術式を取り出す。

魔術の式を脳内からとあるものを媒介にした物質。

所有者の意志によってソレは解凍され、魔力を注ぎ込むことによつて一人で陣制魔術を可能とする代物。

私はソレを、握りつぶした。

「……」

使用する時に重度の反動が脳に掛かるが、知ったことではない。

「っ！？ レイシアさん、それ……！！」

「……セミパレルアーカネブシ高圧術式開放。……タイトル式題、ロストルール『諦観する頂点』」

光による縛鎖。

それは肉体だけでなく、精神、魔力的なものにまで及ぶ。

光という世界属性によるものと、邪を払うという人間の固定観念から抽出した概念。

切れはせず、縛り続けるものだ。

風による周囲一帯の浄化。

抜うという意志を入れた風は、その通りに当たりの瘴気を払っていく。

「ッ……！！」

膨大な魔術式が脳の処理速度の半分以上を持って行き、焼けるような感覚をもたらす。

無視。痛みなどにかまっている時じゃない。

魔力を捻出し、式に流して世界へと写し込む。

「ヴオオオ……！？」

牛が暴れる。どうやら危険を悟ったらしい。

いまさら遅い。

報いを受けてしまえ。

「
ファイア
発射」

直後に、光が鎖から刃に変わり、風の殴打と真空による凝固。連続して行く。

だが、まだだ。

追加詠唱。

「……祖に在るのならば我が身を天啓とし厄災としての恭賀を捧ぐ」

音節の間に幾つかの語を挟む圧縮詠唱。

その意味することは相手の徹底破壊。

「……息絶えようとも己が思いの螺旋を築け」

さあ、くたばれ。

「
クロイナミタ
『未完の凱旋』」

魔力がからつきしになる。構わない。
只、ミノタウロスを倒す。

「……行け……」

縛鎖と同時に殴打さえも弾き飛ばして此方へと進もうとしている
ミノタウロスを、おし戻すように呟く。

ただただ、感情の進りで。

「行けえええええッ！！！！！！！！！！」

「ヴオオオオオオオッ！?!?!?!」

拮抗していたはずの力が、ミノタウロスを押し、徐々に壊していく。

当然、その分の代償は来ている。

「!? レイシアさん、血が……ッ!?」

「……気にしないで」

「気にしないでって、できるわけ無いじゃないですか!!」

彼女が叫んだのは、口からの吐血だろうか、付加による両腕の出血だろうか。

判らないけど、でもやめることは出来ない。これで倒すから。

「……ッ！？ウルド、貴方……！？」

いきなり体が軽くなったと思ったら、彼女がとある魔術を発動させていた。

彼女も口から血を吐き出し、同じように出血をしている。

「あたしには、これくらいしかできませんから……」

苦笑して呟くウルド。

怒ってるのは、同じか。

頷きあい、直後になけなしの魔力を叩き込み、

「行ッけええええええええええっ!!!!!!!!!!!!!!」

ミノタウロスの周囲が爆発した。

概念同士の相互拒絶による矛盾を利用した爆圧は、生半可なものでは防げはしない。

「タツヤ……」

そんなことはどうでもいいのだ。

タツヤ。彼が気になる。

「タツヤさん……!!」

駆け出したウルドの後を追って、私もかけていく。

突如、地響きがあった。

「ッ!?!」

「なっ、これ、まさか！？」

「ヴオオオオオオオオオオオアアアアアアアアア！」

眼前にそびえたつ巨体は、所々の肉の薄利さえあるものの、未だその威容を誇っていた。

「何で……今のだったら、普通は……!？」

言葉さえ出ない。

もてる最大の力を吐き出したというのに、このバケモノはまだ倒れないのか。

牛面がにやりと笑ったかと思うと、

「ヴォ……ッガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

凄まじい烈風が私を叩きつける。

それは恐らくこれから振るわれる巨斧の余波。

私は、死ぬのだろうか？

「タツヤ」

死にたくない。助けて、タツヤ。

「タツヤアアアアアアアッ！！！！！！！！」

直後。

巨大な魔斧が振るわれた。

「タツヤアアアアアアッ！……！！！！！！！！！！」

叫び声が聞こえた。

何と無く、助けを求めてる気がして。

加速。

速くなる。

何が加速するのか。

答は簡単だ。

俺の意志が届くものの全てが加速する。

意識も、速度も、魔術も、力も。

……俺自身も。

伏せていた状態から一気に跳ね起き、振るわれてきた無骨な巨大な斧に下段からの振り上げの一撃を叩き込む。

「ヴォッ！？」

牛人間（仮）も驚くが、それでも叩き潰そうと力を込めてくる。
が。

「邪魔だッ！」

魔力を刃に徹す。飛ばすためではなく、純粹に切る為に。

『加速』はせず、ただ純粹に斧を切った。

手元を振り切り、満足げに鼻息を荒くする牛。

その隙に再び右手の紋章を光らせて『アクセラレイト加速する』

「シィッ　　！！」

踏み込みもいらぬ。ただただ斬っていく。

加速する。足裏で地面を蹴り飛ばして、牛の周りを旋回して、足から斬っていく。

「ヴォ、ツアアアツガガツガアアアアア！！！！！！」

一応臍を斬っておいた。再生はするだろうけど、当分の時間稼ぎにはなるはず。

「……タツヤ……」

「タツヤ、さん……」

呆然としてる二人。

オイオイ、俺何にも変なことしてないぞ？

まあ、ともかく。

「ごめん、ちょっと遅くなっちゃったな」

苦笑するしかないよ俺。

だけど、何でか彼女達は泣きそうな顔なんですがごめんなさい。

俺なんか悪いことした？

「ヴ、オオオオオオ……！！！」

……。

面倒くさいことにまだ死んでないらしい。

無闇に殺生をすることには抵抗が在るがここまでされて引き下がるつもりは毛頭ない。

「さてまあ…… ぶちのめす」

「ヴオオオオオオアア！！！！！！」

斧を放り出してその肉体で殴りかかってくる牛野郎。

『アクセラレイト加速』。 自己身体能力補正発動。

そのパンチを真正面から受け止める。

「ヴォッ！？」

ほんと、よくもやってくれたよ。

思い切り頭に来てんだよ。

ぶん殴る。

「おおりゃあああああああ！！！！！！！！！！」

思い切り突き上げた拳は牛の鳩尾に突き刺さって。
確かに骨を砕いた。

「……うん、よし、まあ、終わった、かな？」

ず、と響きを残して倒れ伏した牛は無視して、後ろへと振り返って

「無茶させて、ごめんな」

そういうと、何故か彼女達は泣きそうな笑顔で首を振る。
そのまま突っ込んできて

……あ、これってもしかしてまたあの落ち

支える力がなくなっていて、そのまま仰向けに

衝撃。

そのまま意識が落ちていって。

……ああもう、ほんと最期まで締まらないな……。

思わず、膝をつくのだった。

22nd 鍛冶師の一品

……切に願うよ。

もう少し、あともう少しなんだ。

頼むから、もっとこう。

何とか、ならないか？

一つ。

今物凄く暑い。熱いじゃなくて暑い、だ。

二つ。

眼を開けるのが物凄くだるい。いや、在る意味コレは自業自得なのだけれども。

三つ。コレが最後のヤツ。

それは……。

「何で起きたら手足が動かないんだ……」

凄まじくだるい。

いや、記憶が残ってるのは、二人に突っ込まれてK・O・されたところまでなんだけど。

……まだ後頭部が痛い。たぶんコブになってるんだろうなあ……。

で、そういうんじゃない。

「手足が……」

全く動かない。

というか暑い。

なんか妙に柔らかいもので押さえつけられてるような……蒸し暑い。

「ふんぬぬぬ……！！！」

とりあえず力を込めて頑張ってみる。

流石に何十キロもないだろうしいけるだろ……！？

「んう……」

「いッ！？」

な、何だッ！？ 今どつから人の声がッ！？

ちょ、ちょ待てッ、今、そっういや此処何処だッ！？

俺、あの時から意識が無かった

むにり、と。

「ひうっ！？」

「あやっ！？」

……あれ？

……ナンカ、トツテモ柔ラカイモノガ手ニ当タツタ気が。

は、はは、まさかぁ。どそその主人公じゃ在るまいしなぁ。はっはっは。

確認のためにもう一度、手を動かしてみる。

ふにょん。

「ひんう!？」

死亡フラグ決定

! ! ? ! ? ! ? !

や、やばい、速く此処から逃げないと、俺殺される、絶対痴漢罪とかそういうので殺されるッ！？

と、とにかくささと抜け出さないと、つか眼を開けないとヤバイ気が……。

瞬間。

眼に飛び込んだものは。

ウルドの顔面のドアップ。

「ッ……!!?!」

え！？
何で！？
何でだ！？

え！？ え、 ええと、 えええええ！！？！？！

「あ、う……」

寝ているはずの彼女から、吐息が俺の額へと吹きかけられた。それが妙に暖かく、彼女の唇を見てしまい、

「っ！！！！」

思考が白熱した。

綺麗だった。純潔を顕したかのようなピンクは、見ることも罪に思えた。

慌てて反対側へと頭を向ければ、

「ツツ!!!?!!?」

レイシアさんの顔が。

長い睫に大人びた表情が、どこか幼く思えて。

…もう、限界です。

思いつきり息が肺に入り込んで

[illegible]

「ぴゃつ!？」

「……ツツ！！！！？！！？」

…もう、なんなんだろ。

時は流れて数分後。

此処は俺たちが依頼を受ける前に泊まった宿の部屋だ。

それなりに一応の金はあったので、三部屋きっちり取ったはずなのだけでも。

まあつまり、俺の眼前には正座した少女二人がいるわけで。

「みだりに人のベッドの中に入ってくるな!!」

「……みだりなんかじゃない」

ぷい、と顔を背けるレイシアさん。おまけにほつぺた膨らまして……お、お父さんはソレくらいで騙されませんよっ!?

「ウルドもウルド! 何でとめなかったんだよ!？」

「だって……心配でしたし……」

うぐつ。そ、そんな涙目上目遣いなんて、なんてえ……っ!!

「……心配、したのだけど……」

「……駄目、でしたか？」

「……今後、気をつけるように」

わーい、と手をたたきあう少女二人。

……なんでこう、俺弱いのかなあorz

「はあ……」

「そんな溜息吐かなくてもいいじゃないですか。お金も手に入っ

たし、タツヤさんは生きてるし！」

「……溜息ばかりでは、幸せが逃げる」

「誰のせいだと……」

というか、一応確認したけどギルドからはちゃんとお金は払われてるし、というかランク以上の依頼だったので口止め料が+されたし。

でも今回は割りとマジで死ぬかと。あなおそろしや。

「んーでもなあ……」

ひとつ、気が付いたんだけど、まずいことがあるんだよなあ……。

「……何？」

「いや、それが……」

ちら、と、木造の部屋の片隅に眼をやる。

そこには、一本の黒い短槍と、黒のロングコートと、そして

「あ……剣……」

罅割れた鞘と、所々が欠け折れている長剣があった。

流石に、俺が『造った』やつでも、あのバ怪力の牛人間の斧の一撃は防ぎきれなかったらしく。

素人目で見ても、明らかに修復不可能なレベルだ。

長い付き合いだったんだけど、もう使えることはないと思う。

「まあ、だからちょっと、これから新しい剣を買いに行こうかと想ってるんだけど」

「……駄目」

「却下ですッ!」

思いつきり言われてしまった。

「いや、そこを何とか……」

「……駄目」

むう。手ごわいなあ。

「大丈夫だって。危険はないし」

「何言ってるんですか!! つい先日まで死人同然だった人が!」

「だって、二人が護ってくれるんだろ? 男としちゃあ、ちょっと情けないけど、でも二人は信頼してるし」

苦笑と言つか、照れ笑いが浮んでしまう。
だって、言つてて相当恥かしいんだし。

「……あれ?

「……なんで真っ赤になってんの二人とも?」

「……なんでもないっ」

「きききき気にしないで下さいっ！」

「え？ いやだって、顔真っ赤　？」

「「気にしないでいいって言ってるの！！！」」

豪速で飛んできたのは二人の持つ杖と手袋。
顔面ヒット直撃痛いですね。

「……酷い」

取り合えず、泣く泣く部屋を後にするのだった。

で、まあ、ぶっちゃけていうと。

あの剣は超安物（定価1ウイル50セル＝一万五百円）をさらに
値引きしたものだし。

というか、普通の剣が最低5ウイルするらしいからなあ。

「うーん……そうは言っても、クレインさんの馬鹿力に耐えられそ
うなものはそうないと思うんですけど……」

「おいこら。誰が馬鹿力と？」

聞き捨てならん。

「クレインさんに決まってるでしょう？　普通魔術、又は魔力によ
る身体能力強化無しで、魔物と戦える人が馬鹿力といわないでなん

と言いますかつ」

「……」

心にグツサリと刺さりやがりますよチクシヨー！！
ちなみに『紋章』の力に目覚めた時は、あの牛とも互角に渡り合えたからなあ……。

「……結論から言えば、クレインの力に耐えうるような代物は、先ず市場には出ない」

「……どうしろと？」

おしえてレイシア先生つ。

「……簡単。……現状手に入り得る最上の剣を手に入れて、クレイン自身が『改造』すれば良い」

「ああっ！ その手がありましたね！」

「え？ え？ アレを意識的に使えと？ 言っとくけど俺、失敗する確率のほうが高いよ？」

「……そこは、まあ、クレインだから」

「ですね」

何だその確証の無い論はッ！？
ったくもっ……でもさ。

「……この市場の中で、一番良い獲物を、ねえ……」

眼前に広がるのは、ここ、帝国領でもかなりの発展を遂げている、商業の盛んな都市なんですが。

……どうやって探せと。

「……一番、いいもの」

「いや、そうはいつでもなあ……」

俺がモノを『改造』するには、いくつかルールが在るのが、一応わかってはいる。

一つ。

『改造』するものが、魔術的に加工の施されていないもの。

但し、そのものの製造過程ではなく、そのものの元の『モノ』の製造過程に魔術的加工が施されている場合はOK。つまりは素材に魔術的なもんがかかっててもOK。

二つ。

『改造』する場合に、出来る範囲があつて、それがその対象物のキャパシティに比例すること。

……まあ、テンプレな設定で、コレくらいしか判ってないんだけど。

「……そうなの？」

「え？ いやまあ、うん」

なにやら深く考え込むレイシアさん。おーい、何かあったんですかー？

「……判別、大雑把にならできると想う」

何っ。本当ですか？

「……ん。……魔力の反応　つまりは武具の反応を、魔術で己の知覚範囲を伸ばしたら、何とかなると想う。……だいが、絞り込めるはず」

「おおっ。そりゃ凄い！」

えっへんとはかりに胸を張るレイシアさん。いや、そんなことしなくても美人なのは知ってますから。

「んー……じゃあ、ちよっくらやってみっか」

魔術は、想像が大切だ。

己の中の『現想』を、この『現実』へと叩き込む。そして、世界を『引っ繰り返す』のが、魔術らしい。

言った話が、魔力を造って、想像して、『現想』をこの世界へ叩き込んだら魔術は発動する。

だけど、それだけじゃ効率が悪い。

だから、精霊を使つての付加・詠唱軽減。言葉を厳選して効率上昇を図って、いまの魔術は学問となった。

だからこそ、普遍的な技術なんだろうけど

俺には、どうも合わない。

だからまあ、ぶっちゃけ直感だ。ちよっかん。

「式題は探知。方式は魔力反射」

目的と方法を述べる。

「探せ。命ずるままに疾く疾く我が下に馳せよ疾風の精霊」

精霊を解しての魔術。

これを『精霊魔術』という。

「『グロリアス栄光の機首』」

俺から放たれた風の精霊が、一斉にしてこの町を駆け巡る。
めばしい反応を見つけては、俺へと返してくれる。

精霊魔術の最大のメリットは、彼ら独自の判断が在ること
だ。

それにより、負荷の軽減、速度の向上など、様々な恩恵が在る。

……まあ、その分色々と制約も合ったけどね。

ん？ つと、これは……？

「……何かあった？」

「んー……なんというか、これは……」

「え？ え？ 何かあったんですか！？」

いやその、コレはなんというか。
他にも、反応はあったけど、なんというか、その中でも一際コレが気になると言うか。

「まあ、言って見なきゃわかんないよな！」

「え？　ってちょっとクレインさんッ!？」

「……何処へ行くの」

いやだって、なあ。

男の子はこーいう武器とかに凄く惹かれるんだよ。
……判ってくれると嬉しいんだけど。

まあ、そんで入ったのが裏路地で。
適当に絡んでくる阿呆どもを殴り倒して進んでたら。

「なんともまあいかにもな……」

超・怪しいお店。

鳶が張ってるし、なんか黒い魔力が眼に見えるってどういこと。

「……なんか凄いやな感じがするので帰りませんか？　帰りましょ
うよ？　帰りますよねっ!？」

「……ふふっ」

対照的なお二人ですね。
てかなんで笑ったのさレイシアさんやい。

「……どんな『モノ』がおいて在るんだろう……クスクス」

ひいひいひい！？

お、恐ろしい子ッ！？！？！

……ってそうじゃなく。

「えーと、お邪魔しまーす……」

中をのぞく。もちろん首だけをつっ込んで。

店内は薄暗い。

色々な、薬品やら武具やらが無造作に置かれていて、それら一つ一つから魔力が出てるんですが。

……これなんて死亡フラグ？

「何だい？ お客さんかい？」

「うおわあっ！！？！？？」

う、う、後ろから声がッ！？

俺全く気付かなかったよ！？

「へえ……珍しいモノもってるじゃないか。ふんふん……」

ひいひいひいひい！！！！！！！！？

いきなり首筋を嗅ぐなッ！？

「ちょ、や、やめっ……!？」

慌てて振り向けば。

「んあ？ ああ、ごめんごめん、おどろかせちゃったか？」

腰から下を長いローブで覆い、上をタンクトップに似た何かに包む、なんか、凄い美女がいた。

美人じゃなくて美女。コレ重要。

「いえあの、俺、此处に買い物に……」

「は？ だったら入ればいいじゃない？ ほらほら、後ろのお嬢さんも待つてるわよ？」

……後ろに視線を飛ばすのが果てしなく怖いので先に店内に入っておこう。

「んー……」

さつきもいったけど、薄暗いな。

でも、なんというか、売ってるのが、一級品ばかりだ。

「あー久しぶりのお客さんだねえ……」

ふあああ、と大あくびの美女（仮）さん。
カウンターに入ると、頬杖をつき、

「ま、アタシの店へようこそ。久しぶりのお客だし？ イロイ

口と、サービスしてあげるわよ?」

「はぁ……………」

いや、よくわかんないけど、取り合えず見繕う。

んー、こっちは斧と槍。いや、今持つてる槍はいいやつだからいい。

欲しいのは剣だけど……………こっちはショートソード。短剣に暗剣、大剣!? それにバスタードソード!? 普通の剣無いかよっ!?

「あのー……………普通の片手剣とか、刀とか無いんですか……………」

「刀?」

うお? なんか食いつき激しいです!?

「……………刀を探してるわけ?」

「え? いや、取り合えず片手と両手、両方で使える剣が欲しくて……………」

「んー……………」

悩む美女(仮)さん。

ところでレイシアとウルドは……………?

「……………!?!? ……これは、酷樹……………」

「え? これってなんですか? なんかぬるぬる……………ひゃあああああ

「!?!?!」

……。

ほつとこづ。

「そーだねえ……ま、見せるくらいならいいか」

といてなになにやらカウンター下をこそそこそと漁る。
え？ 何だこのまさしく危ない感じは？

「これとか どうだい？」

「これ……ですか？」

どんつ、とカウンターに置かれた一振りの剣を見る。
そのの在る片刃の刃は、たしかに刀に酷似している。
だけど、ソレにしちゃ刀身が酷く厚い。どんなに当てても曲がら
なさそうだ。

「……いいかもしれませんけど、今そんなに、お金ないですよ……
？」

「ああ、いやいや、これはなんとというか、売り物じゃあないんだ。
私が丹精込めて打ったものの一つなんだけど、なんとというか、人を
選ぶ奴でね、コイツは」

苦笑するように言うこのひと。 いや、いきなりなんですか。

「試しに、握ってみれば判るよ」

「はぁ……」

正直嫌な感じしかないけど。

取り合えず手を伸ばし、触れてみる。

……特に無いけど？

思いつきり握り、瞬時に構えを取る ！？

「ッ！？」

ちよ、なんだこれ！？

今までなんも無かったぞ！？ 魔力なんて無かったのに、何でコレ、いきなり黒い魔力が！？

「ぐっ……うっう……！！」

暴れやがる、こいつ……！！！！

「ちよ、お客さん！？ 離しなッ！？ 危険だよ……！！」

取り合えず、うん、人を選ぶってのはいい。

だけどな、使う人に牙しか向けないってのは道具として間違ってるだろ。

モノには魂が宿るってのは在るが、だからといって俺の前に立つんなら拳の一発は、たたきこんでやるよ。

魔力が俺の腕に纏わり憑く。

徐々に感覚が薄れていくという、矛盾した感覚。
だから

「ぶちかますって言ってんだろこの野郎オツ!!!」

ぶちきれる。

いやあ、ナンカフラストレーションでもたまってたのかね。
両手で『コレ』を握り、鞘走りを使って鞘を取っ払う。

黒い、黒い刀身と、ソレと正逆な純白の刀刃が見えた。
余りの美しさに、本来なら息を呑んでるだろうけど。

とりあえずは、コイツの『しつけ』だよなあ？

「と・り・あ・え・ずおとなしくしやがれッ……!!!」

「お、おい、ちょっとお客さん……?」

「おお……!!!」

自分の中の扉を叩き破る。

魔力でぶち殴ってやるッ!!

こっちの手に纏わり憑く黒い魔力を、俺の魔力で押しつぶして

「おとなしく しやがれッッ!!!」

拳で刀身をぶん殴った。

ぴたりと、黒い魔力が静止し。

「へ? って、ええ!? お、お客さんッ!!! 大丈夫なのかい
!?!」

「いや、大丈夫も何も……」

この通り、元気である。

でも殴った拳がちよつと痛い。当たり前か。

「いや、ちよつとそいつを寄越してくれ」

「へ？ あ、ああ、ほい」

「……ほんとにコイツを手懐けてる。どついう魔力してんのさお客さん……」

……なんでこう、俺をそんな人外みたいな眼で見るとは！
俺は普通の一般人ですつ。

「つてか、それ、もしくは壊れちゃったんですか……？」

「ああ、いやいや、そうじゃないよ。ただ、こりゃもうお客さんのものだね、ほら」

「へ？ てうわあぁっ！？ 鞘に入れてから渡してくださいよ！？」

殺す気がツ！？

「だーいじょうぶだって。ソイツはもうお客さんのものだよ。傷つけやしないさ」

「は……？」

わけわかんない。

どゆこと？

「簡単にいえば、ソイツはお客さんと契約したのさ」

余計に訳わかんないんですが。

てか、貴方何者ですか。

魔術師、じゃないだろうし、かと言って一般人でもなさそうだし
なあ……。

美女（仮）は口元を歪め、笑みを浮かべると、

「 ただの鍛冶師さ」

そうのたまいやがった。

……何かまた面倒なことになりそうなんだけど……。
はあ……orz

23rd ちょ、それは危ないんじゃないの？

本来ならば、刀というのは打ちつけあつてはならないもの。

理由としては簡単で、西洋の剣とは違い、日本刀や太刀関連の刃物は、西洋のソレとは比べ物に成らないくらい、一本一本の刃が鋭い。鋭すぎるくらいだ。

西洋の剣は押し切り、叩き切る。

対照的に、東洋の刀は斬り裂き、断ち切っていく。

その刃先は紙よりも薄く、何もかもをその鋭さと技術によって切り裂く。

だけど。

その分、手入れやその刃は物凄く繊細で、凄く手間が掛かる。

まあつまり、刀って言うのは単純に『斬る』ことに特化しすぎたもので。

打ち付けあうことには全く持つて合わないのだ。

というか、打ち付けあつたらその部分の刃が潰れて、まともに使えなくなる。

だからこそ、道場ウチで教えられてた『刀術』は、相手との打ち合いを極力避け、その刃を相手に届けさせるために全身で行く技術だった。

すりあし、にぎりこみ、ふりだし、ぱつとう、いあい、からたけ、けさがけ、じょうだん、げだん、ちめ、
摺足、握込、振出、抜刀、居合、唐竹、袈裟懸、上段、下段、中段、
うたん、しとつ、みねうち、のうとう、
段、刺突、峯打、納刀、その他諸々。

相手の刃を読み、刃先を滑らせ、体を回し、相手の数歩、数十歩先を往く。

そんな技では在るものの。

「どうやら『この世界』は西洋の文化に酷く近いため、どちらかといえば西洋剣、それもツヴァイハンダーとかの大剣系が多い。おもに傭兵。」

騎士とかは縦と片手剣とかなんだけど、実質的に刀と剣の比率は、7：3くらい。

ただ、此方の世界の刀はやっぱり打ち合うことを前提として作られているらしく。

持つの重そうだなー、面倒だなーとか思っていると。

「　　持ってみればわかるって」

え？　なんでそんな楽々片手で持てるんですか貴女。

いや、そうじゃなくて、なにこっちに投げようとしてるんちよ待て危ないからあああああ！！！！

飛んでくる太刀は、　非っ常に刀身が分厚い。

やっぱり互いに打ち合う事を前提としてるんだろうなあ。

その上刃先も頑丈そうで、手入れが無さそうなのはいいけどこれ片手で振れつつたつてきついんじゃない……。

取り合えず顔面まで飛んできた太刀の柄を持つとうとして

「っ……………！？」

予想以上の重量に握り手が砕けそうになり、慌てて鞘に当てていた左手を支えとして入れる。

両手あれば難なく持てるけど、片手だと、魔力強化のない素の状態だときついかも。

「ちょ、一体コレ、何で出来てるんですか……？」

これでも元の世界でだって毎日刀を振って、技術も膂力も多少は在ると自覚してる。

それこそ、こっちの世界の普通の剣とかならきちんと片手で扱えるような所までは来てる。

でもこれは無理。

刃渡りは一メートルくらい。柄を合わせて一メートル二十くらいか。

刀と比べちゃ大振りに過ぎるが、それでも只の鉄製なら、こっちに来てから日に日に強くなっていく身体能力なら扱えるはず。

でもこれ無理。重たい。

美女（仮）はにやりと笑って、怖くてきな笑みを浮べてるし。いや騙されないぞ。今朝散々な目に遭ったばかりだし。

「なんでしょうねえ？ 判るかい？」

「いや判らないから聞いてるんでしょうよ。意地悪する前に答えてくださいって。これ絶対曰く付でしょう？」

さっきの慌てぶりからすると外れてるとは言わせない。というか所持者に此処まで完つ全に齒を剥いてくる武器ってどういうことだよ。

「んー……ま、お客さんにならいいかねえ……。後、アタシの名前はファニーだよ。いい加減面倒だろう？」

「はあ……。じゃあ、俺はクレインです。傭兵やってます」

「そんなのみりゃ判るよ」

「ごもつとも。」

店の奥へと通された俺たち。

途中に幾つか明らかに笑ってる武具とか動いてる武具とかがあったのは無視無視。

でも不思議と美女（仮） ファニーさんからは魔力が感じられないんだよなあ。

こんだけのものを作ってたら絶対魔力を使わないと危険だと思うんだけどなあ。

「で、まあ改めて自己紹介させてもらうかね。アタシはしがない鍛冶師ファニー、一応ここの店をやってる」

「えーと、傭兵やってます、クレインです」

「……同じく、レイシア」

「同じくつ。ウルドですっ」

……酷く眼が耀いているレイシアさんと体中がぬめっているウルドさん。

あんたら何したんだ。

「ありやりや……お前さんは大丈夫なのかい？」

「へ？」

あああああ……！？　ど、どうぞお構いなくと言いたいけどこっちの方が迷惑か。

よし、好意に甘えるんだウルド。

「えーと、あの……ごめんなさい……」

「あー……すみません……」

「ああいやいや、気にしないでいいんだよ。どっちにしろアレは勝手に増えるし、そもそも売り物じゃないしねえ」

……それは余計に危ないんじゃないでしょうか。

いま一応お金は在るけど、持ってきてはないし、そもそも補給のために寄っただけなんだけど。

……嫌な予感が。

「別に高いって訳じゃないし。そもそも気にしてないから。取り合えずあっちに在る水場で体洗って、適当に服着てきな？　さっさと流さないと後々面倒だし」

「あ、じゃあ、使わせていただきますねっ」

何でそんな元気はつらつ何ですかウルドさん。

とか思ってるのと直ぐに水場へと走って行ってしまった。……いけないといいんだけど。

「うつきゃあっ！？」

……鈍い音がしたなあ……。うん、きにせず行こうか、うん。

「……貴方は、何者？」

「いや、だからただのしがない鍛冶師だって」

なんでレイシアさんは冷たい目でファニーさんを睨んでますか。
対するファニーさんは至極冷静。というか何処吹く風だ。まさに
馬耳東風。

……いや、気持ちはわかるけどさ、少し落ち着こう。

「ほらほら、新しい武器を売ってもらったんだしさ」

と、俺とレイシアの前に在る、机の上に乘せられた一振りの刀を
見る。

既に漆黒の鞘に入れられ、さっきまであったヘンな威圧感……ま
あたぶん魔力つぽいものだと思うけど。まあそれが綺麗さっぱりな
くなっている。

見れば、鞘自体にもなんか加工されているらしく、少し、本当に
少し、薄っすらと紋様が彫られてる。

だけど。

ちろり、と此方へ向けられたレイシアの眼は、心なしか冷たい気
がした。

……なんでよ？

「……端的に言わせて貰う。……この鞘に掘られてる紋章」

「ああ、コレ？」

「……そう、それ。……それは、『擬似紋章』って呼ばれてる、数少ない永続する魔術の一つ。……それを彫れる紋章師は殆ど居ない。……少なくとも」

……なんで眼が細くなるんですかレイシアさんっ。

あ、シリアスぶち壊してごめんなさいごめんなさい。だから術式組みながら魔力使うのは勘弁してください。

「……ともかく。……これを彫れる人が、そうそういないの。……少なくとも、こんな路地裏で売ってるような店に仕入れられるほどのものじゃ、ない」

「へー……」

思わず口が開く俺。しかも殆ど眼が点。

いやだって、いきなりそんな事言われてもなあ。

何処がどう凄いのか。

「……クレイン」

……あの、何でそんなに眼が据わってるのでしょーか？

笑って無いですヨー？ ほらほら、スマイルスマイルー。

「……解剖す」

「ほんとすいませんでした」

光速土下座。

いや、だってこの子前科あるから。前寝たときにメス持って立

つてたから。しかも何かヘンな笑み浮かべてたし。
……死ぬかと思った。

「ぶっ……くっくっく……」

笑われてるし。

何故に？

「いやいや、あんたらのやりとりが楽しくてね？ ついつい……」

「……」

「ちょ」

何で俺を睨むんですかレイシアさん。それはお門違いで御座いますよ？

「……もしかして、恋人同士？」

「ぶっ！？」

「……！！！！？！！？」

噴いた。否、飛沫いた。主に俺の口からお茶が。

ファニーさんは飛沫を綺麗に布でガードしてやがる。ぬう……やるなおぬし！！？

いや、そーでなく。

「……もう一度、お願いできますかー？」

「いや、だから、恋人同士なのかなー、って」

「いや、あの、俺とレイシアはそんなんじゃ……！？」

「……」

あの、何で、その、レイシアさん……？ 眼が、眼が笑って無いですよー……！？

無言で術式組むのは危険だと思うんだ。うん。

そしてそこ、ファニーさんなんで腹抱えて笑ってんですか。

「……別に、いいもん」

えええええ何でそこで幼児退行みたいな言葉遣い！？
あつ。ちよつと、レイシアさん？ 俺はこつちだよ？ ほらほ
ら、そっぽ向かないでくださいって。

「いやいや、ほんと、あんたらは面白いねえ……っ」

「悪かったですねっ！」

ちくしょう。絶対笑いものにされてるぞ俺たち。
というか脱線しまくってるのは気のせいですか。

「ああ、いやいや、すまないね」

まだ笑いを引き摺ってるし。失敬ですぞつ。
まあともかく。

聞きたいことは幾つか在る。

剣の素材とか、というか。剣のことだね。全部。

「そうだねえ……まあ、まずは剣の素材だけど」

「はい」

「それ、古龍の純血に魔皇石を浸して、知り合いの高位土精靈ノームに呪いをかけてもらって金属に変換して、それを打ったんだ」

「……」

はあー……そんな凄いものだったのか。いや、魔皇石の凄さは判るけど古龍の純潔とかの価値が全くわからんが。

ん？ だったらこれの値段もそれなりにするんじゃない？

「ああ、や、だから、その子は今までの使用者の腕を悉く切り落としてきたからその厄介払い……」

「お返ししますッ！……！！！！！！！！」

誰が使うかつ！？ しかも腕切り落としたって！？

悉くつてことは全員だろ！？ なんだそれ！？ 完ッ全にやばいじゃないか！？

しかも今『厄介払い』って、『厄介払い』ってえっ！！？

「まあまあ、小さな事を気にしてたらでかい男になれないよ？」

五月蠅いつ！？ てか腕が落とされることが小さなことかいアンタ！？ ちげえよ人生であるかないかの大事だろうがっ！？

というかそれなりに背はあるから別にいいわいっ！

「やー、きにしないきにしない。ほら、相方のー、あれだ、レイシアちゃんだっけ？　は、ほら、平然としてるよ？」

「なにいつ！？」

ぱつと右横へと振り向く。なんだとレイシアさんやいなにゆえ貴女様はそうに平然としておられるのですかー！！！！！！？と叫ぼうと思っていたが。

「……………」

ただたんに彼女は放心して何にもしていない状態なだけでした。

……………わお珍しい。写メ写メ。

ケータイねえよ！　てかまず選択肢にそんなものはねえっ！！！！

「しれつと嘘つくなっ！！！！」

「や、嘘じゃない嘘じゃない。多分レイシアちゃんが呆然としているのは、魔皇石云々の辺りだろうからない」

からからと笑うこの人に、悪意はあっても敵意は無いんだと確信する。

ただ、だからといって少し腹が立つのは別問題である。

……………絶対後で仕返ししてやる。

ともあれ。

「で、話が十分逸れましたがソレを元に戻して、結局の所、これの正体ってなんなんだ？」

あの黒い魔力。侵食する害意。

そして今語られた曰く話。どう考えたってそんじょそこらのバケモノじゃあ及びつかない。

日本でも村正等を代表にした妖刀、魔剣は幾本がある。振ったことも見たことも無いが。

けどまあ、多分、これはそんなものじゃあない。

ぶっちゃけ屈服させたとかキミのものとかわかれても使う気にはならない。

それを見た彼女は、でもやっぱり変わらないよ表情が。何だこの人。バケモノか。

「酷いねい。アタシは正真正銘、普通の人間だよ」

絶対嘘だ。

「……まあ結局の所、その子は今まで誰も使う事を許さなかったんだ。けど」

……なんで御座いますよ？

いきなり鋭い目つきになられても困るのですが。

「クレイン君、君は魔力でその子を完全に抑えた。そんなバケモノは今までに一人としていなかったもんでね」

苦笑しつつ手元のコーヒーを啜るファニーさん。おいおい。誰がバケモノだ誰が。

「君以外にいるかい？　そもそも、魔力の塊みたいなその子に魔力で打ち勝つなんて、君はホントに人間じゃないんじゃないかい……？」

くつくつと笑うファニーさん。どっからどうみても俺は人間でしようが。救世主らしいけど。

……だからバケモノみたいな魔力なんでしょうけどねー。

「ま、ともあれその子に自意識は在っても感情は無いよ。一度屈服させたら反抗することは無いはずさ。今後、勝手に鞘走りして切れるとか持ち手が緩んで首が飛ぶとか言うことは無いから安心してちょーだいな」

「……幾つか安心できない語群が在るのは気のせいですか先生……」

「気にしない気にしない。そもそも一度キレてからあの黒い奴は出てきてないだろう？」

「や、まあ、そうですね」

でもなあ、安心できないんだよなあ。

そんな俺の心を見透かしたかのようにファニーさんが更に一言。

「簡単に言えば、だけどね。その子は龍みたいなものだね。気に入らない相手ならばとことん牙を剥くけど」

「気に入った相手だと、力を貸すって訳ですか」

つまりはあれだ。

この太刀 否、大太刀は、自分の意識がある。で、自分が主だと認めなければ使用者に対して害をなす、と。

…… まんま妖刀じゃん。しかも超危険。

ファニーさんから言わせれば、コイツは既に俺の事を主だと認めているらしい。というか、意識はあっても個人的な感情とかはこいつには無いんだろうなあ。

多分、使用者を選定するだけでコレに精霊とかが宿っているわけじゃない。多分。

「で、この子を使ってくれるかい？」

「……」

そう問うて来たファニーさんの目は、やはり何処かしら不安も抱えていて。

だけど、俺は自分の意志でしか行動しない。
だから

「俺の相棒として、使わせていただきます」

深く、丁寧に一礼する。それが礼儀だし、俺の気持ちでも在る。

これだけの一本は世の中にもそうは無い。切れ味も頑丈さも、折り紙付きだろう。ちょっとあぶないが。

多分、いい感じに振るわせてくれるだろう。

「そつか。……うん、クレイン君、有難う」

「いえ」

お互いに苦笑しあう。理由は何と無く。机越しに握手を交わす。や、どんだけの意志が在るかはおして図るべし。

にしても、いい買い物だと思う。
どうやらめちゃくちやに高いもので鍛ってそうだし。
その分折り紙付きだろう、性能は。

「今後も立ち寄らせてもらいますよ」

「ああ、そりゃあ有り難いね。見ての通り、此处は『普通』の客は来れないから、中々利益が上がんなくてねえ」

苦笑するファニーさん。

まあ、普通の人は来たくても無理だと思う。絶対空間歪曲とかしてるって此处。

ま、ともあれ此处に来た理由は達成したわけで。
そろそろ家に帰ろうかと思う。

「よし、じゃあそろそろお暇します」

「ん？ もう帰るのかい？ もうすこしゆっくりしていけばいいのに」

「や、そろそろリハビリもかねて簡単な依頼をこなしてかないと怠け癖が付きそうぞ」

苦笑しつつレイシアの肩を揺さぶる。

……起きない。

……ほつとこうという悪魔のささやきを何とか無視して、お姫様抱っこでもして帰ろうかと思う。起きた時の反応がとても楽しみだ。

「……あくどい笑みを浮かべてるね」

「ははは、何をそんな、こんな好青年を前にしてそんな言葉を」

白い眼で見られても知らん。だって楽しいから。
ういしょ、と。あー、やっぱり軽いな。

剣は跡で業者にでも頼む。流石に襲われたらきついし。

「よし、じゃあ、また来ます」

「ん、いつでもよつといで。君は面白い客だしね」

くつくつと笑うファニーさんに苦笑いで返しながら、出口へと向かっていく。

いやー、今日は何かいいい日になったなあ。ほんと、経済的にも心象的にも。くつくつく

「あれ？ 皆さん何処いったんですかつ？ うっきゃあ!？」

鈍い打撃音と共にウルドの悲鳴が聞こえた気が。

……やっぱり君は落ち担当だな、ウルド。

23rd ちょ、それは危ないんじゃないの？（後書き）

どうも、お久しぶりです、無碍です。

えー、まずは言い訳から（オイ

実は新型インフルくらってまして、完全に沈黙状態でした。すみません。

ええと、次にお礼を。

何時の間にか40万PVを超えるところかなんだそろそろ50万いきそうだというこれは。ひとえに皆様の力です。本当有難うございます！

では、これからもよろしくお願いいたします。
無碍でした。

……あと、何か50万PV等のお礼としてなんかショートストーリーでも書きたいなと思うので、何か要望でもあったら感想に下さい。
ではっ

24th 武闘祭？ 何ソレ？（前書き）

いろいろと遅くなってすみませんでしたー！！！！

いや、いきなりですみません。パソコンがご臨終なされてデータ全部行っていました。おかげで色々と大変でしたすみません。

しかも今回は短いし……orz

ただ、その分次回にかけるものがいくつかあるので、そこら辺をお楽しみいただければいいなあ、と。

あと、60万PV突破有難うございます！！ というか、ドンドン伸びていつか果てしないことになるんじゃないかと心配で心配で……。

24th 武闘祭？ 何ソレ？

笑ったっていい。指差してくだらないって言われてもいい。
罵られても否！ 逆に罵りた すみませんでした。
まあ冗談としても。

今現在、俺は帰り道を歩いてるわけですが。
因みに普通にシャツとズボン。いや、街中で帯剣してコート羽織
ってたら何気に目立つんだぞ？

大体太刀は明日宿に届くし。今は手ぶら。
ズボンに入れてある財布くらいか。所持品は。

ぼてぼてと道を歩く。

既に路地裏からは出ているので、今は大通り。
道端には商店がずらりと並んでおり、威勢の良い引き声や、活気
があふれている。

……うん、ここまではいい。普通に、一般的なことだ。

だが。

俺の隣にはレイシアとウルドが居ない。
はい、何故でしょうか？

A・逃げ出した。

いや待て。違う違う。何で逃げ出すんだ。というかなんか誤解を
与えそうな描写じゃないかコレ。
そうじゃなく。

裏路地から抜けて、商店がほら、ここいっぱいいるだろう？
まあ、女性は買いい物が好きなので、それはお二方も例に漏れず

……。

即座に飛んでいかれました。

つまり？

……置いて行かれたんだよチクショー！！

あ、い、いや、別に宿屋への行き方がわからないわけじゃないんですが。

ぶっちゃけ、自分もそろそろ補給物資とか確保しなきゃいけないわけですよ。

リヴォルグの餌とか、保存食とか、他にも色々あるわけですよ。……。

やることは結構多いわけですよ。

まあ、取り敢えず今日の目的の『武器調達』は叶えたし、他の目的といえば、物資の調達、魔王とかの伝承についての調査、一応資金集め……。

……何か自分がこのパーティーの会計役になってるんですが。いつのまに！？

「まったく……財布事情も楽じゃないんだけどなあ……」

実際そうだ。

この前の魔皇石の依頼でかなり稼いだとはいえ、その三分の一が治療代に吹っ飛んだ。で、色々と買い物をするとか既にまた減るわけ。

……現状。金貨^{ソル}十二枚、銀貨^{ウシル}二枚、銅貨^{セル}二十七枚。

日本円に換算して、百二十二万二千七百円で御座いますわよ奥様！

何気に多いじゃないかと？ 実はそれがそうでもない。

確かに、あちらの世界で稼いだともなると大金だ。無論、こちらでも大金ではある。実際、平民の人たちの基本年休の三分の一は持っているわけだし。

ただ、これを検分してみると、ちょっと泣きたくなる。

で、自分たちの所持品を換算してみる。

先ず、自分の大太刀。これは価値がとんでもなく高い、らしい。レイシアによると数百金貨^{ソル}はするらしい。

お次にレイシアさん。

装備品一式でかなり高額。他、色々と魔道書とか買ってたために膨れ上がってます。

最後、ウルド。

自分がやった短剣と、弓。あとは服とか諸々。

で、コレを換金すると、千〇二千金貨にはなるだろうなあ。

コレだけの中で、殆どが装備品に持っていていかれてる。つまり、コレを失った場合における損失はデカイ。

言うなれば、大金で戦ってるようなもの。いや、そこは殆どの人と同じだけど。

だが、もしもそれを失ったら？

とんでもない額の損となってしまう。

で、これを報酬額とかに合わせて鑑みると。

報酬額が少ないということはあれど、多いということは無い訳だ。命張ってるし。

まあ実際、それを失えば元も子もないわけで。

頭を悩ませるのはまあ、これだけじゃないんだけどなあ……。

「……ッ」

またか。

軽く痛痒い感じが、右手の甲から発せられる。

かっこよく言うത്『疼……やめよう。中二病過ぎると恥ずかしいから。』

端的に言えば、先日の紋章がなんか使えるようになった時から、何か微妙に紋章が微弱に発動している感覚があるのですよ奥さん。実質的な障害は無いけど、これがまた如何ともし難い。

こっ、いきなり人の動きがスローになったりするのだ。自分だけが早くなった感じ。

使いこなせない力つてのは面倒なんだなあ、と実感する。

自分の体は使い方も加減もわかってる。だけど、この力は全く判らない。

怖くも在るし、力強いとも思うけど……。正直、手に余るんだよなあ。

確かに、一応は自分の意識でスイッチの切り替えが出来る。だけど、その強さが定まらない。

ある時はほんの少しだけ周りより早くなり、またある時は全てを置き去りにしてしまうほど早くなる。

これは、レイシアとウルドには隠してある。いや、心配かけたくないし。

で、今は少しでも発動してる状態で、こうなるとスイッチの切り替えが出来ない。まあ、移動速度が上がっただけで、そこまで不便なわけじゃないんだけど。

「ああもっ……」

思わず溜息。と言うか、そろそろ魔王とやらの手がかりが無いものかと思う。

今まで色々な図書館、資料室などを当って来たが、どれ一つとして資料が無いってのはどういうことだ？ いや、多分禁忌にした、とかで禁書、下手したら廃書にされたのかもな。

……どうしよう。俺下手すると元の世界に戻れない？

とぼとぼと歩きながら考える。

……そういえば、此処って元々は魔王がいたところらしいよなあ。何か手がかり無いかなあ。

救世主と呼ばれた俺であるわけで、その救世主としての役柄を果たせば元の世界に戻るのではないか、という単純な思想。

……悪かったな。頭悪いんだよ俺は。

「なあ！ 今年の武闘祭はどうなるんだろうな？」

「さてねえ。アタシヤ以前みたいに無銘の人が勝つんじゃないかと思うんだけどねえ」

はあ、そんなものがあるのか。血気盛んだなあ。やっぱり商業が発展とかしてくるとそういうものが必要になってくるのかな。

「どーだろうなあ。でもさ、もしかしたら今度はいろんな人が来るかもしれないぜ？ だってよ、優勝者には伯爵様から何でも褒美がもらえるらしいぜ」

なんですと？

「またまたあー。そんなうっさんくさいことに手え出してんじゃないよ、アンタは」

「いやいやいやっ！ ほら、これ！ 武闘祭のチラシ！！ 確かに
かいてあるだ ヒイツ！？」

気づけば俺は、その人の肩をつかんでいた。
そして、きわめて紳士的な口調で、

「ちょっとそのお話、詳しく聞かせてもらえませんかねエ……？」

ほら、俺ってば紳士。

そうだろう？ だって優しい笑顔を浮かべてるんだから。

25th ちょっとした日常

金がない、と言うのは、中々にキツイ。

何故なら、この経済社会、金が無いとまともな生活をしていけないからだ。

傭兵と言う職業は、必然的に多額の金が必要となる。

先ず、傭兵を始める為に、装備を整えなきゃならない。

槍とか剣とか。どっちにしる武器が要ることには変わりないし、それ以外にも胸当て等の各種防具。まして、拠点を置かず旅をしながら傭兵をするなら、馬車が必要になり、そして馬車のための馬と寝袋などの生活必需品とあれとこれとそれと…… e t c e t c.

まあ元手、つまりは資本金がそれなりに掛かるって訳だ。

そして始めた所で終わりにじゃあない。

その後の依頼を確実に、しかし出来るだけ危険を減らし、生存率を上げて達成するためにまたもや医薬品などが要る。こう言う時に魔術が使えると凄く便利なんだよ。いやほんとに。

けどもし、もしも依頼を達成できなければ、違約金を支払い、その上で各自で治療して装備を整備してその為に又お金が減って……。

道具つてのは消耗品で、どう巧く使っても磨耗して、そして壊れていく。その終わりを何とか先延ばしに出来るのが整備。

成功したとしても元手以上に金を使って損をするなんてザラ、らしい。幸か不幸か、今までそんなことは無かったけれども、以前他の傭兵が言っていたところによると、

『薬草を取って来い、なんて依頼があつてな。だが、その依頼には魔物が出現するなんて書きちゃ無かったんだ』

傭兵の依頼用紙には、魔物の有無等が書かれることが絶対の規則。

しかしそれでも時々、書いていない奴が居て、そのせいで死んでいくことが多いんだそうだ。

結局その人は依頼人が姿を眩まして依頼金もパー。正に骨折り損の草臥れ儲け。

よーするに、傭兵って言うのはお金の出入りが非常に激しいってコト。

さて、こんなに長く語ったのは一つ意味がある。
ソレが何かと言うと。

「おっちゃんこれ安くないの!？」

「無茶苦茶言うんじゃないやねえ若造があっ!！」

大通りの出店街。

非常に人通りが多くて、余り目立ちたくないのですがしかし目立ってる行動を更に目立たせたのは自分です。……何言ってるかわかんないよもう。

まあ、簡単に言うと。

あの後レイシアとウルド探してました 何か騒ぎがあったので見に行ってみました 何か装飾品の露店が騒がしい レイシアとウルドが居ました 何か買いたいらしいけど買えないらしい 値切ってみましょう。

と、こうなつたわけですよ。ほら、実に簡単。

……にしても、ここの主人も凄い頑固だなあ。やっぱり商業の街だけあって、こういうことは譲れないのだろうか。

因みに、買おうとしている品は品の良い指輪。装飾は簡素だけど、ソレが質素な魅力を引き立てる感じ。実にウルドに似合うと想う。

と言うことで、ちょっと躍起になってます。

「良いだろ？ ほら、一銀貨でいいからさあ！」

日ごろから苦勞かけてるしなあ、ウルドには。

因みにレイシアさんは除外。迷惑をかけてないなんて口が裂けても言わないけど、迷惑をかけられる比率の方が圧倒的に高い。

「駄目だ駄目だ！ 言っただろ？ これはアトレル村で取れた、良質なコーラル鋼を使った魔道補助具なんだ！ 大体原価が五銀貨なのにお前さんこれ以上値切ろうつてのか！！？」

「だからってペアで買っただからもう一声！ もう一声聞きたいなあ！！ そっだろう皆さん！！！」

「すげえ……あのおやつさんからあそこまで値引くなんて……」

「鬼か、畜生か……」

「ド鬼畜だ……ドSだ……」

一部変な言葉があるけど無視だ無視。

というか実際素晴らしい品だよコレ。うん、もしも金があるなら元の金額で払っても良いくらい。

指輪の効力としては、まあ大体目利きだけど多少の体力増強、速力強化ってところかな？

「ほら、皆賛同してるだろ？」

「う、ぐぐぐ……っ。し、しかしだなあ……」

よし、もう一声で落ちる。

ふふふ、実は秘策があるのだ。

「おやつさん。俺、これでも腕は立つんだ」

「そ、それがどうしたってんだ？」

「これでも『黒迅』なんて呼ばれてる身でね。今度武闘祭に出るんだ」

「何っ！？」

よしっ！ 掛かった！！

想いの外、『黒迅』なんていう恥ずかしい名前は知れ渡ってるらしく、おっちゃんの顔が驚愕に染まった。

なんか野次馬の人たちもびっくりしてる。いや俺そんな派手なことしてないんだけど。

「武闘祭で有力選手が使った、何て噂が流れると良く売れると思うんだけどなあ？」

「兄ちゃん……仲良くしようや？」

「ふっ、此方こそ」

がつちりと握手を交わすおやつさんと俺。
そんな俺たちを横で見ている二人は、

「何か……身も蓋も無い気が……」

「……武闘祭？」

白い眼と疑問の眼に、今は応える気は無いのでした。

場所は変わって。

大通りから少し離れたところにある定食屋俺たち三人はいる。

離れたとは言っても、そろそろ昼食時だ。活気に溢れたこの街は、やはり食事は騒がしいのであつて。

威勢と言つかもう殆ど悲鳴になりかけてる注文の聲が飛び交ってるのは何故ですか。耳が逝きそうだ。

「俺はググの唐揚げ」

「スバンダのお刺身をお願いします」

「……この、リグのサラダ」

三者三様だよ。ほんとに纏まり無い俺たち。誰だよりダー！！

……すいません自分でしたorz

ともあれ、注文をメモした店員さんは厨房に声を上げてあっち行った。

うむ。とりあえずコレで誰かに聞かれることはなくなったな。周りは滅茶苦茶うるさいから聞くわけもないし。

「……武闘祭って、なに？」

暑そうなローブを着たレイシアさん。うん、良い質問。

でも取り合えずその振り上げた手を下ろしましょう。出来れば術

式もキャンセルの方向で。

あ、ウルドが慌てて下げさせた。いや、何でそこで不満げな顔するんですかレイシアさん。

と言うか、いつの間にか仲良くなってるなあ。うん、いい事だよなあ。

「で、武闘祭って、なに？」

「……」

現実逃避してすみません。

「この街で開催される、一種のバリ・トウッド。何でも年に一度の大会らしくて、これ目的で集まってくる人も多いんだってさ」

……ふうん、と何か興味なさげに頷くレイシアさん。酷くない？
対照的に、ふんっ、ふんっ、とナイフとフォークを持ったまま熱心に首を振るウルド。うん、和む。

「あれですよ、確か毎回百人以上の人が申し込むくらいおっきな大会なんですよー!!」

うん、そのとおり。いや、所々訂正したい部分もあるけど、言ったら落ち込みそうなので割愛割愛。

さて、この街で行われる武闘祭、正式名称をアイシス連現武闘祭という由緒正しい大会なのとか。

何でも、昔の救世主を選定するために行われていたらしい。非常に嫌な気分だが、まあそれは無視して。

「そうそう。現に今さっきチーム戦と個人戦に申し込んできたけど、

チームは三十チーム、個人は百二十人は居たしなあ」

申し込み用紙に書いてた時に滅茶苦茶に多かったのを覚えてる。当初は何じゃこりゃー！？と想ったものだけど、

「それぐらいが普通なんですか？」

「らしいね。街のおばちゃんたちも今年もコレくらいか、って言うてたし」

井戸端会議中のおばちゃん達の会話は結構重要な情報源だ。いや、さすがに輪には加わってない。立ち聞きしただけ。

だけど、質は上がっているんじゃないかと想う。普段ランキングつまりは、ギルドで上げられる各個人、または各パーティランキングの上位者がちらほらと名簿帳に有った。

戦ったことが無いから判りはしないけど、それでも何だか一度手合わせをしてみたいと言う欲求が沸々と。ほら、新しい武器も手に入ったし、しかもそれが大太刀何ていう、元の武器に近いものならもう、たまりませんな。

「……それで、何がどうして、大会に？」

「ん？ ああ、実は優勝賞金がとても魅力的で。あははは」

いやあ、貧乏傭兵としては五百金貨ってとても魅力的で。

「……面倒」

ぽつり、と言うレイシアさん。ふふふ、今回は逃げないと言う取って置きの情報があるのだ。

にやりと内心でほくそえみながら、

「資金不足は誰のせいかな？」

「……」

顔を背けるレイシア。まだまだ。こんなもんじゃないぞ？

「今さっきの補助具だって元はレイシアが欲しがってた物だったよ
うな気がするんだけど？」

「……う」

バツが悪そうに俯いてへこたれるレイシア。うん、やっぱり可愛い。

まあ、ソレで許すかと言われて許せると言うのは別問題なわけ
で。

実際、嗜好品は二人とも余りとやかく言わないのだが、ウルドは
良く食うし、レイシアは魔道の品をかなり買うのでコレが又出費に
……。

ん？ 何で拒否しないのかって？

……笑顔に負けました

「まあそんな訳だ。優勝を真面目に狙えるほどレベルが低いわけ
もない。けど、資金はちょっと危ないし、上位八位に入ればそれな
りのお金も貰える。……どう？」

問いかけに、眼を瞑ったレイシアと、こちらに眼を向けるウルド。
……まあ、既にチームとして組み込んでるから拒否権無いけど。

「……仕方ない、魔具が手に入らないのは、厳しいから」

「よし」

思わず手をぐっと握る。ウルドへと目線を飛ばしてみれば、普通に頷いた。同意の合図らしい。

これで一応、資金の目処は立ったわけだ。

「大会までは後五日。で、提案なんだけど、寝こんでたからちよつと体も動かしたいし、最低限金も稼いでおきたい。……と言っわけ、依頼を受けたいんだけど。討伐系のやつ」

『……………』

……ちよ、何ですかその白い眼は。いや言いたいことはわかるよまだ懲りてないのかって眼ですよねそれ。

いやでもまあ、腕を慣らしとかないと何があるかわかんないし。

中途半端に終りたくないし。

「ま、まあほら。いいだろ？」

「……言っても、聞かないのは、重々、承知してる」

「ですよねえ……………」

思いつきり苦々しい表情するなっ！！！！

26th 森への日常道中（前書き）

テストは……キライです……。

26th 森への日常道中

短槍を背中にかけて、その上に交差するように太刀を付ける。

脚甲と籠手をつけ、ブーツを履き、黒いロングコートを羽織る。

何故に黒いかって言うと、個人の趣味も有るけどそれ以上に術式の隠蔽が楽だから、と言うのもある。

流石にファニーさんお手製の術式を堂々と晒す勇氣は無い。後で何されるかわかったモンじゃない。

最後に指貫形のグローブをつけて、と。

うし、これで一通り以来用装備は完成。

あとはポシエットに入れてある薬品を確認して……よし、OK。
忘れ物は無いな？

「うし、レイシアー、ウルドー、準備できたぞー」

「……ん。……もう少し、待って」

「わあっ！？　ちょ、ちょっとレイシアさん、それ寒冷地域用の口
ーブですよー！！」

「あいあい、りょーかいー」

うーん、これから行くのは森林なんだけどなあ。しかも今寒冷的な
んてもんなじゃなく、どちらかと言うと暖かいし。

3メートル四方の簡素な部屋の西側、窓に接するように作られた
ベッドに腰掛ける。

スプリングと言うものは無いが、それでも木特有の柔らかかによつ
て、軽く見積もっても現在体重80Kgをベッドは受け止めた。

肩の力を抜いて、脱力すれば勝手に首が上を向く。

今回の依頼は、ホブゴブリン二十頭の討伐。

数が多い、と想うかも知れないが、いかんせんゴブリンと呼ばれる種族の大概が繁殖速度・能力が馬鹿みたいに高いのだ。

おかげで何度討伐しても他所からやってくるやつてくる。

今回の相手はホブゴブリン。繁殖速度・能力こそすれ通常のゴブリンよりかは劣るが、その数はもとより、固体の能力が比較的強い
ため面倒な相手だ。

魔法を使うものは無く、知能も人間よりも遥かに低い、それでも原始的なわななどは用意してくるので注意が必要なわけで。

B+の傭兵。これは一人で狼の大群を相手取ることが出来るくらい。だが、ホブゴブリン十頭に殺された、なんていう例もある。

油断は最も警戒すべき敵であって、本当の敵は自分自身。使い古された言葉だけど、使い古されるほどの意味があるものなわけだ。

今回は早期報告の依頼で、それほどテリトリーが形成されきっているわけではないと想う。が、油断大敵。

前衛をいつも通り俺とウルドのツートップ。少し先行してウルドが牽制。その後に俺が下位から中位の魔術で前面を打撃。その後に混戦にならないよう、『面』を意識して戦闘。トドめにレイシアの上級魔術でやる。

と、昨晚の会議でなつたわけですが、ちょっと不安がある。

彼女が使った『セミハレルアーカイバ高圧術式』。

陣制魔術と呼ばれる、入念な下準備と高度な技術が必要とされる魔術を、個人が使用するために開発された技術らしい。

そもそも、陣制魔術なんて代物は、最低でも術者が三人以上の上、魔方阵を敷いた上で高度な触媒カタリストを使用して行使するもの、らしい。いや、本に書いてあったただけなんだけど。

多分、滅茶苦茶な負荷が掛かったわけで。その体調が大丈夫なの

か、と聞いてみたら、

『……タツヤが気にすることじゃない』

と、少し頬を染めた状態でぐーをおなかにいっぱい受け取りました。何でだ。

ただ、確実に本調子ではないので、いつも以上に気を張っている、と。

両頬を一度手で叩いて気合を入れる。

「よしっ」

覚悟は万端。準備もOK。

後は我がお嬢様方なのだが

「タツヤさん？ 準備できましたよー！」

「りょーかいりょーかい。じゃ、行こうか」

拳と手を打ち合わせて、ベッドから立ち上がった。

狼車を預けている、とは言っても、宿の横に置かせてもらっているだけの其処に、いつものメンバー三人 俺、レイシア、ウルドで行く。

さて、リヴォルグはでかい。それはもう、うん、悲しいことに自分の背と同じくらい。つまりは170〜80ってことで、うん、あれだ、負けた気分。畜生……！！

まあ、そんなことは横道に置いておきつつ、もしかしたらと元氣

良く（草を）食べているリヴォルグ君。めっちゃ笑顔。凄い見てて気持ちいい。癒される。

「何でリヴォルグは草食なんでしょう……？」

「……きつと、肉を食へ過ぎて、おなかを壊したから」

「おなかを壊すって……！！
オルグは……！！」

どれだけ食いしん坊なんですかりヴ

「……きつと、一日につき200は食べてたに違いない……!!」

「ええええええ！！！？」

……はい、ド天然会話は無視の方向で、無視っ。

いや、何か聞いてたら頭の中に花が咲きそう。

というか、2000って何だ2000って。単位が非常に気になるんだが。

と、そんな声に気づいたのかリヴォルグが此方に鼻を向け、

「ウォンッ!!!」

笑顔で吼えた。

……いや、良いんだけどね、良いんだけど、なんというか、その巨体でやられると否が応にも威圧感が出るので怖いと言うか。ほら、ウルドは涙目で腰抜かしてるし。

「おーよしよし、元気だったかー？」

「オンツ！」

鼻息も荒く顔面を此方にこすり付けてくるリヴォルグ。ははは愛い奴め。

適当にリヴォルグをあやしつつ、狼車の点検をしていく。まあ、点検と言っても其処まで派手じゃない。車輪に怪しいところとかは無いか、とかどこか緩んでいるところは無いか、程度のものだ。

一通り点検を終えて問題の無いことを確信しつつ、今日も頼むぞーと呟きつつ御者台に乗り込んでリヴォルグの背を叩く。毛並みが美しいぜ、ふっ。

いそいそと乗り込んでくるウルドのレイシアを確認して、リヴォルグを発進させる。

「んじゃま、行きましようかね」

近場の森まで約半時間。それまでが 暇だ。

点検も準備も全部済ましてるからすることが無い。かといって携帯用の玩具なんてものはこの世界には無いので、自然と会話が娯楽となってくるのだ。

だが。

「……魔術として重要なのは現^{イメージ}想。……だから、一般的な魔術師は、己がもつとも得意な魔術を、瞑想などで先鋭化していく」

「そうですそうです。ただ、ここでちょっと閑話休題ですが、魔術を使用する場合に扱う魔力を肉体に適応させると身体能力が上がるのは知ってますよね？ これもある意味で魔術の一種で、上手な人になれば石くらいなら素手で割れるようになるんですよ？」

「はあ……。いや、俺得意な魔法って……肉体強化？」

「……タツヤ、貴方はもう少し、瞑想の時間を延ばしなさい……」

「えーめんどく」

「……死ぬ？」

「イエスアイマムッ！」

魔術のお勉強中でした。しかも講師二人。きついわあっ！
と言うかなんで勉強で死にそうになってるんだ俺。首元で爆発したら死ぬぞ。ですのでお願いですからレイシアさん、

「首元から指、指ッ！！！」

「……ちっ」

舌打！？

酷くない？ 酷くないかい？

丁重に死への御誘いを断って、魔術の話へと戻る。

「でも実際、タツヤさん、大抵の魔術を扱いますけど、どれかに偏ってるって印象は無いですね」

「んー、状況によりけりだしなあ」

そもそも一つの属性に傾倒する意味があまり無い。後衛としてのレイシアがいるし、俺に必要なのは使い勝手の良い下位から中位程度の魔術で、そもそも後ろから吹っ飛ばすのは好きじゃない。斬る

のが俺。撃つのがレイシア。囧がウルド。誤字にあらず。

魔術を戦闘の主軸としておいて無い俺にとって、魔術は只の補佐であり、そもそも魔術も剣術もただの道具なので傾倒する意味無い。只単に今まで長く使ってたのが剣術なので、そっちを多用してるだけだし。

「……『イミテーション個人属性』も、そろそろ、練習した方がいい」

「あー……」

右手のコレ？ いや、わかってるけど面倒くさいと言っか……。そもそも、『加速』だなんていう非常に抽象的な属性？の為、どうにも扱いづらい。下手すると自爆行為になりかねんし。

だからこそ練習しろって言ってるんだろっけど……、うん、ぶっちゃけていおう。面倒くさい。

「疲れるんだよなあ……」

何せ魔力をこっさり持ってかれる。一気に持ってかれる。がっつり持ってかれる。

虚脱状態というほどじゃないけど、力加減を間違うともうへ口へ口。足腰立ってられなくなる。

だから、やっていくにしても少しずつ、それこそ生活の中かな。

「ま、善処するよ」

そう言うとは何故か後ろの二人から溜息。おい、何でだ。やれやれ、見たいにウルドが首を振る。何かむかつくな。

「そっいつてタツヤさん、今回の依頼で試すつもりでしょうっ？」

「うぐっ」

な、何故ばれた……！

「何でそれを……！」

「……タツヤが、好奇心旺盛なのは、いやというほど、知ってるから」

「ウルドには言われたかない」

「……酷い」

人の体を（生きたまま）解剖しようとするマッドなマジシャンに好奇心旺盛といわれたら終わりだろそれは。

溜息が漏れる。項垂れた後には沈んだ気持ちがポツリ。

ヴォフ、と一声上げてくれるのはリヴォルグで、いや、ほんとこいつは良い人……いや良い狼か。まあどっちでもいい。

こいつのおかげで俺のストレスはちぎれる事はないのだ。

感謝感激雨霰。いやほんと。

「ま、それはさておき。今回は太刀と槍の腕を戻したいただけじゃ無いんだ」

「……？ それって……」

「んー、レイシアなら判るよな？」

「……まあ、ね」

「あれっ？ アタシ除け者ですか！？」

「やー、ちゃうちゃう。」

「ただ単に、」

「ウルドって鈍いからなー」

「タツヤさんに言われたくありません」

「……酷くね？」

「まあ、ともあれ。」

「実際、彼女の魔力の感知能力は低い。あと味覚音痴。運動音痴。鈍い。つまりは鈍感。」

「まあ、つまりは鈍感なわけだよ」

「……涙が」

「まあ冗談なのが判りきってるので無視で、実際何なのかと言うと。」

「……瘡気のこと」

「？ それって、この前言ってた、アレですか？」

「うん、そう」

ここら一体のマナ　大気魔力が、場所によって違っけど瘴気に感染している。

瘴気つてのは人間の負の感情や、それこそ瘴気そのもののモノだつてある。

で、無害だったらこんな名前が付く筈も無い。

さて、問題なのは、コレ、下手をすると周囲の動植物に感染して、魔物化することがあるのだ。

魔物っていうのも立派な動植物の一つだが、瘴気に感染するとその中の一種になったり突然変異種みたいになってしまったりする。

無論、人間も例外じゃない。

人間がもしも魔物化した場合　非常に強力な固体になることが多い。それも、魔力を自在に操る奴。

「このままだと非常に面倒な事になりかねない」

と。言うわけで。

「実はこの依頼。俺個人へと向けられた調査依頼でもあるってわけ」

「……そう」

「な、なんで判ったんですかそんなこと！」

「俺らが判って本職の魔術師が判らん訳ないじゃん」

君が鈍すぎんの。

まあ、そんな訳で。

「力を貸してもらえると嬉しい」

「勿論！」

「……仕方ない」

ウルドは元気に、レイシアは溜息混じりに賛同してくれる。

これは凄く幸運な事。異世界で確かな仲間がいるのはとてもありがたい。

「よし、じゃあ 行きますか！」

眼前。森の入り口が待っていた。

27th 忘れちゃいけない事(前書き)

いつの間にかPV100万突破……!!?!?!

や、ヤベエ………どうしたんだコレは。自分の頭がおかしいのkry

ともあれ、皆様有難うございます……!!

今後も精進していくので、どうぞ、よろしくお願いいたします

27th 忘れちゃいけない事

森の中。

北地の森とは言え、やはり湿度が高く、蒸し暑いのだこれが。

レイシアは服の中で精霊に頼んで湿度とかをコントロールしてるし、そもそもウルドは軽装だからいいけど、

「あつぢい……」

「……精神統一が、足りない」

「出来るか!？」

「と言うか、タツヤさんコートに結構な装備ですもんね……」

苦笑しながらあははと冷や汗を流したのはウルドで、此方の背や腰につけている装備品に視線が行っている。

まあ、太刀や短槍やそのほかの応急品なんだけど、まあ、これだけでも結構な重量では在る。

「ちくしょ……汗が……」

だらだら溢れてくる。どうやら体力が上がってもここら辺は変わらないらしい。ガッデム。

「……おかしい。……幾らなんでも、この、湿度と、温度は……?」

「ん? どーかしたんですか?」

ぶつぶつ言いながらレイシアが手元で魔力を集める。
ガチガチガチと固まっていく式が意味を成していく。
そのの意味するところは、大雑把に言えば調査。

「……タツヤ、ウルド。……ここは、大気中のマナが、異常に濃い」

「ほえ？ そうなんですか？」

「でも、精霊は全く居ない。……いや、弱っている？」

その上森に入ってから全く動物の気配を感じない。

鳥や犬などの小動物に始まり、魔物や、大型種の存在すらも、だ。
それに、ん、と頷くレイシアは、新たに術式を右手にくみ上げる。

……うん、レイシアさん。それさ、探索用の術式だよね？

しかも魔力のソナーみたいな感じの奴。

はい、ここで豆知識。魔物とかで小型種は結構魔力に敏感です。

ははは諦めるウルド。そんな震えてなみだ目でもレイシアはとま
んないから。諦めたくないけど。

そしてここで追加情報！！

Q・今回のお相手は？

A・子鬼達です。とっても数が多い子達です。

Ⅱ 死亡フラグ。

「ちょ、ま」

「……頑張れ」

ぐ、と左手の親指を上げるレイシア。いや待て。まだ罫とか調べ

て無いんですけど!?

直後。レイシアの右手から魔力の波が放たれた。

固まる俺とウルド。さて、先ず明記しておきたいことは、俺は多数戦闘は慣れていても集団袋叩きはお断りだと言うこと。^{リンチ}

次に、ウルドは基本的に斥候で、基本的な戦士としての実力は然程高くは無いということ。

つまり

「ゲギヤギヤガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!」

「いやあああああああああああああああッ!?!?!?!」

……あー、メンド。

集団対個人の戦闘で気をつけることは、複数の相手を一度に持ち込まないこと、だ。

背後を取られたまま戦うのは御免被るし、一度の多数を相手取るのは正直言って不安だ。

ようするに、前衛の俺は目の前の敵に集中して補佐をウルドに任してレイシアを守れること。

「ギギヤガ　!」

「退け!!」

前から打ちかかってきた子鬼^{ゴブリン}を蹴りでふつとばし、二歩前へ踏み込んで太刀で二、三匹を切り払って下がる。

追い縊ろうとする子鬼を後ろからのウルドの援護射撃で怯ませ、

其処に俺の下位魔術で牽制・打撃を与え、再び前に出て切り払う。
これが今のパターン。ウルドは後ろで子鬼たちの後方の纏まりを
ガリガリ削ってる。

非常にセオリーに則った戦い方だ。これほど安定した戦いもそう
は無い。

だが、開戦のきっかけがはなはだ不本意ではあるけど。

「ちょ、何でこんな数が多いんですか！？ 普通はもう少し少ない
んじゃない？」

「知らん！！ 多分瘴気とかの影響で異常発生してるんだろ！！」

というか多分森の動物とか全部食ったんだろこいつら！ それで
動物とかが全く居ないわけだと思う。

棍棒を持って振り回してくる薄紫の子鬼は、元来無い理性はもち
ろん無いが、口元からだらだら涎が垂れていることから何故か飢
えている。

「穿て氷柱！」

術式と共に足を地面へと打ち込んで地中から氷柱を発生させる。

ゴバツ、と盛り上がった氷柱に対して、突っ込んできた子鬼が串
刺し。

足首を捻って術式追加。地面から更に突き出された氷柱が前線を
一斉にぶち破った。

「散り逝く花はされど穢れろ 『汚エ花火（K O O I）』」

前方へと氷柱がはじける。それは氷の弾幕。
鋭利な氷柱は高速で前方へとはじける。

「琥珀の太陽に焼かれた翼、欠けた月面の脱兎、地点の抱擁を受ける相對する敵よ……!!」

「そこ！！
ツ邪魔です、
退いて下さい！！」

レイシアの上位魔術が子鬼の後続部隊を叩き、ウルドが打ち漏らした者に止めを刺す。

U r y y y y y y y y y y a a a a a a a !

「疾イツ!!」

飛び掛つてきた子鬼を正面から額を突いて殺す。

直後に即席で爆破術式を起動。刀身を伝って子鬼へ。

爆発させれば後ろに居た子鬼が怯み、その隙に一步震脚で踏み込み叩き切る。

右脇から突っ込んでくる奴に蹴りを叩き込み右手で頭を掴む。が
つちりとホールドしたまま振り回して周囲を奴を吹き飛ばし壊した
後に爆破術式を組み込んで前へと投げ込む。

数秒後に炸裂。怯んだ隙を逃さずに納刀。背中側のアタッチメントから短槍を取り外し、既にそのものが術式と化している短槍に魔力を込めていく。

「壹切を塵芥と化せ我が力……！！」

式題は炸裂・破碎。

カタパルト

まりよく

腰を捻り、肩を射出口として炸薬を籠めていく。

術式の最高点まで至った時に、その魔術の名を叫ぶ。

「
『クルーベルン・ガリエア掌握す小さな揺り籠』 ツ! !」

数瞬の間 閃光、爆発。

微かに土砂が降り、土埃が舞い上がり 彼らがなくなった後
に残るのは赤い地面となぎ倒された木々。

これで一気に数を削ったはず と、思ったのだが……。

「げ……」

更地になった後の大地 森の奥。

そこには、幾つもの眼、眼、眼。

正直言つて気色悪い。幾らなんでもこつも一方的にやられたら知
能が低かろうと退散するはずなのに。

現代の兵法 というか、知識にも在るが、軍隊の参割を消耗し
たら、その軍は瓦解する。

士気を失って敗走するわけだけど

「……まだまだやる気があるようで」

口元から相変わらずだらだら涎を垂らしている子鬼さんたち。ど
ういうことだ一体？

幾らなんでも戦意喪失してもおかしく無いんだけど……。

「レイシア、これ一体どゆこと？ 繁殖期だと好戦的になって幾ら
やられても戦意を失わないとか言う特徴があるのかこいつらは？」

「……ない。……異常、だと思う、これは……」

「これって瘴気とかが関係してるんじゃないですかね？ ってうわ

危なッ!？」

「うーん……」

十中八九そうなんだけど、そもそも瘴気を持つてるのが魔物って言われてるからどうもおかしい気がするんだよね……。

とは言え、このままではジリ貧である。負けるとは思わないが、確実に勝てる保証も無い。数の差が大きすぎる。

撤退しようにもこの数じゃ追いつかれて戦闘続行が眼に見えてい
る。さて、どうしたものか……。

「……ここは救世主補正とやらの頼ってみるか？」

視線を右手へ。

手の甲には狼を模したような獣が浅い緑色で掘りこまれている。

アクセラレイト
『加速』。

試運転にはちょうどいいくらいだろ。これくらい。

肉を絶つ音と潰れる音、悲鳴が混じり、しかしそれらを無視して
前へ。

「レイシア! 一旦後方打撃停止! 弾幕を張って何とか足止めを
してくれ。ウルドはレイシアの護衛と牽制だけに集中してくれ!」

「は、はいっ!? それじゃあタツヤさんはどうするんですか!？」

「ちょっと試したいことがあるんだよ。 ついさっき、レイシア
から注意されたからなあ……」

それで何をしようとしたのか悟ったのか、レイシアが微かに眼を
見開く。

「……やめたほうが、いい」

「あ、心配？　心配してくれるんですかレイシアさん？　いやあ嬉し」

「……後始末が面倒」

……一瞬でも期待した自分が阿呆でしたごめんなさい。
ぶちぶち愚痴をもらしつつ左手に意識を集中。
想像するのは前へ前へと進む自分の背中。追いかける。追いかける。

そう、ただただ、前へ、前へ、前へ　……

「前へ進んでいこう」
アクセラレイト

瞬間。

俺の意識が加速する。
否、俺の意識も、だ。

「っし、取り敢えずは成功」

と密かにガッツポーズ。

加速している速度は通常の二倍程度を想像しているわけですが、まあ実際はどんな感じが判らない。

取り敢えず目の前を向いて　固まった。

「UUURRRYYYYYAAAAA……！！！！」

「うわキショっ」

齒を剥いた子鬼が眼前に居た。というか落下途中だよなコレ。
加速中は自分の意識、というか思考速度と言っのだろうか。まあ
ともかく。

何だか不自然に宙に居るのですよ。しかも速度が微妙だからコレ
がまた気持ち悪い。
ともあれ、やることは変わらないわけで。

「
シッ
」

中段からの右構え。上段への突き。

ガスツ、という手応えと共に白い眼にだんだんと変わっていく眼。
気色悪い。

引き抜いて一振り。吹き飛んだ死体は林の中へ。

……今更、何が気色悪いって言うか。

苦笑するほか無い。

一度目を瞑り、探索魔術を打ち、周囲にしか敵が居ないことを確認する。

「さて……ま、やるか」

此方が何倍も速いのだ。負けるはずも無かった。

28th 森での再会、不可解な空気

現在の時刻は昼過ぎ。ちょうど食事でもあり、血を流したかったために今はキャンプ、まあ狼車に戻ってきてます。

刀身とかは洗い流せるけど、流石に子鬼の肉を食べようとは思えないからなあ。

「うーん……」

先程から頻りに首をひねっているのはウルド。眉間に皺を寄せた状態だと、なんだか怒ってるようにも見える。でも愛らしさが抜けないと言う。やっぱりお子様だな、身長的に。

ともあれ、今は食事中であって、見るべきはウルドの顔面ではなく手元にある干し肉を焼いたものと、水。あとは果物などを砕いて混ぜて作られた携帯食料。味は下の中だが栄養価は上の中だ。

右手で握った肉にかぶりつく。

「あぐツ……んア。にしても、どういうことだったんだろうな、さっきの子鬼」

「……わからない。……あれほど、個体が強靱だという報告は、ない」

子鬼にしては異様にタフで力の強かったあれ。今回の依頼はC+だが、実質、B以上でもおかしくはない程の強さだった。

コートを脱ぎ、打撃を受けた箇所を確認したときは驚いた。

戦闘中はアドレナリンとばどばで気づかなかったが、内出血に留まらず幾つか骨にひびが入りかけていた。

本来なら内出血どころか一発も食らわずに済ませることが出来る

のだが、それが出来なかったのは何故だろうか。

「瘴気の影響か……？」

単純にそれと結びつけるわけではないが、この町に来てから漂っていた瘴気と全く関係がないとも思えない。

瘴気によって強化された魔物。周辺の生態系をひっくり返すほどの強化。

こんなことが自然現象のうちに現れるのだろうか？ 少なくとも自分の中の知識にはない。

「……どうするの？」

「んー、まだ装備には余裕があるし、調査も出来てないから、二人に余裕があるならもうすこし奥に入ってみようと思うんだけど」

「……私は、平気」

無表情に言うレイシアは、それだけをいうと思考に没頭したようで、俯いて考え込んだきり顔を上げることはない。

あと一人、ウルドはというと、

「うーん……」

「おい、ウルドさん……？」

未だにうんうんうなりつつ何やら考え込んでいるようで、全く此方に気づく気配がない。どうしたものか。

「ちょ、おい、無視はひどいと思うんだよウルドさんや。気づいて

くれ」

「うん……」

……ワザとじゃないだろうなコヤツ。

ともあれ、ここで待ってても埒が明かないので強制的に戻ってきてもらう。

具体的には、ウルドの眼前に両手を持っていき、左右に広げてから、

「はい、戻って来い」

「にゃひッ!？」

つばあん、と小気味よい音。

つまりは猫だまし。意外とよく効くのだコレが。

しばし呆けていたウルドだが、意識が戻ってきたようで何事かとこちらに視線を向けてくる。

「な、何かありましたか？」

「うん、これからどうするかなって聞いてたんだけど。ウルドはどうしたいよ？」

「アタシは……」

といって一瞬言葉をなくし、しかし直ぐに顔を上げて、

「……もう少し調べたほうが良いと思います」

「……その理由は？」

「乙女の勘」

「君はどつちかと言うと腐女子だろうが」

「婦女子？」

「ああ、いや……忘れてくれ。聞き間違いだ」

はあ、と頷くよい子ちゃんウルド。危ない危ない。
ともあれ、これで先へ進むのは確定した。後は……。

「飯食うか」

いやあ、なかなか干し肉ってうまいんだよな。

「じゃありヴォルグ、留守番頼むなー」

ヴおふ、と満足げななき声。辺り一面の草花がなくなっていたのは気のせいだと自分に言い聞かせた。

まあ良いや、と一息吐き、後衛二人の確認をとる。GOサインが出た。

「さ、じゃあ前へ」

と言った瞬間、微かに辺りを覆う違和感。
咄嗟にバックステップを踏んだのは正解だった。

「く」

目の前を白銀の刃が通り過ぎていく。黒い髪がいくらか持っていたか。

俺から見て左　そこからこの刃は振り下ろされた。つまりは敵。まず左足が地面に着く。そこを支点に身を回して太刀での居合抜き。

が、それは銀の剣に阻まれる。衝撃を殺さずに後ろへと飛び退く。と同時。

右手に握った槍をアンダースローで放つ。詠唱破棄でくつつけた魔術は『衝撃』。

狙いは敵の足元。成るべく早く相手の足元を崩し、態勢を壊したい。

「ニーディア！」

声と同時に、何かが飛んでくる。

それはフラスコだ。万種の霊薬を含む万変の『科学』。
着地点は此方と敵の間。投擲されたそれは自分よりも一瞬早く叩きつけられ

「うつおあ！？」

飛沫が地面に触れた瞬間、凄まじい勢いで溶解していく。
なんぞこれ？　酸か？

「ッ！？　離れて、タツヤ……！」

声と同時、光が空から落ちてくる　！？

手の中で反転させた槍の石突で地面を突き、高速で背後へと移動する。直後、後ろから電風。魔力を孕んだそれはレイシアの得意な魔術。

光と風がぶつかり、硝子が壊れたような音と同時に衝撃と突風がくる。

「くうっ！ バロックさん、一旦退いてください！！」

「馬鹿野郎が！ 退いたら抜かれるぞ！！」

「いいから退きなバロック、アンタじゃ三枚におろされちまう、よっ！！」

言葉と共に放られたフラスコは綺麗な弧を描き、此方へと堕ちてくる

その、前に。

「やらせませんよ！」

一矢一閃。

高速で飛来した矢が中空にあったフラスコを正確に穿つ。

直後、

「あ、やば」

そんな声がしたと思った直後、凄まじい爆音と閃光が俺たちを襲った。

既に音域は衝撃波と同じで、可視領域を遥かに超えた光量は数秒間の目を潰すのは容易い。

咄嗟に眼を庇い、しかし光が眼を焼く。

「ぐっ　　まだ、っだあああああッ！！！」

「っ！？　　っうおおおおあああああッ！！！」

一足早く回復したのか、銀の刃を振り下ろそうとする戦士を迎撃するべく、此方からも剣を振り下ろす。

平衡感覚は殆ど意味を成しては居ないが、それでも視界だけは何とか回復しつつある。

ギャリッ、という金属の噛みあう音。相手は大柄で、その分の膂力とウェイトが脅威だ。

しかし此方には魔力による身体能力の強化と言うアドバンテージがあり、尚且つ素の筋力も異常だ。

罅迫り合いから相手を押し返し、そのまま身を回して下段へ。それを戦士は救い上げるようにして此方の刃を上へと逃した。

がら空きとなった胴体へ戦士が突進してくる。が、気合一声。

「っだらあ！」

右手一本で柄を握りなおし、左の靴先で相手の刃先を蹴り飛ばす。右へと逸れた相手の剣へ向かって体をあわせ、

「シィアアッ！！」

キン、という澄んだ音は直後に一つの結果を齎した。

確かな手応えを反芻すると同時に、俺の背後に何かが刺さる音。

呆然と眼を見開いた戦士の視線の先には、中腹ほどから断ち切られた銀の剣。

戦士へと太刀を突きつけて

「さ、何が目でk」

「……ニーディア？」

「っ？ ……レイシア？ レイシアなのかい？」

……はいつ？

戦士を気にしつつ声がした後ろへと振り向けば、何故か珍しく眼を大きく開いたレイシアさんが。

そして前へと振り向いて奥をのぞいてみれば、これまた何故か眼を見開いた、ローブを身に纏った女性が。

「……うん。……ニーディア、なんだよ、ね……？」

「ああ！！ 久しぶりだねえ！ 元気にしてたかい！？」

そしてまたもやひしつ、と抱きしめあうお二人。……何が何やら？ 戦士の方へと目を向けてみればこちらは眼を点にして二人を見ているし、ウルドにいたっては『？』と『？？』と『？？？』が頭上を飛び交っている状態だ。

そして動揺している自分。

しかし、そんな俺たちを置いてけぼりにして、目の前の女性二人は喜びにあふれ、手を握り合い、再開の喜びを分かち合っているのだった。

……何が何やら。

29th 奇遇な再会（前書き）

やっとテストが終わった……

29th 奇遇な再会

「いやー、ひさしぶりだねえ？」

「久しぶりで首を落とされたらたまりませんってば!？」

時は夜。既に太陽なんて跡形もなく沈んだ今、俺たちは森の入り口まで引き返し、火を熾して暖を取っていた。

先程から此方をばしと叩いているのは、ローブに身をまといき知的な片眼鏡をかけたお姉さんである。名前はニーディア。

「アタシやてつきりゴブリンかと……」

「どこにこんな装備を持ったゴブリンが居るんですか？　ねえ？」

「すまん……説明もなく斥候として突っ込んだから、止めなかったのだ」

それは傭兵としていいのか非常に問いかけたいのですがバロックさん？

突っ込みどころ満載な言葉を吐きやがりましたのが、ニーディアさんの隣に巨体を窄ませる様にして座っているバロックさんである。ほら、俺が剣を切った戦士の人。

「すみませんすみませんごめんなさいごめんなさい人を襲うなんて考えはなかったんです本当にごめんなさい……!!」

「ああいや、君はどちらかというと被害者だし……」

俺の真正面で只でさえ小さい体を更に折り曲げて必死に謝罪してくる女の子はミーシャちゃん。若干十一歳で神官補佐の地位を会得した天才少女である。

非常にかわいいのだが、今はその顔を涙と鼻水とよだれで潤ませながら必死に頭を下げ続けている。どれくらいかというと、文字通りの意味で、『必死』、なくらいに。

聞けばニーディアさんに攻撃を要求されたようで……完全に首謀者はニーディアさんですはい。

「……えと、ボク、は……？」

「……メスは、痛い」

「ごめんなさいっ!？」

あちらで土下座したのは気の弱そうな純朴少年。ケルセ、と言う名前らしい。レイシアがメスを持っているのは……まあ、放置。

というか彼からは自分と若干似通ったにおいがしたのだが……きのせいか？ まあいい。

「まあまあ。ちょっとは落ち着いてこっちの話を聞きなさいって……」

……」

「……俺、死に掛けたんですけど……？」

からからと快活そうに笑って流そうとするニーディアさん。畜生の年の功に騙されそう。すみませんでした。

とりあえず土下座をして謝罪。言葉はなくとも誠意は伝わったようで、お怒りは静まったようだ……あれ？俺が怒ってたんじゃない……？

まあともかく。

「にしても、あの貴族のお嬢ちゃんの依頼からあってないから大体、3ヶ月くらいかい？」

「そう、ですね。もうそんなになるんですよ……」

思えば、結構いろいろなことがあった。レイシアと旅が始まってウルドと出会って、修行して、一緒に依頼をこなして……。そう言えば、こちらの世界に来てからもう四ヶ月以上経ってたのか。どれくらいあちらでは時間が経ったんだろう？

初めて何かをやった気がしてるし、今でもそう思ってる。多分、俺はあちらへ居た時より充実、してるんだと思う。今、俺はリア充だ。死亡フラグではない。

「ぼーやも結構大人の顔つきになったんだねえ」

「は？」

いきなり何を言うのか、と思った直後、彼女は笑った。

「あの子鬼を一掃した後のぼーやは、まだまだ青さが抜けてなかったのさ。今は……そうだね、後一押しって、ところかい……？」

此方を上から下までじろじろと見てきた後、彼女はそういつて溜息をつく。何だか馬鹿にされた気がするの俺だけですかそうじゃないと思いたいです。

とまれ、この人たち三人は、以前王国を脱出する時に受けた依頼の同行者と、+もう一人で依頼に来ていたらしい。

その依頼は俺たちと同じ、森の探索。

……まあ、流石に一つのチームだけに任せているはずがないんだけど、それなら何で教えてくれなかったのか。もう少しで同士討ちになるところだったぞ。

「とは言え、十分に男になったと思うよ、アタシは」

「いったい何の話なんですか結局……？」

思わず力が抜ける。何が言いたいんだこの人。

ともあれ、鳴いて謝るミーシャさんは同類のにほひがするウルドが慰めているし、先程から謝り倒しているケルセはレイシアが脅しまくってるし、バロックさんとニーディアさんはいい雰囲気とかこの人ら最初からそうならそういう雰囲気だしてるよこのリア充がと叫びたいのは俺だけじゃないはずだ。

「ま、俺にはお前が居るもんなあ」

「ヴおふ？」

何？ 何が在るの？ と頭をなでたりヴォルグが此方を向くが、何も無い。

そのままリヴォルグを背もたれにして体を落ち着かせる。ふっさふさの白毛が気持ちいいのだコレが。

「もう、四ヶ月、なんだよな……」

そう、ポツリと呟く。

あちらからこちらへと、そう流れてきて既に四ヶ月。

とりあえず、魔王倒せば何とかなるだろ、とか思ってた魔王探しのたびに出たのはいいものの、何の手がかりもなし、だ。

今現状で、元の世界に戻る手がかりは二つ。魔王と王国、だ。

本音を言えば、故郷に帰りたい欲求はすごくある。だけど、今の状態が心地よい 心地よすぎるのも事実だ。

そもそも。あちらの世界で何かをするというのがよく分からなかったし、何かが出来たという達成感も無かった。それが、この世界に来てからはどうだ？

楽しく、面白く、怖く、疲れ、痛み、振り回し、振り回され、退屈なんて在るはずもなく、何かが出来たという確かな達成感がある。

それらはあちらではなかったことで、自分が求めていたものだ。だからと言って、此方に居るのはどうなのか？

元の世界にも親しい友人は（極々少数だけど）居るし、戻りたいっていう思いはある。

……結論出やしないじゃん。やめとこう。

「はぁぁぁ……」

「……重いため息ついてますね」

「ん？」

と、声のした方へ振り向けば、いつの間にやら酒瓶と木製コップを手にしたケルセ君が。

彼は何処となく影のさした顔をしてる。

「まあ、俺にもいろいろ考えるところがあるんだよ……」

「そうですね。僕もよく在るんです。何だか今の状況下僕みたいだ

なつて……いつまでもこのままなのかなつて……」

「……」

異常に重たい感情が込められてる気がするのは自分の気のせいですか。

溜息のまま彼はこちらにコップを差し出してきて、

「飲みませんか？」

「ああ、飲もう」

思わず受け取ってしまったのだつた。しかも熱い握手まで交わして。

……あれ、これは俗に言う死亡フラグでは？、なんて思ったりもした。

30th 『闘群狼』・瘴気・単独戦闘？

コキコキ、と首を鳴らす。

右手に携えた槍には既に魔力を通している。

圧縮された魔力はこの『槍』そのものに刻んだ術式を駆け巡り、在り得る筈の無い現想の発言を宣告した。

「ああくそ、俺ってなんかそんな役割じゃないかコレ？」

「……そんなこといったって。籤引きで負けたのはクレインさんじゃないですかあッ！？　っていうかどうするんですかこの『闘群狼』ウェアウルフ！？　目測でも30は居ますよこの子達！？」

「いやあ……どうしよう？」

「暢気に首を傾げないください　　！！？」

いやーはっはっは。

森の最深部に程近いであろう、薄暗い開けたこの場所は、いまは俺とウルドと目の前に広がり此方になり声を上げ続ける狼君たち。そして

「ひううう……」

気の弱そーな神官の女の子が一人。しかも身長がウルドと同じく、

「低い……！」

「ちょっと、何でアタシの方見たんですか今一瞬！？　ねえっ！！！」

まあまあ、と手のひらを彼女の方へ向けて制する。

「にしてもまあ、俺は結構運はいいほうだと思ったんだけどなあ……」

「どこがですか……思いっきり初めに『ダウトオッ!!!（死亡フラグ）』って書かれた籤を引いたくせに……」

「う……」

「あ、あははは……」

苦笑するミーシャは、しかしそれでも高位の神官なのだという。つまりは天才児。

だが流石に、一度にこの数を退けるほどの高位神術を習得してはいないだろう。というか出来るのは神教の総本山、南のアハトブルグの幹部クラスぐらいだ。

「てゆうか何で籤引きで探索場所を決めたんですたっけ……?」

「いや、たしかそれはケルム君がこっちの方が楽だって行っただから」

「……ひう」

俺たち三人は、キャンプから直進。他二つの組は東と西に分かれて探索。

確実に直進が悪いと言うわけではないが、それにしあって自分たちの役割はひどいと思う。

とまれ、現状がどうにかなるわけでもない。

今、此方は三人。内一人が後衛。一人が前衛援護。最後の俺が前衛。

バランスは取れている、が。敵は『闘群狼』^{ウェアウルフ}。高い知性と集団行動力によって、下手をするとAクラスの傭兵でさえ返り討ちにあうという奴らだ。

しかも、だ。そんな強敵連中が、ここら一帯に撒き散らされている瘴気によって強化されているわけだ。正直言って、

……守りながら闘うのは辛い、かな。
故に、

「まあ大丈夫だろ。これくらいなら俺一人でどうとでもなる」

「誰が全く背が無いなんて……え？」

呼吸と共に体内を循環させていた魔力を丹田を介して練り上げていく。

魔力を通した槍からは風が漏れ始め、体からは金に近い緑の魔力が溢れ始めた。

「た、たつや、さん……？　なんだか、以前より魔力総量が増えてませんか……？」

「あー、何か勝手に増えた」

は？と言う感じに顔の力が抜けたミィシャ。しかしそれを無視して『紋章』の起動準備に入る。

……ただ、速く。

異質な気配を俺から感じ取ったのか、狼たちが更に低く構えて唸

り声を高くする。

「まあ、俺一人でどうにかなる。それよか、たしかミーシャは瘴気の浄化が出来るはずだったよな？」

こくん、と小さく頷くミーシャ。よし。

神を信仰する神官には、人間の負の感情などの発露である瘴気を浄化できる技術がある。見たことは無いけど。

「先に行って瘴気の原因を調べてくれ。多分それで何とかなると思う」

右手に小さな『弾丸』の術式を構成。追加で破砕^{トレイラ}＋爆発。

「多分、この先に何かあるだろ。てかこんだけ明らかに魔物が居たら在るのが常識だ」

「常識って……！」

まあ、どちらかというと小説的な常識ですが。

軽く苦笑し、ウルドの頭をくしゃりと一度撫でた後に身を回して腰を落とす。

意識は紋章と手に携える槍へ。思うのは速さと、螺旋と、爆圧。

「昨日の戦闘で『紋章』の使い方のコツを覚えた。何とかなるさ。だから」

先に行け。

「……ッ……！ ミーシャさん、行きますよ……！」

「え？ え！？ そ、そんなことしたらクレインさん、が……！！？」

「アタシらが居たって効率が悪いだけなんですよ……！！！」

ウルド特有の冴え渡るような青い魔力が立ち上るのを見る。同時に、白い魔力はミーシャのものだ。

ウルドが足をたわめ、跳躍の姿勢を形作つたのを見たのと同時。

「突っ込めえッ！！」

「くう……！！」

投擲した槍が『鬨群狼』手前の地面に突き刺さり、地面を破壊・爆発し、その爆圧で『鬨群狼』を吹き飛ばした直後にウルドがミーシャを抱えて突破する。

吹き飛ばされない範囲ギリギリに居た一匹が彼女たちを襲おうとするが、

術式構築・展開・構成・完全。

現実の把握。

「行かせねえって」

片足での震脚。打ち込んだ足から更に術式を打ち込んだ。

一瞬で展開されたのは樹木の檻。それは硬く、太い幹であり、

「ギャウッ！？」

狼の突進程度でどうにかなるものではなかった。

悲鳴を上げた狼は無様に地面に転がり、しかしその周囲を新たな狼がフォローする。

「さてまあ、今さっき素晴らしい死亡フラグを立てた訳だが。どうにも俺ってこういうのが好きなのかな……。いや、Mじゃないんだけど」

ともあれ。

「殲滅戦と行きますか……」

一斉に飛び掛ってくる『鬪群狼』に対して、俺は突っ込んだ。
……つくづくそんな役回りである。まる。

31st 少女たちの談義

私は走っている。

全身から魔力を練り、身体強化に当て、その力を持って地面を割り砕く勢いで疾走する。

「あつ、アリ、シアさっ……！！ は、速い……ッ!？」

「我慢してくださいッ！ 今は奥へ行かなきゃマズインですから！」

腕の中のミーシャさんが何かを言うが、それよりも先ずはこの先へある『何か』へと少しでも近づき、そして

「離れなきゃ……!!」

微かに凹んでいる窪地の先端に足を引っ掛け、跳躍。そのまま樹上へと至り木の枝を始点として宙を駆けていく。

身を屈め、枝の部分へ当らないよう先方の面積を最小限にするために縮ませ、そして跳ぶ。

……タツヤさんは大丈夫、大丈夫だけど……!!

心配であるというか、彼についていけない自分が情けないというか、頼りっぱなしでどうにも悲しいというのが現在の心境だ。

そんな胸中の思いを払拭させるかのように、強く跳躍しようとして枝に対して震脚紛いの踏み込みを行い

バキリ。

いッ！？

腕に抱えたミーシャさんが必死でしがみ付いて来るのが何となく子供っぽくて可愛いとか思いつつしかしそれが微妙に動きを阻害していて非常にまずいと気づき、

「ちょ、ちょつ、ミーシャさん、離して、離してッ！？！？！このままじゃ落ちる落ちる落ちるッ！？」

「もう落ちてますうううううううう！！！！！！」

ああそう言えばそうだなあなんて納得してしまう自分の頭に嫌悪を抱きつつ、せめてと思い全力で魔力を精製する。
そして

「あつ、ちょ、そ、そそそこはだめ、だめですよッ！？ 染み込んで痛いんでつて痛たたたたあつああ！？」

「我慢してくださいよう……無理やりに傷口ふさぐと破傷風になりますよ？」

それでも傷口周りの害となる『概念』を無くす為の魔術は非常に痛いというか染みる。具体的には身を捻って痛みを誤魔化そうとしてさらに痛くなるくらいには。

しかし、

「それにしたってミーシャさんは凄いですね。普通はそんな年で快癒の魔術を習得するのさえ稀なんてことじゃないのに、司祭さまでも覚えてない殺穢を使えるなんて」

「いえあの、そのう……」

「あ、照れてる、可愛いー！」

思わず手を伸ばして幾分か背の低い彼女の頭をぐりぐりと撫で回してしまふ。え？別にアタシはちっちゃくないですよ？

「んと、とりあえずはコレで治療は終わりました。後は包帯を巻いて、ええと、少し安静にすれば」

「あ、ありがとっ！」

ともあれ先程樹上から落ちた私たちであるんですが、取りあえずあ後は治療を受けてます。主に私が。ええ。

たいした負傷ではないのですが、下手をすると破傷風になってしまうので念のため、と、ミーシャさんが行ってくれたのです。

「さてと……こいつでどれくらいなのかな？」

「え、ええと、多分、先程よりかは中心部に近いと思います」

「へ？」

「あ、その、瘡気がだんだん強くなってきてるから……」

「ふむ……」

瘡気は微量ならたいした被害はないのですが、それが集まると非常にまずいのです。

たとえば傷口の腐敗、たとえば魔物の増加、たとえば負の感情の暴走。

いいことは余りありませんが

「とりあえず、先に進みましょう」

「へ！？」

怪我をしたのは足。そこに魔力を注ぎ込んで傷みを軽減し、筋力を増加。

二、三度動かしてからいけると判断。そのまま身を起こす。

「このまま真っ直ぐ行けば何とかかなりますかねー……」

「え、あはい。取り合えずはこのまま行けば瘴気に中心には……？
っ正気ですか！？」

蒼白な顔で叫んだミーシャさんになぜか親近感を覚える。ああ。
アタシっていつもこんな感じなのか。

「ええ。というかそれしか道はないですし」

どうせ元に戻っても足手まといで、そのうえ外界に出られるほど
あまい場所ではないのですよこの森。
ということとで前進あるのみ。

「わ、わたしたち二人で進むのは危険です！ 戻ってクレインさん
への援助をするほうが」

「必要ないです」

気がついたときには既に言葉が放たれていた後だった。
あ、とか思う間もなく、ミーシャさんの顔が赤くなったり青くなったりするのをみた。

「な、何ですか！？ クレインさんは二つ名持ちだからってそんな……」

「あの人は」

あまり言うことではないが、言ってしまうおう。いやたいしたことじゃないかもしれないけど。

それは始めてあの人と会ったとき。命を救われた最初。

「既に彼は、飛竜を単身で殺せます。多分、必要とあらば中位竜でさえも」

「っ！？」

「クレインさんはすでに『竜殺し』ヴィーヴルスレイヤーなんですよ」

『竜殺し』、それは『龍殺し』ドラゴンスレイヤーと似て非なる称号。

彼らは低位竜を殺せる実力を持つものだ。しかしてその実態は、ある意味では上位戦闘能力保持者を指す言葉である。

何故ならば、『龍殺し』は団体に与えられる称号であり、『竜殺し』は個人に与えられる称号だからだ。

それを思えば、彼らは単体で群を相手取ることなど造作もない実力者とも言える。

また個人で『龍殺し』を保有するものもいるが、そんなものは例外中の例外中で、もはや人間と呼べるような連中ではない。

「だから、アタシたちが行っても無意味です。ていうか、アタシにはあの人が負けるところが想像できませんもん」

何があっても負けない気がする。単身でミノタウロス撃破してるし。

「そ、そんな……じゃあ、本当ならAクラスの傭兵じゃあ……」

「本来なら、てことじゃないですかね。表向きは団体行動で討ち取ったことになってるので、称号もらってませんでしたけど」

彼いわく、

『は？ いや面倒くさそうだし、疲れそうだし、面倒くさそうだし、何か得よりも損が多そうだし、面倒くさそうだし、ていうか面倒だし』

要するに面倒なんですね、とは言っても意味がない気がしたので言わなかったのですが多分正解でしょうねアタシの行動。というかその後レイシアさんに何かされてましたけど。

……。

忘れましょう。それが一番だ。

うんうんと頷いていると不思議そうな目で見られたので慌てて首と手を横に振って弁解する。

「いやいやなんでもないですよ？」

ともあれ、

「取り敢えずは先に進みましょう?」

「……クレインさんを置いて、ですか」

悔しそくに唇をかむミーシャさん。だけど、

「アタシたちは任せられたんですよ、クレインさんに」

「……?」

それは、

「いいですか? クレインさんは強いですよ。そりゃもうすさまじくですけど」

一息。

「彼はミーシャさんのように瘴気の浄化が出来ません」

「あ……!」

ミーシャさんの瞳から少し陰が取れたのを確認して、

「つまりは適材適所です。クレインさんもアタシたちも万能じゃありません。ですけど、クレインさんに出来ないことが私たちには出来る。だからこそ、クレインさんはアタシたちを信用して先に行けと言ってくれたんです」

と胸を張る。大して背丈変わりませんけど。あと哀れみの視線がするのは気のせいと断じます。

だから、とつなげて、ミーシャさんに手を差し出し、

「アタシ達に出来ることを、しに行きましょう?」

「……はい」

笑ったような苦笑したような表情で、ミーシャさんはアタシのてを取ってくれた。

「ところで、その」

「はい?」

「えと、身長って私の方が高いんですから、負ぶってくれなくても……」

「うるじゃいっ!?!?」

32nd 襲撃・辛酸・機転

走れ。走れ。走れ。

立ち止まるな。

走らなければならない。

走らなければ退屈が襲ってくる。

タイクッ
地面へと埋没してしまう。

いやだ。そんなのいやだ。

吐き気がする。

だから。

走る。走る。走る。

そうすれば、前へと進んでいける。

加速し続ける。

だが貴様は、既に地に伏せている。

伏臥する愚狼のように。

「
ッ！！」

最後の一匹を太刀で切り伏せる。

振り抜いた直後に血糊を払う動作。連動して残身と同時に中段に構えなおす。

左手に術式をつくり、軽く指をはじく。同時に作動するのは探知の魔術。使用者にしかわからない固有の振動を作り出し、それを使

用者へと返す、まあいわゆるソナーみたいなもんだ。

……反応はなし、と。

は、から始まり、あ、が伸びる盛大な溜息を吐き、体を包む倦怠感に任せて近くの木の下に体を預ける。そのまま重力にひっぱられ、地面へとへたり込む。

相当数の狼たちを狩り続け、すでにあたり一面には赤しかないのである。

しかし、瘴気に感化され、変化した魔物は固定しない限り異常な速度で風化して、塵も残さず消え去ってしまうので実際問題、関係ないのだ。

ともあれ頬にべったりとくっついてる生乾きの血は気色悪い。ベリベリと剥そうとするが、手袋が仇となって剥れない。ガッデム。

「っ……疲れた……」

瘴気が入った魔物相手に大立ち回り。異世界人とは言え、それにこちらで過ごした期間も長い。瘴気というのがどれだけ危険なもののかもわかっている。

ソレゆえに今回は気が抜けない。未だ居るかもしれないという感じ。

探査魔術を使ってみたものの、安心は出来ない。それだけ危険なのだ。

しかし、

「この太刀……なんか妙に刃が冴えてるなあ」

何だか狼を切る度に刃の輝きというか、粘りが強くなっていく気がしたのだ。

そういえば元になった材料が材料だから使用者の念を受け取って強くなるのか？

「うはぁ……テンプレも程々にしておいてほしいなあ」

あながち当たっていそうで怖いのだ。ってか当たってるんだろうなあ。

元の世界では、まあ村正とか村雨丸とか、そこらへんの妖刀の類にカテゴライズされるんだろうけど、ぶっちゃけ物騒なことこの上ない。使用者が必ず不幸になるとかないよね？ないよね？

そんなことを思っていると、いきなり刃が震えた、気が、した。

「……ッ！？」

やばいと全身の肌が粟立った。しかし右手は剣の柄から離れず、吸い付いたように動かない。

え？あれ？ええええ？どういことなんだこれ！？、とかいろいろと戦々恐々していると直後、

「
」

体が、剣に動かされた感覚。

丸で手に吸い付いたかのように柄は離れず、神業の如く緩やかな曲線を描いた体は半身を開きつつも軸をぶらさずに刃を振るった。

……なん、だコレ！？

振るわされた刃の果てに何があるかも知覚できず、そのまま振り切られる。

直後、その一撃は確かな手ごたえとともに振りぬかれた。

「ギャガツ!？」

「ツ!？」

奇声。振りぬかれた後に落ちるモノは、

「小鬼ゴリン!？」

言葉に出すと同時、一斉に爛と光る瞳が現れる。

全てに『瘴気』による凶器を宿した双眸、その数は 凡そ五十。

「おいおい……うそだろ……?」

……如何言ってもタイミングが良過ぎるだろ!?

何故『鬪群狼』を倒した直後に現れる?それも見計らったような
タイミングで、だ。

舌打ちとともに振りぬいた刃を構えなおす。即座に魔力を纏わせ、
身体強化。

『小鬼』の唸り声はそれこそ不気味という言葉を超えて不快だ。

「あーくそ!グダグダ言っても変わんないだろ俺……!!」

言葉と同時。体内で『衝撃』の術式を汲み上げ、刃に纏わせたその直後。

「おや?何故こんな所に人間が居るのだね?」

凄まじい魔力が、身を吹き飛ばした。

こぼ、と、血が口端から流れ落ちる。

元から白い肌をさらに蒼白にさせ、杖に縋り付いているのはレイシア。

前方には戦士、錬金術師のバロツクとニーディア。

三者三様ではあるが、満身創痍の姿が共通している。

「術式、完了」

囁く様な声でレイシアがつぶやいた。

淡く光がともった指先には幾何学模様の円球型の魔術陣が一つ。

一振りして掻き消えたソレは、しかし彼女に確かな情報をもたらす。

「何かわかったか!？」

「……簡単なこと、だった。……そもそも、瘴気があるのは、『ヒト』に近い感情、又は、マナを瘴気へと、変換できる、術式を生産する、生産場がなければ……ならない」

微量ながらも口から血を吐き捨てながら、レイシアは苦々しく眉をゆがめる。

「……自然現象で、瘴気は起こり……得ない。……つまりは、作為がある」

手元の術式を解読し終え、彼女はつぶやいた。

「魔族の、侵略」

彼女が示した情報。立体映像に示されたソレは、

「おいおい……こりゃあヤベえぞ?」

尋常では有り得ぬはずの魔力と、人間型の生物を捉えていた。

「ぐあ……ッ!?!」

吹き飛ばされたとは知覚した時には既に、体に軋みが入り痛みに顔をゆがませていた。

咄嗟、否、ほぼ無意識に太刀を盾として構えておいたお陰か、直接的な打撃は無いが、

「がッ!?!」

背面一杯に広がる衝撃と同時に突っ切っていた風が無くなった。血を吐いている余裕さえない。すぐさまに悪寒を感じ取って右へと体を流す。直後、破碎音。

間一髪としか言い様がない。正に僥倖だろう。

即座に右手を当てて横に一回転。ついでに強化した足で蹴りをお見舞いするも意味はない。

バックステップで距離をとり、そこで漸く息をする。

「あ……えオッ!?!」

吐き出した息に引つ付いてたのは血塊で、肺にダメージが届いたのを自覚した。

「おやおや？ 死んでないんだね？ 珍しい、いやはや人間にしては強いねキミ。イイ感じだ」

ケタケタと笑う気配は明らかに人間のそれじゃない。
淀んだ瘴気を纏う魔力は

「魔族か……！」

「ご明察だね。いやあ正解だよ。良いカンしてるね君。」

笑いながら、しかして晒い、ソレは魔力を収束させる。

さして量はないはずの魔力が複雑怪奇な式を通り、莫大な干涉率を見せる　！？

「まあそれだけだね。　死ねよ」

「　ッ！？」

死ねるか、と想う。死ねない、とも。

だから体を動かさそうとして、しかし体は動ない。

故に体を動かさなくとも体を移動させる方法をする。

それは。

「爆……！」

腹部至近で起きた爆発がこちらの身を吹っ飛ばす。
更に肋骨が逝かれるが、死ぬよりはましだ。

「おや？ 良い機転だね、なかなか反応も良い」

「お褒めに頂き、ありがとさん……!!」

口の中に充満する血の味は錯覚ではない。
視界もぶれる中、しかし足は地面につきたて、前を見て、

「ひとつ、聞きたい」

「ん？ 質問次第では答えてもいいよ？」

「この一帯の瘴気は、お前らが原因、か？」

「他に何かあるのかね？」

雄弁な答え。それで確定だ。
つまり。

「ぶちかませウルド……!!」

「ん？」

此方が身を伏せた直後。
青の一閃が魔族を貫いた。

33rd 依頼貫徹

風を感じた。

青の閃光は優しい風を孕み、背後に在った幾本もの巨木を薙ぎ倒す。

繊維を引き千切る破砕音と、地面を割り砕く割砕音と、魔力が空気を叩く破裂音が連続した。

シンプルな、しかしそれ故に膨大な魔力を余さず通す術式は、以前己がウルドの弓に刻んだものだ。

彼女特有の緑と紫の魔力が吹き抜け、直後に正常な空気を持つてくる。

それは先程まで漂っていた筈の瘴気を纏めて浄化し、周囲一帯を正常にした。

ついでに俺も吹っ飛ばしたけど。

「う、おわあああああッ!？」

風に持ち上げられて吹っ飛んだ先には木があった。そう、ちょうど良い感じの太木が。

Q・それなりの速度で吹っ飛んでいた自分がそこへ突っ込むとどうなる？

A・叩きつけられます。

……ハイ大正解　!!

心の中で無慈悲な計算結果を拍手喝采全員総立で涙を流した直後。

「ぬがっ」

背中から直撃した。

一応背骨折れてるんですが、なんて泣き言は誰かに言うでもなく、
というか言っても通じる訳もなく。

激痛とともに肺の行動が遅れるのを感じて、数秒後に意識を失った。

「あ、あれ？ タツヤさん気絶してる？」

「……ちよつと威力間違えたかもしれないです……」

冷汗を掻いているのはウルド。その右隣でオロオロしているのが
ミーシャだ。

彼女たちの周辺の木々は薙ぎ倒され、周辺の草と地面は更地にな
っており、それらは全て先程放った一撃の余波だ。

短弓に刻まれていた術式に、神官の、瘴気を浄化する術式 つ
まりは清浄の術式を掛け合わせて放たれたソレは、ただの一撃で彼
女たちから精魂を絞りつくしていた。

「ちょ、あの、一気に魔力が……！？ 空っ欠なんですがコレ……
！！」

「なんというか、その、掛け合わせたのが、いけなかったんでしょ
うね……」

にぎやー！？と喚き立てるウルドと、対照的に今にも倒れそうな
ミーシャ。二人の少女は同時に地面へと腰を下ろした。

「うなー……ここ数年で一番緊張しましたよアタシ……」

「私も、ですよ……何なんだったんでしょう、あの魔族……」

苦笑しあう少女は、一頻りの気だるさと満足感を持つ。

「さて、タツヤさんを拾わないと……」

「というか、先程から一向に動いてないんですが……」

「あっはっは。まさかそんな、あの人が死ぬわけ……」

「……」

ないよね？

「タツヤさああああああん!？」

「ひひひひひひんっ!？」

殆ど悲鳴のような声で駆けずりだした少女二名は、虚脱状態とは思えない速度で向こう側の茂みへと突っ込んだ。

「……キミら、俺を殺す気なのか？ あ？」

酷く痛む腹を押さえながら、自覚のある目つきの悪い視線を少女二人に飛ばす。

別に腹を下したわけじゃない。原因は人。というか人害。
目の前にいる二人の少女は、きつちりと正座をさせられていた。
というか、こっちにも正座ってあるんだな。

「ごめんなさい……」

「あ、足が……」

「俺、重症なんですよ？ 肋骨ポキポキ逝っちゃってへ口へ口なんですよ？」

実際そうなのである。治癒術式を作動させてはいるもの、未だに完治とはいかない。

ちなみに治癒術式はミーシャに教えてもらった。非常に使い勝手が良いのである。むん。
ともあれ。

「流石にね、意識を取り戻す前に二人分の体重が体に降ってくるとは思わなかった……」

「ひいひいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ひう……」

まあ、弄るのはここまでにして。
取り敢えず足を崩していいよといった途端に前のめりに崩れ落ちる少女二人。慣れてないと正座は、きついのだ。ちなみにし過ぎると足が短くなるよ！

「ま、お仕置きは一時中断として、だ」

「……中断？」

「何か有るかねウルドクン？ んん？」

滅相も御座いましてと土下座しようとして崩れるウルド。いや、相変わらず面白い。

ともあれ。

「どーやら、辺り一帯の瘴気はあの魔族が原因だったらしい」

「む……てことは、まさか魔王軍の一員、ってことですか？」

眉間にしわを寄せたウルド。どうやらあまり好きな話題ではないらしい。そりゃそうだけどね。
だがしかし。

「そもそも今、魔王ってのは確認されてるのが問題なんだけど」

「……え？ 居るんじゃないんですか？」

「いやソレを調べるのも旅の目的だから」

おい。ウルドさん何そのムンク。面白くない。

しかし、実際に確認した人は居ないだろうね。というか確認した人間は死んでるんだらうけど。

……というか。そもそも専門家が居るじゃん。

「ミーシャは何か知らないの？」

「私、ですか？」

うむ、という感じで首肯する。

そもそも、魔王だ何だと言って、真っ向から対立するのは国家では、その国家の支えとは何だ？

答えは、宗教。

そもそも、カミサマにすぎる位しか、バケモノ相手に戦争をする時に兵士の士気や国民の平穏を保つ術がないんだろっ。

そういう意味では、宗教ってのもいいんじゃないかと思っ。

俺基本的に嫌いだけど。

「そう、ですね。私達では、特に魔王がどうか、という情報はありません」

「いや、そうじゃなくて」

「……？」

おお。可愛い少女の首をかしげる動作はやべエ。いやちよっとおじさん胸がドキドキしちゃったよ。

まあソレは置いといて。

「今までに、確認された魔王って居るのか？」

「っ！？」

「いやさ。魔王を見た人が居る、ってのは聞いたことがないし、そりゃ勿論一般人に居るわけもない。だけど、それじゃ余りにも信憑

性が低すぎる。確証があつたつてグレーゾーンだ」

人は、視覚で捉えられないものは信じられない。

それは幽霊だったり、噂であつたり、冗談であつたりする。

だが逆に、それらの規模が大きくなるとどうなる？

信じられないものは周知となり、いずれはそれが『在るモノ』、つまりは在るのが当たり前になる。

「今まで、つまりは歴代の魔王の中で、実在を確認できたのは何度あるんだ？」

「……ごめんなさい」

「……そつか。気にしないで良いよ、個人的な意見だったから。な？」

苦笑してミーシャの頭をぐりぐり撫で回す。

目を細めるところがまた可愛い。妹が居たらこんなだろーな！
というのは幻想を見すぎか。

横で何故かウルドが唸っているが無視無視。

それでもって話していて丁度良い具合に体力も回復。先程から地味に続けてきた治療術式のおかげで、殆ど骨も癒着した。

「っし。そろそろ復調したし、レイシア達と合流するかね」

「そうですね。というか、多分レイシアさん達もこっちに向かってますよ。鈍感なアタシが気付いた位ですし」

デスヨネ…… あんだけ馬鹿みたいに魔力をだしゃわかるよね。
むっ、もうちよつと魔力の制御を出来るようにならんな。

「まあ、俺死にそうだったもんなあ……」

「は？ 何を言ってるんです？」

「え？ いやだから、俺さっきのヤツとやってて馬鹿みたいに魔力出してたからそりゃわかるよなあって……」

怪訝な顔をしたミーシャが口を挟む。

「いえ、タツヤさん、さっきからずっと威圧感というか、なんだか闘争心みたいなものが溢れてるんですが……？」

「……はい？」

何のこと？

俺、さっきからずっと治癒術式しか使ってないよ？

いわれて、気付く。

先程から、そう、戦闘前に感じていた微かな魔力と、それらを押し包む莫大な闘気に！？

「くあはははははは！ ようやく私に気付いたのかね！？ 遅い、遅いぞ貴様ら！」

声が聞こえたのはそう遠くない位置。大木の上。

ヤツの手元には緻密な術式と、それを補って余りある程の綿密な術式がある。

「逃げ」

「『モジュールカタレスト
綿密なる知上の雷援』」

「！！！」

雷撃が、落ちた。

辺り一帯が放電現象により焼け焦げている中、一つの影が上空にある。

それは男だ。長いマントをつけ、豊かなひげを蓄えた、一見紳士風の男。

しかし、小太りな体型と頭頂部がハゲなために酷く雰囲気を貶めている。

「く、はは、はははあっははあはははは！！！！！」

私が、私が！

この私が祖体を殺したのだ！

「これで、これで私が次代の魔王となる……！！！」

何故ならば、

「私が　がつ、あ！？」

男を襲ったのは魔力。それも指行性を持たされた上に、外部を結界で覆った魔力弾。

それが近距離で爆発し、男の集中を乱す。

「なっ、が おち ！？」

「落ちろオッ！！」

体勢を崩したところに入るのは上からの打撃。
そして男は、無様に地面へと落下した。

鈍い打音が響くと同時、上空へいた魔族が地面へと減り込んだ。
おー。痛そー。

しかしその上から降ってくるレイシア。うわ怖エ。

「げ ば、あガッ！？」

血反吐を吐き散らかした魔族をミーシャが更に捕縛、ってか魔術で封じていく。うあ。えげつない術式だなあれ。

ともあれ上から降ってくるレイシアを風の魔術で受け止めて、そのまま下ろす。

「あれ？ バロックさん達は？」

「……背後から、魔物たちがいないか、殿として、迎撃中」

「あ、はいはい、りょーかい」

そういうことか。まあ、移動速度遅いだろうし。

取り合えずまあ、これからやることもあるので待ってはいられない。
い。

一歩離れた位置にある窪地へと足を進める。

「やあ、どもども魔族さん。コニチワー」

「ガッ、あ、おぐ……！？」

肺にダメージが行っているのか、上手く喋れない小太りの魔族。
うん、醜いね。

「どうも初めまして。一般人です」

「……え？」

「……………一般、人……？」

「一般人って、ええと、そのう……」

うるしやい。俺は化け物か何かか。
ともあれ、目の前で蹲り、封印されてる魔族へと言葉を放つ。

「前置きは省いとして。素早く静かに本題へ行こう。何で瘴気を作
ってた？」

「……」

だんまり。いやそれはそうでしょうけども。そんな這い蹲った、
まあ所謂赤ちゃんの『ハイハイ』状態でこっちを睨み付けられても
……その、なんというか。嘖く。

「ぶっおっ」

「なっ、何がおかしい貴様！！ この私をこのような状態にしておいて」

全部言い終えることはなかった。
何故なら、

「……次、何か、要らないこと、言ったら。……決る」

「「……」」

思わず俺と魔族の男 もうおっさんでいいや。おっさんが黙る。
なんせおっさんの顔のすぐ右横に、決れた地面があったから。

「え、ええとまあ、うん、その、早めに言ったほうがいいと思うよ俺。いや、まあ、何がとは言わないけど レイシアサーン？ ナーニ術式通シチャッテルンディースカー？」

「……決る」

「メスはダメえっ！？」

「……苦労しているのだな、人間とは……」

隣れみの視線で見てんじゃねえよっ！？

「……んでまあ、喋ってくれね？」

「……」

それから約十五分。説得に尽力しているものの。まったく口を開かねえおっさんである。

最後に喋ったのが憐みの言葉って。泣くぞ俺。

「喋ってくれば最低限命は保証する。これは絶対だ」

「……」

「いやホント頼むよ。マジで」

すでにレイシアさんがお冠なので非常に怖いのです。ともあれ拝み倒してもあまり意味はない。

「ミーシャあ？ こっちなのかい？」

「あ！ ニーディアさんっ！！」

錬金術師 ニーディアさんと戦士であるバロックさんが現れたのに、一番に反応したのはミーシャだった。まあ当たり前だけど。うん、まあ感動の再開ってのに準拠するし、いい感じ

「馬鹿がッ！！」

「え ！？」

声を上げたのはおっさんとウルド。いつの間にやらおっさんが空中へと飛び立っている。あれ？なん

でー？

「その神官、未熟にすぎるねえ！！ このまま逃れるとしようか！」

ゲラゲラ笑うおっさん。異様に腹が立つのはデフォルトである。

たしかに、上空である場合に攻撃方法は少ない。奴が嘲笑うのも理解できる。

だがしかし、一つ見落としているものがある。

「……、さすがに、魔力は、ない」

「薬剤は切れちまつてるね……」

「ひううう……」

お姉さんお二方はガス切れ。ミーシャは責任を感じて無意識に失神、と。

しかしまあ、俺の攻撃は、ただの剣戟や魔術だけじゃない。
腰にあるアタッチメントに触れる。

「カカカ、貴様らは危険因子だが、我等の総力を上げれば即座に消えうせる！！ その時を楽しみに待っていたまえ……！！」

そこにあるのは一つの槍だ。
ジャベリン

唯の一度。されど一度竜をも貫いた槍。

現想を宣言する。

それは貫通。

己の幻想を持って、この現想を塗り潰す
セカイ
！

「はははは……は？」

「貫け……『フリーナク駈贅する虞狼』……！！」

右手に握り、肩を始点として到達点へと加速しきる。

膨大な魔力を注ぎ込んだ槍は、浸緑の魔力を宿しながら大気を喰らう。

それは瞬時に、貫いた。

「がば、あ……っ」

「大人しく落ちろ！」

突き刺さった槍へと繋いでいる魔力を解して、術式を発動させる。それは圧。大気を用いた風の槌。

「ガッ……！？」

高速で落ちてくるおっさんを相手に、しかし体に力は入らず。

「だはあ……疲れたあ……」

流石に何も出来ないだろ。横っ腹に風穴開いてるし。

あとは大人しく待っているだけで良い。

後ろであたふたしている皆を尻目に、背後で鈍い打撃音が鳴った。一息。

「取り合えずまあ、依頼完了、かな」

……びぎっ。

ん？

あれ？ 檣に、ヒビが……？

34th 回想を終えたらニューゲーム(前書き)

ふ、ふひひ…… やつと家族間のゴタゴタが収束に向かいつつあります、無碍です。どうもお久しぶりです(土下座)

とりあえずぱっ、と書いたものですが、それでもよい、待ってたけどまあ拳骨五発でいい、等、優しいお言葉をいただけるのでしたらどうぞ読んでいただきたいです……ぶばっ(吐血)

34th 回想を終えたらニューゲーム

「うばあ……………」

寝台に転がってだらけた声を出す。

魔力の過剰放出による、『道』の筋肉痛のようなもので、全身に及ぶ軽い倦怠感と、節々の軋みが体を寝台に括り付けていた。

現在自分は、寝巻きのままで大の字に広がってくつろいでいるわけだが。

「あー……………どうすっかなあ……………」

最近増えたなあ、と自覚するまでに増えたため息は、零れおちるように口から洩れていた。

全身に巻かれた包帯と立て掛けられた短槍と太刀が、窓から射し込む陽光に晒された少々眩しい。

息を吐くのも億劫で、手を伸ばそうとしても疼痛とも痛痒とも取れない微妙な感覚が右手を襲い、窓に伸ばし掛けていた手を落とす。目にちらつく光が鬱陶しいものの、為す術も無く目を瞑る。

体を動かしたくねえー……………白衣の天使に包まれて生活してえー……………

……………。そんな欲望を具現してくれる魔術なんて無く。

そもそも何で、俺はこうなったのか。その問題点を探るために、回想に勤しむ事にした。

あの後。

多量の魔力を消費する魔術を使用し、上空の魔族を叩き落としたあと。

「聖印を四方に置いて、『道^{ルト}』作って、ええと後は……」

うんたらかんたらと呟きながら、小動物さながらにちょこまかと動き回るミーシャを見つつ、俺は全身を治癒していた。

そもそもが重症の体に鞭を打って竜殺しの『現想』を引っ張り込んだのだ。疲れないわけがない。

ひどく億劫な体と、使い果たした魔力により疲労困憊な『道』は、意識をそのまま手放して沈んで行きたいほどに気だるさを催す。

正直な話、怪我人兼病人の自分に何をさせるのかと。ニーディアさん後ろでニヤニヤ笑ってるだけだったし。絶対何か対抗策持ってただろあの人。

「……クレイン、無事？」

「……………寝たい」

口を開きたくない。魔力の枯渇とでもいうのか、全力で叩き込んだ魔術は体が精製・生成できる魔力の量を超し、生命力の低下を引き起こし、その補充をなすべく体が睡眠を必要としている。

……と、というのがこの疲れた体が寝たいという欲求のいいわけだったりする。

たりー、眠いー、ベッドー、というのが今の完全な欲求の集合だったりする。頼むから休みをくれ。

だがまあ結局のところはこれから戦闘の後処理をして、ギルドへ報告をし、それから宿に入ってから風呂に入って純白のナース^{ベツト}に飛び込むというのが最短ルート。

実情としてはボロボロの体に鞭を打って貰ったおかげで、ど根性M精神全開でやる気が増殖する、なんてことはなく、とりあえずは破壊した森林の再構築。

都合の良い事にミーシャの扱う治癒の魔術の中には、樹木にも効く種類があるらしく、現在はその術式にちょっと手を加えてレイシアが薙ぎ倒された木々の修復にあたっている。

元来戦闘で破壊された地形は放っておくのが一般的なのだが、今回の破壊は少々自然ではなく、また瘴気の影響もあるためにレイシアの研究、もとい善意においてされている。

「……いい感じ、消費が、少ない」

本人としてはご満悦らしい。結構いい笑顔だし。

さて、そういうことで戦闘後の処理は大して問題ではない。

一番の問題は

「ぬ、ぐあっ。はっ、放せ下等生物！ 私にこのような無礼な振る舞いを……！！」

「ああはいはい。下等でもなんでもいいからちゃっちゃんと封印されてるよー」

「んと、んっ。聖印の配置、完了しましたっ」

「あいよ、聖水で周りは浄化しておいたからねえ」

「シンボル
象徴としての十字剣も、配置を終えました」

もがくおっさん。取り巻くパーティー。

どうやら魔族のおっさんを魔術で拘束して連れて行くらしく、結構彼らはノリノリだ。特にニーディアさんとか凄い笑顔。怖いわ。

「……怖いですよ、というか何ですかニーディアさんの笑顔。解剖とかするんじゃない……？」

ウルド、君の予想は当たりそうで怖い。

まあそんなことはともかく、そろそろ全身の応急処置は完了しそうだ。

結構骨がポキポキ逝っちゃってた訳だが、とりあえずの癒着、接合は終了。

全身の筋肉帯の修復は不完全で疲労も強いが、動けるようにはなったので立ち上がる。

「あー、魔力空っ欠だわ……クラクラすんなあ……」

あと軽い嘔吐感も。調子が悪いことには変わらない。

が、これで移動ができるようになったので、軽く体をほぐしてから槍と太刀を装備する。

「ちよつ、タ、あいやクレインさん！？ まだ立つちゃいけませんよ!？」

「いや、大体の所は直せたからだいじょーぶ。それに此処に居たら安心して休めないし」

ウルドの額に手を当てて黙らせ、その隙にコンパスで方角を確認。足で軽く行き先を示す矢印を書いて、と。

これで大丈夫だ、と後ろへ振り向き、

「ニーディアさん？ そろそろ撤収しま」

「フヒヒ」

よし逃げるぞ。

即座に固まった意志はウルドの首根つことレイシアの腕を掴み、
体力を削って風の移動魔法で森の出口まで高速で移動する。

「ぜえ、ぜえ、はあ、はあ……！！」

「……………はっ」

「え、あの、え？ いったい何が？」

全速力で逃げました。いや、撤収しました。

きっかり持ち物は回収してるのでたいした問題はない。というか
何もなかった。

「ふう、夢か……！」

「いや何がですか！？ というか何でニーディアさんやバロックさ
んとかを置いてきちやってるんですか……！」

「……魔族の、解体ショー。……見たかった」

レイシアの言葉にウルドがビクウ、と背筋を伸ばし、そして沈

黙した。

誰も進んでグロシーンなんぞみたかねえよなあ。

「ま、まあ、取り敢えずはそろそろ出口だから、リヴォルグが居る筈だ。そしたら街に戻って、ギルドに行って依頼終了だな」

そう言っ て前に足を出した直後。

「おろっ？」

足の感覚が消えた。

そして次には視界が明滅を始め、

「タツヤさん!？」

「……タツヤ!？」

あ、いつものパターンですねコレ、と思考する前に、意識が落ちた。

「うん、まあ、あれだね!」

自業自得だね!

「……自業自得」

「ばふうっ!？」

肺の空気が全部出た。

呼吸困難と筋肉痛で悶えていると、ベッドに誰かが座る気配があった。

「けへっこは……ごふっごふっ」

「……体の、調子は？」

「ごふっごふっごふ……」

「……」

「ごふっ、げほっげほげほ……ほげあ！？」

「……喋れ」

レイシアさん！ 何で殴るのさ！？

顔がむっつりと怒り顔だし、何かしましたかね俺！？

「……体の、調子、は？」

「絶賛不調であります！」

体ビッキビキだしなあ。動かしたくねえ。

そこで何かを得心したのか、レイシアは、

「……そこで、私が改良した、樹木用の治療術式、を……」

「謹んでお断りさせていただきますレイシア様」

土下座できないので両手でレイシアを遠ざける。

何処かしら不服そうなレイシアを見て、先ず口を開いて出たのは、

「んで、依頼の方は？」

ん、と彼女は頷いてから、

「……完了した。……領収は、こっち」

「ういよ」

彼女が差し出した紙切れを手に取り、そこに並べられた補足事項を幾つか読んで行く。

今回の依頼の終了、報酬の金額・付属品、現在の兆候、

「……んん？」

最後の一項目。次依頼について？

「……え？」

次の依頼？

……。

まだ、休めないのか俺……。

「うだあ……」

「……タツヤ？」

奇妙な声とともに、俺はベッドの中へと落ち込んだ。

35th キャラクター能力

主要登場人物の紹介でございます。
時々更新するかも。

パラメータ説明

最大値が10。最低値が1。

名前：タツヤ または クレイン

年齢：16

クラス：魔剣士

体力：7

力：6

魔力：5

速さ：8

技術：6

防御：5

耐魔：4

幸運：2

構成速度：5

スキル

剣術LV7

魔術LV4

体術LV6

医療LV3

技能

救世主：独立

支配されずにいる救世主。

基礎能力地すべてに+1。

『人類の』尖兵。

個人属性：加速

世界の時間軸から独立する事の出来る個人属性。

力、速さ、技術、構成速度に+1〜2の恩恵。

武術：全般

体術、棒術などを広く修めた総合術技。

武器を使用する場合技術に+1。徒手空拳の場合+2

魔術：外法

個人での学習が多い魔術。

個人属性を未だ使えないものの、構成速度に主眼を置いた実践的な魔術。

戦闘時、構成速度に+1。

雑学：多岐

様々な話題を網羅している。

奥様方などの交渉の成立度UP。

名前：レイシア・ウェルス・アーテン

年齢：18

クラス：世界魔術師

体力：4

力：3

魔力：7

速さ：5

技術：6

防御：3

耐魔：6

幸運：6

構成速度：7

スキル

魔術LV7

体術LV3

医療LV5

化学LV6

技能

魔術師：世界

個人属性を持たない魔術師。世界に普遍する物理現象を基礎にした
架空現象を起こす人。

魔力に+1

無口：性格

あまりしゃべることがない。

誘惑耐性に成りうる事がある。ただし戦闘のみ。

化学：趣味

研究者の側面を持つ。ただしほぼ独学。

化学、医療のスキルLVに+1。

術式圧縮：個人

己の体液を凝固させ、セミパレルアーカイバ高圧術式を可能とさせる技術。

これを使用した場合、一時的に体力-2。構成速度を無視してその
場で大規模術式を展開可能とする。

名前：ウルド・フェルイア

年齢：17

クラス：獵人

体力：5

力：6

魔力：3

速さ：6

技術：7

防御：5

耐魔：4

幸運：5

構成速度：4

スキル

魔術LV3

体術LV6

医療LV4

短剣術LV6

弓術LV6

投擲術LV6

技能

武術：奇襲

一撃離脱を主眼にした技術を習得している。

此方が先制攻撃を加えたとき、相手のダメージに1・1倍の補正。

魔術：個人

世界魔術と構成速度に主眼を置いた魔術。

戦闘時、構成速度に+1。奇襲時には+2。

投擲術：野生のカン

テキトーに獲物を投げる術。それだけで冒険者になろうとした。

戦闘時、遠方からの投擲の場合技術に+1。

弄られ：性癖

天性の下っ端。最高の弄られ。

ある意味で羨ましがられる。非戦闘時の交渉において成功率+35%。

36th 大会前日

えー、俺が元居た国、日本では、世界で一番過労死が多い国であります。

元々、外国に比べて学習期間・時間共に非常に多く、また会社での労働時間も多い。

少々昔では黄色い猿イエローモンキーと馬鹿にされたものだが、コレは納得できなかった。

が、現在で言われる、エコノミックアニマル経済的動物というのは十分に納得できる。仕事に没頭し続ける生き物、ってことだ。

そんなこんなもあり、そう遠くない過去にほとんどの企業に週休二日制が組み込まれ、ある程度労働状況の改善、もしくは労働濃度の圧縮が為され、経済的動物という哀称を返上できた現在社会。

俺はそんな場所で、学生としてそこそこ勉学に明け暮れていた。他国から『勉強しすぎ、ちょっと自主性もたせるや』とお叱りを受けている学生たちの一人として、だ。

しかし、だ。

この世界で言う『傭兵』、または『冒険者』等に連なる職業は、当たり前の事だけど元の世界であった定期的な休みというものが無い。

傭兵や冒険者の中での、大規模なチーム、団体に所属している場合は、一定のノルマと休みを設定されているらしいけど、生憎とそういうものが性に合わない。

結局、個人や数人単位でチームを組んでいると、自然と事務処理も誰かに固まってきた、休みがなかなか取れなかったりするわけで。

「何でお金が潤ったのに、休みがないんだ……」

ベッドの横にある椅子に座り、机の上に重なった書類を見て呆然とつぶやいた。

現在は昼の手前。早朝に起きて、書類をまとめようかなーなんて軽く考えていたのだが、何故かもう4時間も書類を処理し続けている。

おかしい。ギルドへの提出書類はずっと前に書き終えたというのに、何で、何で書類が……！

「あ、タツヤさん、こっちの領収も頼みますー」

嘆いて、頭を抱えた直後にバサリ、という音。
思わず頭に血が上り、叫ぼうとして、

「ウルドお……おま」

「……タツヤ、こっちも」

追加でどさつと。書面の名前は『激烈買物！』^{ショッピング}貴女の望む最上級の魔道具を！
なめてんのか。

「ぶるうあああああああああああああッ！！！！！！」

俺は、掛け声とともに机をひっくり返した。

「シクシクシク……」

「……痛い」

「自分のことは自分でしなさい！」

微かに水蒸気を発する俺の拳骨と、泣きながらペンを走らせるウルド、そして無表情に書類を処理するレイシア。

数十枚かの書類は既に整えられ、残るのは彼女たちの数枚程度だ。時刻は正午を回った時間。

まだ昼食は食べていないので、レイシアとウルドの処理が終わったら町へ繰り出すつもりである。

ただ、町へと行く理由はひとつではない。

開催日が間近である、武闘祭の情報を集めるためだ。

「ま、情報つつつても、書類仕事が終わるかどうか……」

「うーメンドくさいですよ……」

「……疲れた」

明らかにウダってる感じだ。しかもやる気がないだけ。

……これ終わんのか？

どうだかなあ、と内心で声を出して首をかしげる。

正直な話、とっとと片付けて物資の補給をしたいのだが、まあコイツらが書類を片付けなきゃどうにもならん。

「あー、まあ何だ、それ終わったら町に買物行くぞー」

「さ、やりましょうか！」

「……五分で、終わらせる」

……なんでやる気出してんだよ。

よくはわからないが、あの後凄まじいやる気を出した二人に連れられ、商店街へと来ていた。

頻りにふんふんと力強く頷いているのに少々首を捻るが、俺程度の女性経験で計り知れるような女心は存在しないので無視する。

ともあれ、さっさと昼食を済ませてしまった二人に手を引かれ、着いた先は露店街。

あれこれきやつきやうふふと騒ぎながら店を　　というか店の主人の勘定を　　蹂躪しつつ、俺はちょこちょこマダム達から情報を得ていた。

曰く、ギルドからS＋ランクの冒険者や傭兵が参加するとか。

曰く、優勝者は国の重鎮に迎えられるとか。

曰く、既に優勝者は決まっているとか。

めばしい、とは言えないが、色々ときな臭い話や、奥様方なりの考察を聞いたのでそこそこいいと思う。

既に出場登録は終えており、個人枠と団体枠ともに出場は確定だ。

一日目に個人枠、二日目に団体枠。

個人枠は俺のみ出でてみる。優勝賞金は百金貨。副賞としてこの町に滞在中、幾つかの特権と、領主への嘆願権を得ることが出来る。代わりに、というのはおかしいかもしれないが、領内に滞在時、壊滅的危機が起こった場合には緊急戦力として駆り出されるけど。

まあ、どうせギルド所属者にとってはそうだった場合に助力をす

るのは大原則なのではあるが。

ともあれ、現状では明々後日に開催される武闘祭に向けて性急にすることもないので、ゆっくりまったりとだらけている訳だが。

現在、太刀と槍はファニーさんの所へメンテナンスに出している。
メンテナンスカスタム
正確には、槍の場合は修正ではなく改善らしいが。

元々、俺が改造したものの為、それなりの強度はあったらしいが、元の槍がボロであつたのと、連戦で疲弊しきつた金属と基幹部は多大なダメージを受けていたらしく、改善、もとい回収して別のものと鑄造し直すそうだ。

太刀の修正は無料だが、流石に槍の改善はそれなりにお金を支払うハメになった。いや、善意でもらっているのだけど、お金が、お金が……！

「あ、これいいですね！　かわいいなあ、でも熊はちょっとトラウマが……」

「……これ、いい感じの、魔力……」

「……」

今度からお小遣い制にしよう、と決める。うん。

さて、現在の所持金額が、諸々の諸経費を全て差っ引いて残った額、凡そ二十三金貨。

前の依頼での報酬とも合わせてこれなので、ギリギリ黒字、下手すりゃ赤字だ。

無論、その辺の配慮もあつての依頼だったんだろうが、それにしただっていきなり魔族との交戦があるだなんて思うはずがない。

既に書類の申請は済ませたので、後日、追加での報酬や補償金もらえるだろう。

しかし、前回、前々回でのレイシアの『セミハレルアーカイバ高圧術式』を、作り直すための触媒が必要になるため、それも出費に加算。

加えて、ウルドの矢も買わなければ。まあたいした出費じゃないけど。あとでレイシアが術式加えるだけだし。

他は携帯食料の補給、夜間での灯りを保つための照明剤 e t c ……。

様々な物の補給は既に確保したけど、やっぱりお金は厳しいなあ、という感じ。

だが、

「しかし、しかし、だ！ 既に武闘祭で優勝すれば赤字なんて目じやないぜ、一気に利益確保じゃああああ！！」

「……………」

「すみませんでした叫ぶのやめるんで無言で避けるのは勘弁してください」

ジャンピング土下座。いや確かに周囲の目がすごく痛いけどさ。そそくさとその場を離れようとする二人の後を、すごすごと小さくなりながら追っていった。

「あつはっはっは、それでこっちに駆け込んだってワケかい？」

「……………不本意ながら」

「恥ずかしかったんですよ……」

レイシアは仏頂面で、ウルドは赤面して俯きながらそういう。

表にある万屋から、奥の扉に入った応接室。

恐らくは滅多に使われないであろうこの部屋を、今回は俺たちが使わせてもらっていた。「あっはははははっ、ひっ、ひいっ……くっくっく……」

「そんな笑うことですか!？」

凡そ二十畳はあろうかという広い部屋。

天井や壁には所狭しと武具がかけられており、観葉植物として置かれているなにかはぬるぬるとぬめっていた。

灰色のレンガと思しき物質で敷き詰められた床に、部屋の中央にある広い絨毯。その上に二対のソファと大きな木製の机があった。

俺の横にあるソファで爆笑しているのはファニーさん。

相も変わらずな、ラフというには実直すぎる仕事姿で腹を抱えて笑ってる。

「そろそろ勘弁してください……」

「くっく……まあまあ、いいじゃないかい、若くってねえ……ぷっ」

頂垂れつつ言うも、どうやら笑いの花はまだ枯れていないらしい。こちらの顔を見る気配がしたのと同時に、押し殺した笑いが増加していた。畜生。

ともあれ、今現在改修、改善を一段落し、やることもないので

雑談に興じている。太刀は刃を少し研ぐ程度で良いらしく、既に終わった。

代わりに槍は、基幹部である木の部分を全て排除、そのまま何かの触媒に提供することで割引を受けた。

一応は俺の術式を刻んでいるため、最低限の触媒にはなるだろう、とのこと。

先端部の刃は、そのまま鑄つぶして別の金属と鑄直し、また加工するとのことだ。

早ければ今日中、遅くても明日の早朝には完成するらしく、大会には何とか間に合うだろう。最悪、何か借りてくればいいし。

現在は太刀の修繕が終わり、槍の刃を鑄直すために特殊な『装置』キカイに掛けて刃の部分の金属塊にしなおしているらしい。

あと数十分で終わるそうだが、何もすることがなく、偶々顔を出した俺たちと談笑中、というわけだ。

「やー、にしても、槍が直るとは……」

「直すんじゃあないさね、また作るんだよ」

軽く笑いながらファニーさんは人差し指を立てた。

そのまま肩口のところでくるくると指先を回しつつ、

「そもそも、お前さんが『創造―想像』したものらしいじゃないか、アレ。手順を聞いてもアタシにゃよくわからないが……創り方としては少々むちゃくちゃだねえ」

「うぐつ」

更に彼女は苦笑して、

「アタシ達、鍛冶に携わるヤツらより、どっちかっていやあ錬金術の方に近いが気がするねえ、アタシは」

そもそも、と前置きをして、

「元となった武具・防具の強度やら何やらにかなり能力の制限がかかる、ってんなら、完全じゃ錬金術じゃあないねえ。まあ、だからこそアタシの方法も何とか使えるわけだが……そこらへん、魔術師の嬢ちゃんはどう思うない？」

「……あぐ？」

「レイシア、お前ちよつとお菓子を離して……」

未だにもぐもぐと口元をせわしなく動かすレイシア。いや、確かに甘味はそこそこ高いからあまり買ってないが……。

クッキー状の甘味をすべて飲み込み、満足げな顔をして、レイシアは軽く唇を開いた。

彼女はいくらか饒舌な言葉で、笑顔のまま言葉をはじき出す。

「……魔力における個人の物質変換は、土人族ドワーフの鍛冶師達に技術として伝わっている。……けれど、あれは土人族特有の精霊との親和性、魔力の性質によるもの。……錬金術はタツヤとの技術において近しいものはない」

ざっくりといい終えると、レイシアはまたテーブルの上においてある甘味に夢中になった。言わずもがな、ウルドは先ほどから一言も喋らず食べ続けている。……淑女の嗜みとか少しもないんかい。それを見てファニーさんは苦笑して、

「まあそうさね。そもそも、錬金術自体、屑鉄からされ金を作る、なんて謳われちゃいるが、実際には金を掘ったほうが何万倍も得だしねえ。ま、アタシにゃよくわからん」

からから、と快活に笑ったフアンニーさんも、テーブルの上に置いてある苦い飲み物に手を伸ばした。茶色いそれはコーヒーによく似ているが、インスタントのコーヒーよりも味がひどい。なんていうか、コーヒーにクッキングパウダーをありったけぶち込んだような味だ。正直飲みたくないのもそのまま手をつけてない。

「かぁーっ、このめちゃくちゃ苦いのがイイんだよねえ……！」

かなり豪快だ。しかも満足げな笑顔だし。

ともあれ、これ以上ここに居ても迷惑になるだろうし、それ以上に明日に向けて体調を整えておきたいので、お暇することになった。しかし帰り際に、太刀だけを預からせていただいた。

少々不満げな顔ではあったものの、刀身が傷つくことはないだろうし、了承を得た。

今回の大会では槍で勝ちあがるつもりであつたのだが、一応太刀も持つていくことにする。

何があるかわからないからなあ。

37th 武闘祭・開始

選手控え室、というのは、予選通過をしないとどうやら劣悪な環境らしい。

らしい、というか、今実際に体験しているわけで、現実逃避を行いたかったのですがまあ無理だ。

四方を石によって固められたそこは、無骨であり、冷えた印象を受ける寂しい場所だ。

その場所では、三十二名の冒険者、傭兵などがこれから行われる予選に向けて準備をしていた。

傷有りの体を自慢気に見せ付ける輩がほとんどで、またそのほとんどがむさ苦しい男であつた。

正直、苦しい。いや、何がとは言わないが。

「……」

本来、魔力や魔法、マナ、気、異能や超能力と言った、物理法則外の『何か』の恩恵を受けられない格闘戦クロスレンジにおける、打撃に乘せられる威力と言うのは、筋力+体重+身体制御術ウェイトということになる。

そして、その威力というのは単純に獲物を持った場合の威力にも直結するため、筋力を鍛えるのは戦闘技術を持つものには必須の作業だ。

そして、そこに高所からの振り下ろしによる重力などの利用も必要なため、背の高いもの、そして筋力があるもの、体重が重いもの、となる。

故にこそ闘いを生業とするものにはガタイが良い者が多い訳だが、

「ムッサ苦しい……」

聞こえないように、小さく、非常に小さく舌打ちも交えての不満がこぼれる。

身長では一般的にはそこそこ高いほうだと自負しているものの、こういった戦士の中では小さいなのだ。

だからか、こう、おっさんどもから送られてくる「ハッ、餓鬼は家でお寝んねしてな？」的な視線がウザったいことこの上ない。

中には比較的小柄な人も居るのだが、大抵そう言った人は著名人であり、今回の俺の様にギルド推薦を蹴って出場した訳ではなく、推薦の恩恵を受けて本戦からの出場のため、ナめられることもない。

無論、本戦参加からの方が楽ではあるし、ナめられることもないのだが、諸事情、又、個人的な事情にもより予選からの参加となった訳で。

一々ソコへ不満を挟むほど子供ではない物の、こうもナめられていると腹も立つ。

「おや？ 誰だここに餓鬼呼んだのは？」

おいおい、と声がかかり、ゲラゲラと粗野な笑い声に包まれる。自分の額の筋肉のみで圧力が皮膚をぶち壊しそうだ。

とは言え、今回予選からの参加にはとある勢力からの依頼の条件も含まれる。

だからこそ、目立つ訳にはいかない、が、

「御大層な槍まで背負いやがって、使えんのか？ ああ？」

爆笑。

何か嫌な音が額からするが、俯いて顔を晒さないことで耐える。
それを怖気づいたと取ったのか、更に笑いの度があがる。

「怖くなつたのかなあ？ 家に帰ってもいいんだぜえ？」

ドっ、と嘲笑が広がる。

……ああくそ、早く試合始まんねえかなあ……！

心の中でひたすらにムサイ野郎共をボコる想像をしつつ、俺は静かに試合のゴングを待っていた。

「はあ？」

俺の口から出たのは若干語尾が上向きのイントネーションとなる疑問形だった。

ファニーさんの鍛冶場から帰ってきてから十分ほど、俺の部屋の前にギルドからの使者が突っ立っていた。

黒のローブを着こみ、頭から足まですっぽりと姿を覆ったその姿は密使というのが適任だ。

何とも影が薄いのは何か特技か魔術か、良くは分からないが非常に気配がつかみにくい。

「アンタ、誰？」

続いて出る言葉も疑問系で、おまけに言うならば俺の首の傾げもついていた。

ちよつと酒と肴でも買つて軽く月見でもしようかと扉を開けたらこの人物がたつていたのである。

疑問詞が出ててもまったく問題はない。疑問しかでないけど。

「……コレを」

「……は、はあ」

男か女がよく分からない声で渡された茶封筒を受け取る。
繁々と手に持ったコレとローブ姿を交互に見て、

「で、ええと、誰だアンタ？」

「……では」

俺の言葉は華麗に無視され、ローブ姿は一つ会釈をこちらに送り、

「は？ いやちよつと待つ」

言い終える前に扉が閉められ、急いで扉を開いた時には人影は無かった。

何だっただんだ一体。廊下を走る音も魔術が使われた発光現象もなかったぞ。

「まあ、考えてもしゃあないか……」

はあ、とため息をひとつつき、扉を閉めてベッドへと戻る。月見という気分ではなくなった。今日の夜の楽しみはナシだなあ。はあ。にしても、手に持った茶封筒は何の変哲も無い代物のようで、特にコレといった仕掛けもないようだ。重さからして何か変なものが

入っているとも思にくい。

部屋の明かりにさらして見たり、軽く魔力を当てて探ってみたりもするが何の反応も無い。

「さて、中身は、と……」

上口を裂いて中身を取り出す。

出てきたのは何やら妙に上質な一枚の紙だった。
そして出てきたのは

「……はあああああああ!？」

『これより、第三予選を開始します。第三グループの方は、ステージへと登場してください』

「お？ 行くか行くかあ。腕がなるぜえ」

気付けば、既にそこその時間が経っていたようだった。

あれから十数分ほど考えに没頭していたのか、既にこちらへと意識を向けてくる輩は無く、がっはっはっは、見たいな感じでそろそろと出て行く戦士一同。

やっと出て行ってくれた。いい加減額から自然出血するぞ畜生。

と、そんな感じ怒り心頭ながらも俺もステージへと登る。

ステージは石畳で出来た円形のステージで、周囲とは五十センチほどの高さがある。

「ぬお……っ」

と、出た途端、凄まじい陽の光に一瞬目が眩む。

現在の時刻は午前十一時。既に第二予選グループまで終了し、残るは俺が所属する第三グループと、最後のグループである第四グループのみだ。

この武闘祭では、ギルド等の推薦から八名、予選における各グループからサドンデス方式で二名まで絞込み八名、この計十六名で本戦をする。

今回、俺も本来であればギルドからの推薦を受ける筈だったのだが

「ったく、面倒だなあ……」

一人ごちても何かが変わるわけではない。隣の戦士風な男が怪訝な目を向けてきたが気にしない。

少々ザワザワと騒がしい間が流れ、アナウンスの声が響く。

『それでは、各選手は事前に割り振られた数字に対応する場所へ移動してください』

これまたそろそろと皆が移動する。

この大会では公平を期す為、大会側がランダムで登録選手の開始時の場所を決める。何かしらの意図は絶対に入ってくるが、それはもう仕方が無い。

俺は確か二十七だったよなあ、と思いつつ、二十七、二十七と探して、自身の位置をは太陽を背にした、なかなかのポジションだと認識する。

そして

『それでは、準備の程はよろしいですね。では、試合開始!』

拡声魔法で広がった声と共に、俺は前へと踏み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9072h/>

加速する現想譚

2011年10月8日02時01分発行